

石崎 曲り田遺跡

－第3次調査－（上）

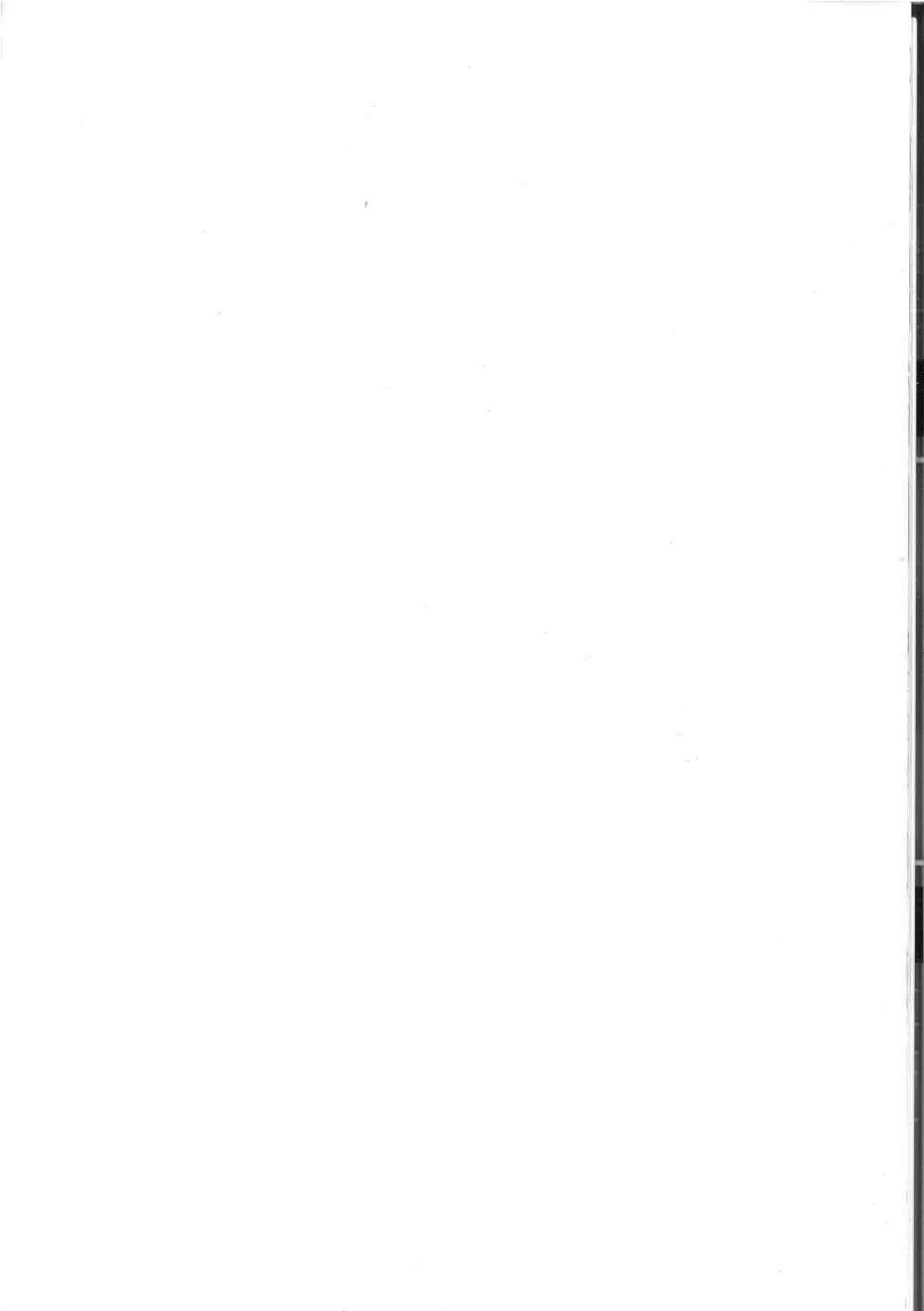
糸島地区消防厚生施設組合 斎場建設に伴う文化財発掘調査

二丈町文化財調査報告書

第27集

2001

二丈町教育委員会



石崎 曲り田遺跡

—第3次調査—（上）

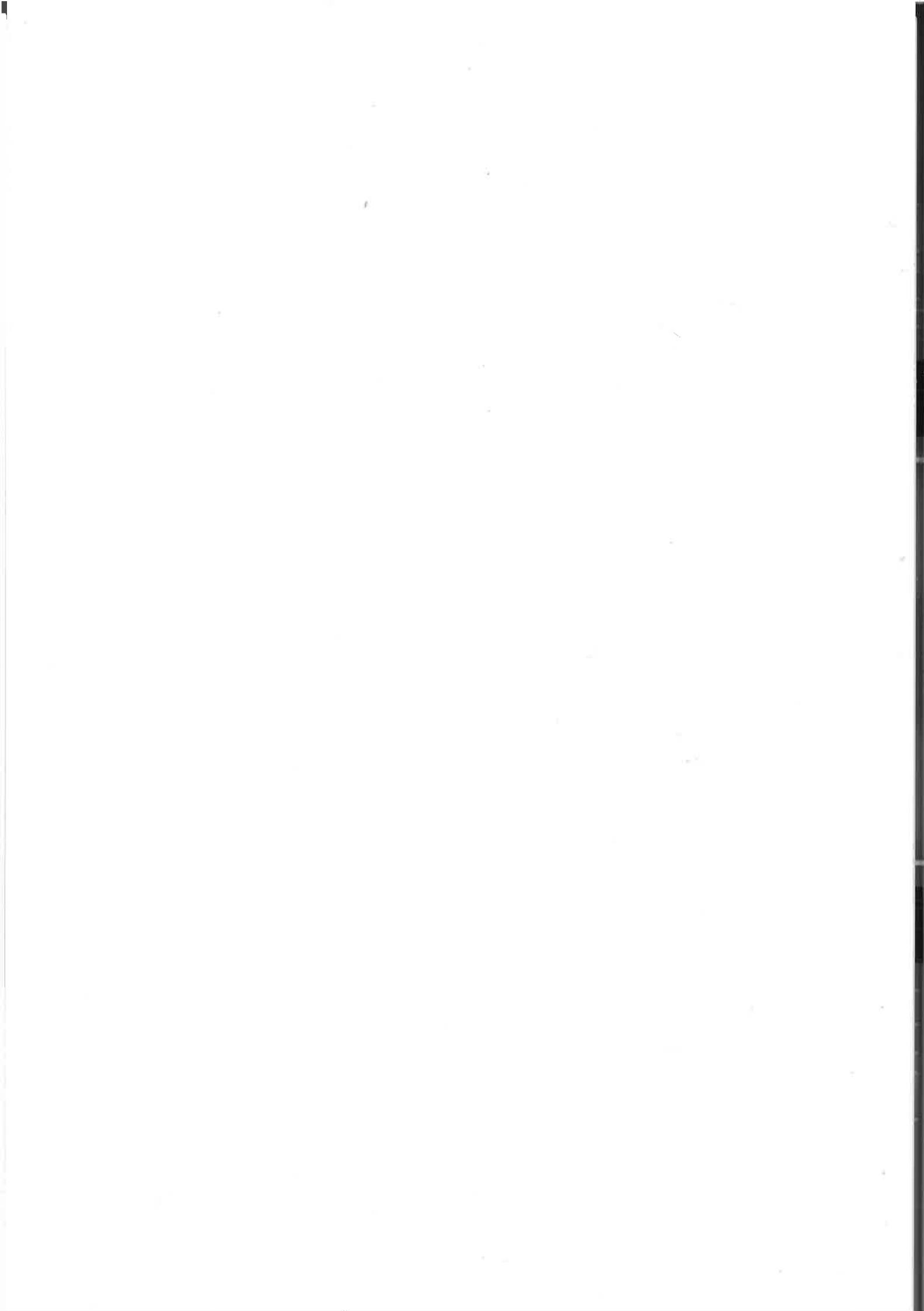
糸島地区消防厚生施設組合 斎場建設に伴う文化財発掘調査

二丈町文化財調査報告書

第27集

2001

二丈町教育委員会

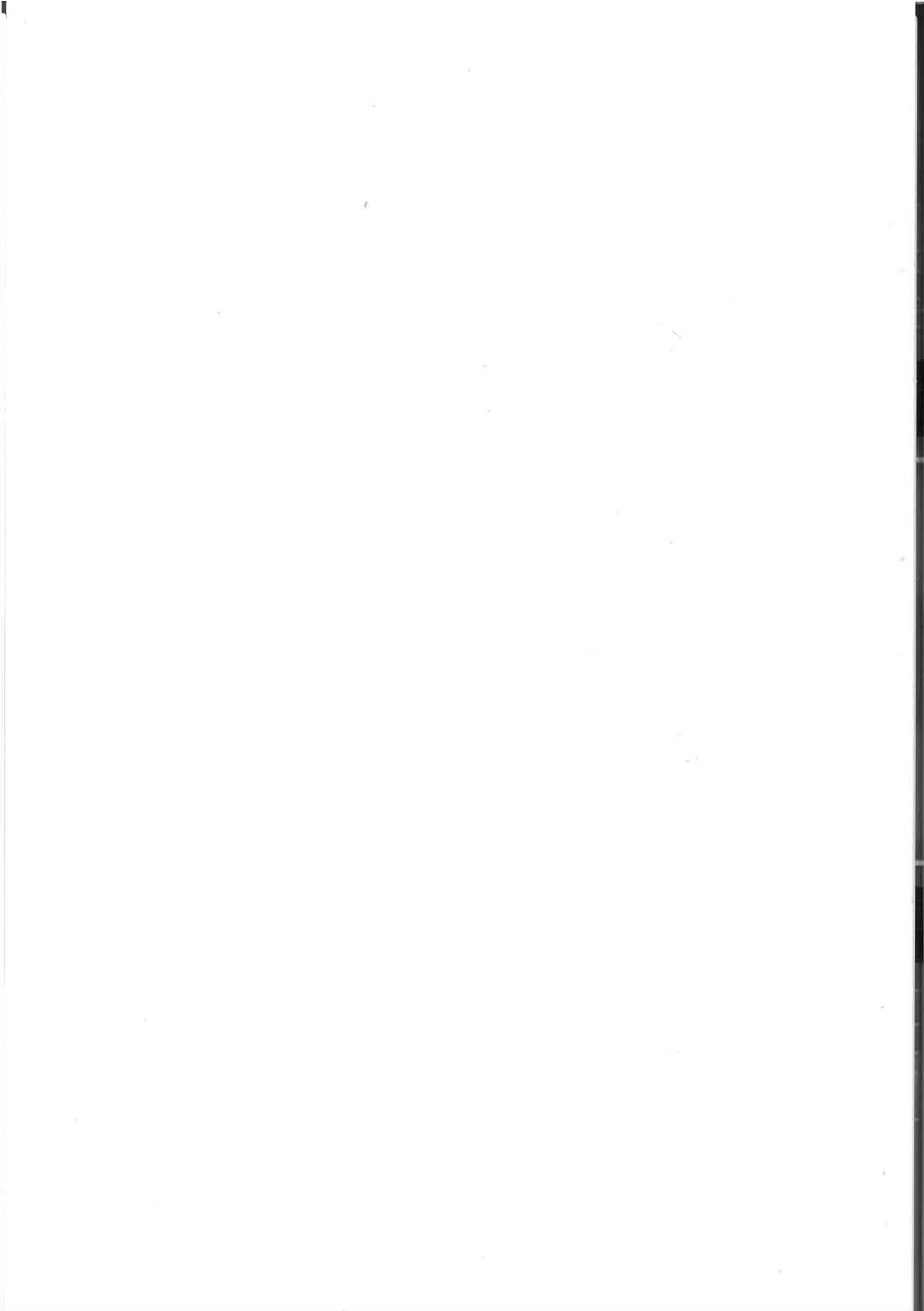




I 区 2 号住居跡



遺物出土状況



序

初期稲作文化の集落として知られる石崎地区遺跡群一帯は、住宅化の波もなく、未だ、田園風景の残る地域と言えます。同地では、これまでに稲作開始期の集落（曲り田遺跡）、支石墓を含む墳墓群（矢風遺跡）、水田（大坪遺跡）などが相次いで発掘されており、我が国の弥生文化を解明するには絶好のポイントであると考えられてきました。

今回、糸島地区消防厚生施設組合糸島斎場建設に伴い、昭和54年度に発掘された曲り田遺跡の隣接地を調査する事ができました。また、縄文から江戸時代という多岐にわたる遺構が検出された事は、同地が長年にわたり、本地域の中心域であった証しであり、弥生研究の上で最重要地域である事の再確認ができたものと言えるでしょう。

本調査での特筆すべき成果としましては、我が国初の出土となった「青銅製鍬先」が挙げられ、他に類をみない形式は、弥生時代の青銅製品の新資料となりました。また、奈良時代から平安時代の遺構面からは、多量の輸入陶磁器とともに「西海道」や整然と建ち並ぶ建物群が検出され、同遺跡一帯が古代においても拠点であった事が裏付けられたと言えます。

今後、本遺跡の調査成果が、糸島のみならず、我が国考古学研究の一助となれば幸甚であります。

平成13年3月30日

二丈町教育委員会

教育長 小川勇吉

例　　言

1. 本書は、糸島地区消防厚生施設組合糸島斎場建設に伴い実施した埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は、二丈町教育委員会が主体となり、平成9年10月1日から平成11年3月31日まで実施した。
3. 本書に掲載した遺構図の実測は、古川、津国が行った他、(株)埋蔵文化財サポートシステム、(株)アジア航測に委託したものを使用した。
4. 遺構の写真撮影は、古川、津国が行い、空中写真撮影については、(有)空中写真企画、東亜航空技研株式会社に委託した。
5. 本書に掲載した遺物の実測は古川が行い、志摩町教育委員会河村裕一郎氏の協力を得た。
6. 本書の執筆ならびに編集は、古川が行った。

本　　目　　次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1.2
II.	遺跡の位置と環境	3
1.	遺跡の周辺環境	3
III.	調査の記録	
1.	概要	9
2.	I区の調査	10
a.	検出遺構	11
b.	出土遺物	16
c.	小結	36
3.	V区の調査	37
a.	検出遺構	37
b.	出土遺物	42
c.	小結	75
4.	VI区の調査	76
a.	検出遺構	76
b.	出土遺物	80
c.	小結	83
IV.	調査のまとめ	83

挿 図 目 次

第1図 繩文・弥生 主要遺跡位置図 (1/50000)	5
第2図 石崎地区遺跡群 遺跡分布図	7
第3図 調査区設定図	8
第4図 石崎丘陵現況図	折り込み
第5図 I区全体図	折り込み
第6図 I区下層1号住居跡実測図 (S=1/60)	10
第7図 I区下層2号住居跡実測図 (S=1/60)	11
第8図 I区下層3号住居跡実測図 (S=1/60)	12
第9図 I区下層4号住居跡実測図 (S=1/60)	12
第10図 I区下層1号・2号土壌実測図 (S=1/40)	13
第11図 I区下層3号土壌実測図 (S=1/20)	13
第12図 I区下層4号土壌実測図 (S=1/40)	14
第13図 I区下層P-39・40実測図 (S=1/20)	15
第14図 I区下層1号溝状遺構実測図 (S=1/60)	16
第15図 I区下層1号住居遺物実測図 (S=1/3)	17
第16図 I区下層2号住居遺物実測図-1 (S=1/3)	19
第17図 I区下層2号住居遺物実測図-2 (S=1/3)	20
第18図 I区下層2号住居遺物実測図-3 (S=1/3)	21
第19図 I区下層3号住居遺物実測図 (S=1/3)	22
第20図 I区下層4号住居遺物実測図 (S=1/3)	23
第21図 I区下層1号土壌遺物実測図 (S=1/3)	23
第22図 I区下層3号土壌遺物実測図 (S=1/3・2/3)	24
第23図 I区下層4号土壌遺物実測図 (S=1/3)	25
第24図 I区下層4号溝状遺構遺物実測図 (S=1/3)	26
第25図 I区下層P-39・40遺物実測図 (S=1/3)	27
第26図 I区上層遺構遺物実測図 (S=1/3)	28
第27図 I区上層包含層遺物実測図-1 (S=1/3)	29
第28図 I区上層包含層遺物実測図-2 (S=1/3)	30
第29図 I区上層トレンチ遺物実測図 (S=1/3)	31
第30図 I区下層包含層遺物実測図-1 (S=1/3)	34
第31図 I区下層包含層遺物実測図-2 (S=1/3)	35
第32図 I区下層トレンチ遺物実測図 (S=1/3・1/1・2/3)	35
第33図 V区全体図	38
第34図 V区東壁土層図 (S=1/60)	39

第35図	V区下層 1号住居跡実測図 (S=1/40).....	40
第36図	V区下層 1号溝状遺構実測図 (S=1/90).....	41
第37図	V区上層遺構遺物実測図 (S=1/4・1/2).....	42
第38図	V区上層検出面遺物実測図 (S=1/4).....	43
第39図	V区上層トレンチ遺物実測図 (S=1/4).....	45
第40図	V区東壁出土遺物実測図-1 (S=1/4).....	47
第41図	V区東壁出土遺物実測図-2 (S=1/3・1/1).....	48
第42図	V区下層 1号住居遺物実測図 (S=1/4).....	49
第43図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-1 (S=1/4).....	50
第44図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-2 (S=1/4).....	52
第45図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-3 (S=1/4).....	53
第46図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-4 (S=1/4).....	54
第47図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-5 (S=1/4).....	56
第48図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-6 (S=1/4).....	57
第49図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-7 (S=1/4).....	57
第50図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-8 (S=1/4).....	58
第51図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-9 (S=1/4).....	59
第52図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-10 (S=1/4).....	60
第53図	V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-11 (S=1/4).....	62
第54図	V区下層 1号溝状遺構出土ガラス玉 (S=1/1).....	63
第55図	V区下層 水走り遺物実測図 (S=1/4).....	64
第56図	V区下層 検出面遺物実測図 (S=1/4).....	65
第57図	V区下層 包含層遺物実測図-1 (S=1/4).....	67
第58図	V区下層 包含層遺物実測図-2 (S=1/4).....	69
第59図	V区下層 包含層遺物実測図-3 (S=2/3).....	70
第60図	V区下層 包含層遺物実測図-4 (S=1/3).....	72
第61図	V区下層 包含層遺物実測図-5 (S=1/3).....	73
第62図	V区下層 包含層遺物実測図-6 (S=1/3).....	74
第63図	VI区 1号土壤実測図 (S=1/40).....	76
第64図	VI区 2号土壤実測図 (S=1/40).....	76
第65図	VI区 3号土壤実測図 (S=1/40).....	77
第66図	VI区 4号土壤実測図 (S=1/20).....	77
第67図	VI区 1号掘立柱建物実測図 (S=1/80).....	78
第68図	VI区 1号溝状遺構実測図 (S=1/80).....	79
第69図	VI区 遺構遺物実測図 (S=1/3).....	81
第70図	VI区全体図.....	82

図版目次

巻頭カラー図版

I 区 2 号住居跡

遺物出土状況

図版—1 a 丘陵全景（北東から）

b I 区全景（北側から）

図版—2 a I 区全景（真上から）

b I 区南側全景（真上から）

図版—3 a I 区下層住居群全景

b 1 号住居跡

図版—4 a 2 号住居跡検出状況

b 2 号住居跡

図版—5 a 2 号住居カマド設置状況

b 2 号住居跡屋内土壙

図版—6 a 3 号住居跡（上から）

b 4 号住居跡（北から）

図版—7 a P-39

b P-40

図版—8 I 区出土遺物—1

図版—9 I 区出土遺物—2

図版—10 I 区出土遺物—3

図版—11 I 区出土遺物—4

図版—12 I 区出土遺物—5

図版—13 a V 区全景（北側から）

b V 区全景（真上から）

図版—14 a 1 号溝状遺構全景（北側から）

b 1 号溝状遺構全景（真上から）

図版—15 a 1 号溝状遺構遺物出土状況

b 1 号溝状遺構土層状況

図版—16 1 号溝状遺構完堀

図版—17 V 区出土遺物—1

図版—18 V 区出土遺物—2

- 図版—19 V区出土遺物—3
- 図版—20 V区出土遺物—4
- 図版—21 V区出土遺物—5
- 図版—22 V区出土遺物—6
- 図版—23 V区出土遺物—7
- 図版—24 a VI区上段全景（真上から）
b 掘立柱建物
- 図版—25 a VI区下段全景（東から）
b VI区下段全景（真上から）
- 図版—26 VI区出土遺物—1

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成6年度、糸島一市二町で組織する一部事務組合（糸島地区消防厚生施設組合）の斎場老朽化に伴い、施設の新築計画が検討され、福岡県糸島郡二丈町大字石崎が候補地となった。

その後、地元協議が重ねられ、平成7年12月、町教育委員会へ試掘調査の依頼が打診、平成8年1月の建設予定地の最終決定を受けて、試掘調査を実施した。調査の結果については、予定地である丘陵全域において埋蔵文化財が包蔵されている事が判明し、その保存についての協議を福岡県教育委員会、二丈町教育委員会、二丈町、糸島地区消防厚生施設組合とで行い、結果的に円墳と考えられる曲り田古墳、丸山地区については現状保存、丘陵部分については、記録保存の形をとる事で合意に達した。

平成9年9月、文化財保護法第57条の2・第1項の規定により、埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成9年10月より発掘調査を実施する運びとなった。

2. 調査の組織

発掘調査ならびに報告書刊行事業に従事した組織は、以下に記すとおりである。

発掘調査（平成9年度）

調査主体	二丈町教育委員会
総括	教 育 長 小川勇吉
	教 育 課 長 空閑俊明
	教育課長補佐 清水泰次
庶務	社会教育係長 大庭一成
調査	社会教育係 古川秀幸

発掘調査（平成10年度）

調査主体	二丈町教育委員会
総括	教 育 長 小川勇吉
	教 育 課 長 清水泰次
	教育課長補佐 大庭一成
庶務	社会教育係長 盛永和幸
調査	社会教育係 古川秀幸

発掘調査（平成11年度）

調査主体	二丈町教育委員会
総括	教 育 長 小川勇吉
	教 育 課 長 清水泰次
	教育課長補佐 大庭一成
庶務	社会教育係長 川島節夫
調査	社会教育係 古川秀幸
	津国 豊

報告書事業（平成12年度）

調査主体	二丈町教育委員会
総括	教 育 長 小川勇吉
	教 育 課 長 青木楨夫
	教育課長補佐 大庭一成
庶務	社会教育係長 川島節夫
調査	社会教育係 古川秀幸

糸島地区消防厚生施設組合

組合長	春田整秀（前原市長）
副組合長	末崎 了（志摩町長）
	筒井秀来（二丈町長）
事務局長	木村博道
庶務課長	丸山秀樹
同 会計係	福沢朋子
同 庶務係	吉村悦子
同 財政係	中山貴司
施設課施設係長	廣川義彦
同 庶務係	新藤博文
同 施設係	上籠高志

調査指導

柳田康雄（福岡県教育委員会）、橋口達也（同）、池辺元明（同）、水ノ江和同（同）、肥塚隆保（独立法人奈良文化財研究所）、日野尚志（佐賀大学）、大澤正巳（新日鉄TACセンター）、中橋孝博（九州大学）

II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の周辺環境

曲り田遺跡が立地する石崎丘陵は、町南東部、一貴山・深江平野の中央部に位置する独立低丘陵である。同丘陵を含む周辺部は、これまでにも数多くの稻作開始期の遺構（第2表参照）が調査されており、我が国の弥生文化を考える上で重要な地域と目されている。

同地での調査は、昭和54年の第1次調査（国道202号線バイパス）から始まる。この調査において検出された遺構としては、弥生開始期の竪穴式住居30軒、支石墓1基、前期の甕棺墓群等で、これらにより、「弥生早期説」の提唱がなされ、一躍と脚光を浴びる事となった。その後、丘陵から南西に位置する低台地上での墳墓群（矢風遺跡：JA支所建替）、水田部（大坪遺跡：ほ場整備）の確認と続き、稻作受容の変遷がつぶさに確認できる地域となるものと考えられた。また、これらの調査中、遺構には伴わないものの、縄文中期代（阿高式）や後期前半代（並木式）の土器片が出土していたため、稻作受容の基盤となる遺跡の存在も想定されるものであった。この点については、平成7年度に個人区画整理に伴う調査において、阿高式単純期の遺構（矢風遺跡第2次調査）が確認され、稻作自体の受容が我が国の縄文文化の下に受け入れられたものと言える結果となった。

同地での弥生文化の発展については、肥沃な土地をベースに展開しており、丘陵南西部（曲り田周辺遺跡IV地区）からは弥生後期の広形銅矛の鋳型が出土、青銅器生産を裏付けるものである。また、本調査でも他に例をみない「銅鍬先」も出土しており、糸島地域での青銅器生産文化の一端を担っているものと思われる。

古墳時代に入ると、本町で確認されている前方後円墳4基全てが、一貴山・深江平野を囲むように築かれている。中でも昭和25年に調査された一貴山銚子塚古墳は、後漢鏡を含む10面もの鏡や豊富な副葬品を有する前期古墳であり、糸島地方最大規模の首長墓と考えられる。また、これと対峙している徳正寺山古墳は、規模的には遜色ないものであり、今後の調査に古墳期の情政解明の期待が持てる。石崎丘陵においては、前方後円墳の確認はないものの、直径30mを越す円墳（曲り田古墳）が存在しており、周辺の住居の時期からみても5世紀代のものと想定できる。

こうした古代から続く、石崎丘陵の特殊性は、律令時代に移っても受継がれている。前述の第1次調査や曲り田周辺遺跡（町野球場建設）からは、規律性のある建物群が確認されており、越州窯青磁や墨書き土器が出土、同地に公的施設の存在が考えられていた。今回の調査でも建物群が検出された他、大型の井戸も出土し、越州窯青磁、長沙窯磁器、綠釉陶器とともに「西」「松」「田」「大」と刻書された土器が数多く出土している。また、「西海道」と考えられる道路状遺構の確認により、当地が重要な拠点であった事が裏付けられ、公的施設であった可能性は極めて高いものと言える。この時期での遺跡としては、当地より2km程西方で確認された「塚田南遺跡」の存在がクローズアップされる。同遺跡は「西海道」と考えられる道路状遺構が最初に検出されたもので、大型建物4棟が規律性を持って出土している。また、この遺跡の性格としては、官道沿いという立地やその建物の規模、円面鏡という特別な遺物の出土等から古代に設置された役所、「深江駅家」ではないか、と推定されており、遺跡の範囲を含め、周辺の調査が待たれているものである。しかしな

がら、現段階での遺物を検討すると9世紀初めには忽然とその姿を消しており、釈然としない点も残る。推測の域をでないが、これに代わる施設自体が、9世紀以降に現れる石崎丘陵一帯の遺構になる可能性を秘めており、今後の遺跡周辺の詳細調査、道路状遺構の追跡確認が研究課題となろう。

2. 石崎丘陵における遺構の推移

前項でも記したとおり、丘陵部における遺構の出現は鞍部南西斜面（曲り田遺跡第1次調査）に立地する弥生時代早期の住居跡群や小型支石墓が初出である。また、後出する前期の甕棺墓群の出土状況や丘陵他地点における同時期の遺構が未確認である点を考慮すると、同地での遺構の広がりは、この鞍部より開始されているものと考えられる。同地点では中期の円形住居2棟も検出されており、今回の調査地点における後期後半代の方形住居跡群（IV区下層）や溝状遺構（V区）の存在を考えると鞍部から丘陵北半部への遺構の広がりが認められる事となる。このことは、昭和62年度から開始した町野球場建設に伴う丘陵南半部の調査（曲り田周辺遺跡）において、まとまった弥生期の遺構が存在しない（丘陵IV地点・南東緩斜面において、単独で存在する弥生中期末の甕棺1基と広形銅矛の鋳型が包含層より出土しているのみ。）事からも裏付けられ、生産基盤である水田面に適した立地条件に沿って、広がりを見せていているものと言い換えられよう。

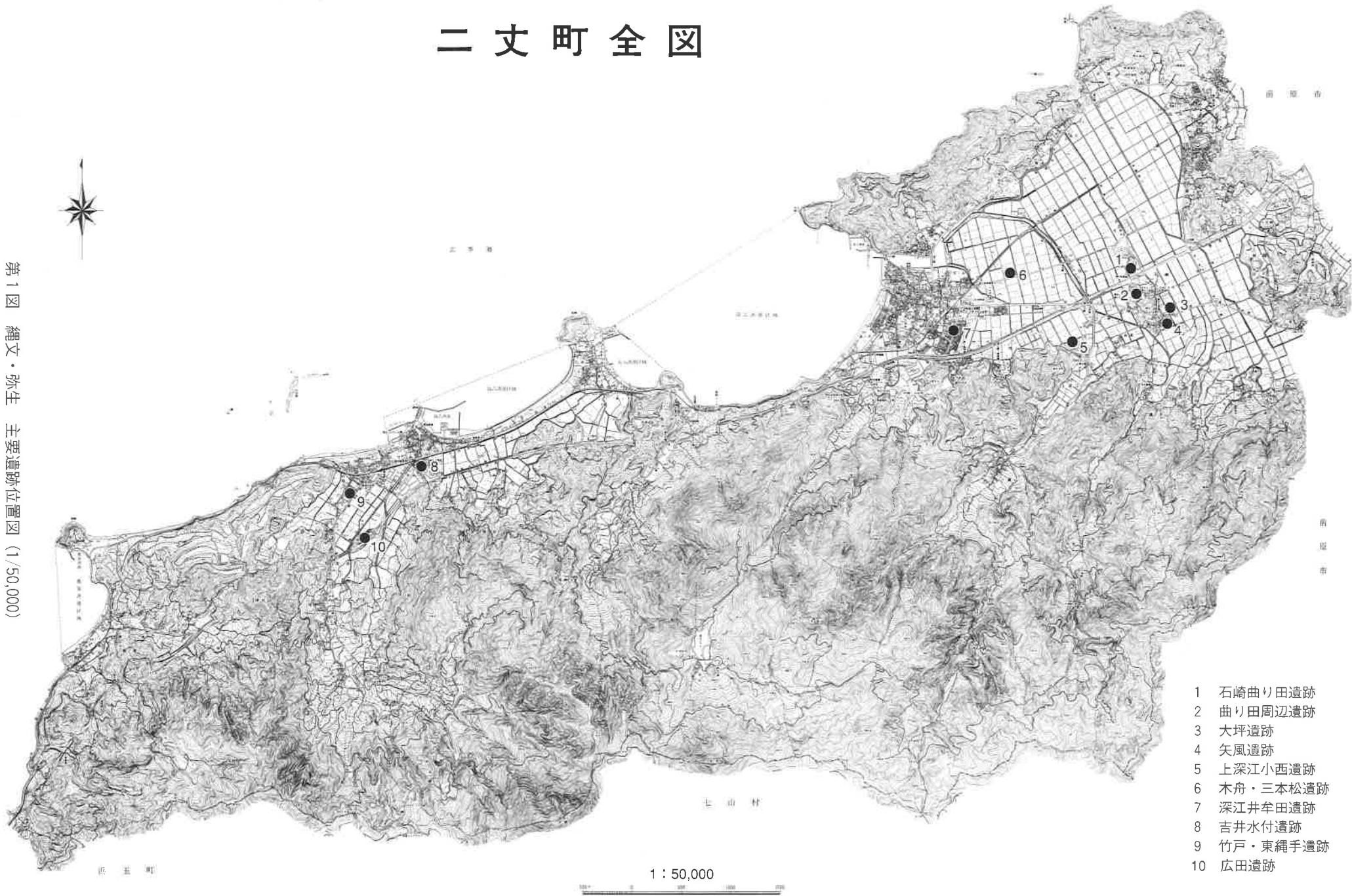
古墳時代、丘陵北半部、南半部ともにほぼ同時期の住居群が現れている。この事は、5世紀前半代に一気に集落が拡大した事を示唆しており、中心部分である鞍部には大型の円墳（曲り田古墳）が造営された事からも伺える。ここで、住居の形態について若干触れたいが、昭和63年度に調査したIV地点では、南東斜面において20棟もの住居群が検出されている。概ね、一辺5m程を測る方形を呈するものが主体であるが、10m前後の大型住居（17号・19号住居）も確認されており、遺跡中心部はこの斜面と考えてよい。全て4世紀末～5世紀初頭に位置付けられているが、カマドの設置は認められず、須恵器の出現も皆無であった。続いて、今回の調査地連である北半部であるが、住居の規模的には大差ないものの、I区下層の2号、4号住居では、カマドが確認され、2号住居からは、古式の須恵器も出土している。いずれも5世紀初頭と言えるが、これらの出土土器は当地でのカマド設置時期の指標となるものであろう。

両地点で共通する点としては、住居の立地条件と言え、共に本来の地山ではなく、斜面や谷頭を造成して居を構えている事が認められる。通常は住居を建築しづらい面ではあるが、集落の人口増加にともない、丘陵全域に居住区を求めていった事が起因しているのであろう。

最後に奈良～平安期の状況であるが、今回、北半部より計6棟の掘立柱建物や6基の大型井戸（IV区にて4基、4次調査：民間開発にて2基）が検出されている。また、I地点（鞍部）より2棟、平成3年度のIX地点からは3棟と鞍部を挟んで、規律性を持った建物群になる事も判明している。また、遺物については、越州窯、長沙窯系の磁器を始め、墨書き土器（I地点：『新家』）、刻書き土器（IV区上層『西』・『田』・『大』・『松』）、皇朝十二線（第4次調査井戸出土：貞觀永宝）が出土しており、これまで言われてきたとおり、何らかの公的施設となる事は確実であろう。

古墳期に丘陵全体に拡がった遺跡であるが、鞍部を挟んで北半、南半部の南西斜面に建物を集中させている事が伺える。この事は、今回の調査で検出した「西海道」と考えられる道路状遺構に関係しているものと言え、最短距離をとるべき直線道路としては、丘陵鞍部付近が最適地であり、この官道沿いの高所で、尚且つ、施設建設に適した面に建物が集中したのであろう。

二丈町全図



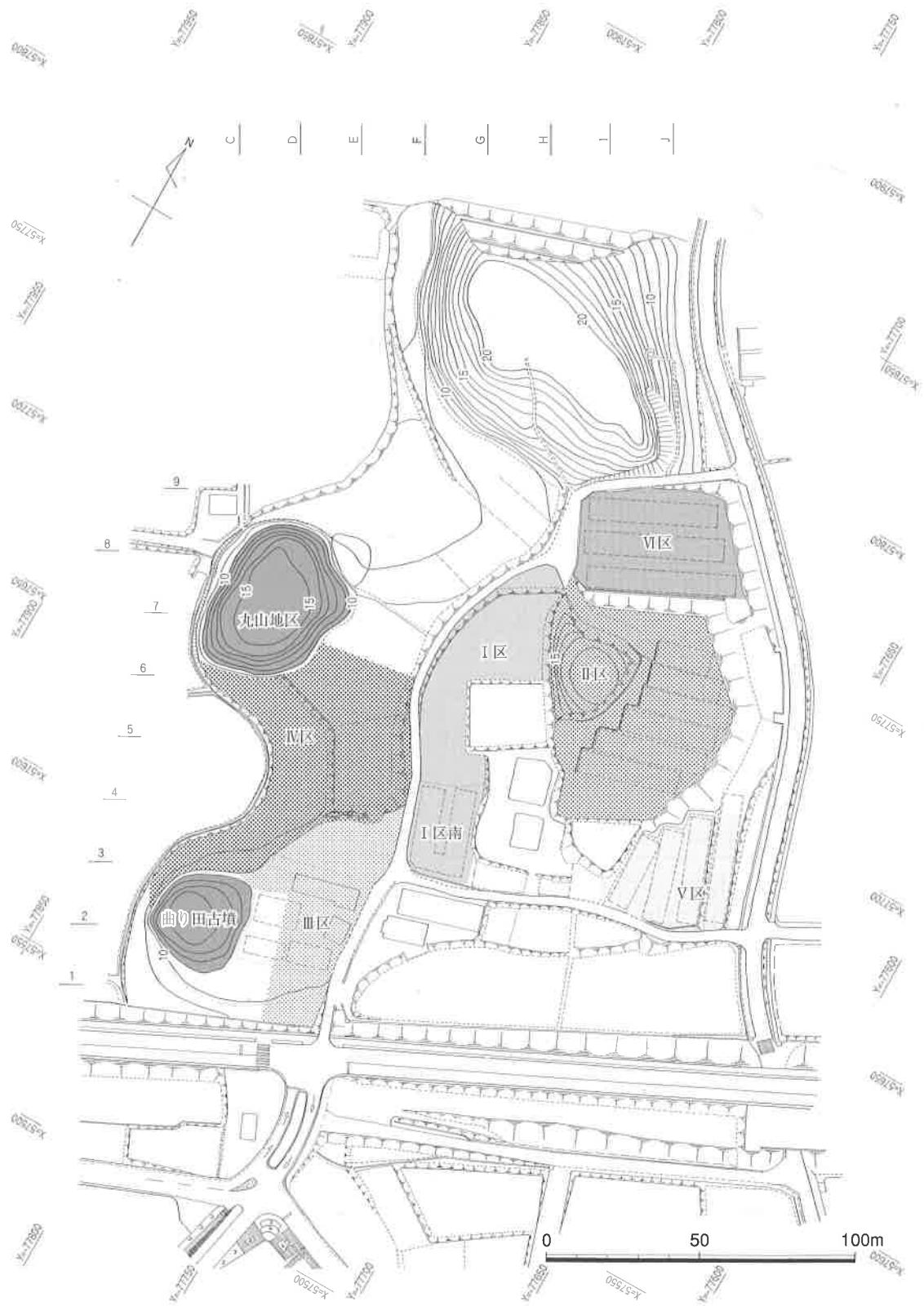
第1図 縄文・弥生 主要遺跡位置図 (1/50,000)

第1表 石崎地区遺跡群発掘調査一覧

地点	遺 跡 跡	原 因	調査年度	報 告 書	備 考
I	石崎 曲り田遺跡	国道202号線 バイパス建設	1980	『石崎 曲り田遺跡』 I II III 1983~1985	福岡県 教育委員会
II	曲り田遺跡 第2次調査	農協カントリー エレベーター建設	1985	『石崎 曲り田遺跡 第2次調査』 1986	二丈町 教育委員会
III	曲り田周辺遺跡	町運動公園建設	1987	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 III 1993	二丈町 教育委員会
IVa	曲り田周辺遺跡	町運動公園建設	1988	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 IV 1993	二丈町 教育委員会
IVb	曲り田周辺遺跡	農協用地拡幅	1988	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 IV 1993	二丈町 教育委員会
V	曲り田周辺遺跡	町運動公園建設	1989	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 I II 1991, 1992	二丈町 教育委員会
VI	大坪遺跡	県営ほ場整備	1988	『大坪遺跡』 1995	二丈町 教育委員会
VII	矢風遺跡	農協支所建設	1989	未 報 告	
VIII	曲り田周辺遺跡	町運動公園建設	1990	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 V 1996	二丈町 教育委員会
IX	曲り田周辺遺跡	町運動公園建設	1991	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 VI 1998	二丈町 教育委員会
X	大坪遺跡 II	県営ほ場整備 調整池建設	1992	『大坪遺跡』 II 1995	二丈町 教育委員会
XI	曲り田周辺遺跡	町運動公園進入道建設	1993	未 報 告	
XII	矢風遺跡 第2次調査	個人農地区画整理	1993	『矢風遺跡』 第2次調査 1997	二丈町 教育委員会
XIII	大坪遺跡 III	町道拡幅工事	1994	『大坪遺跡』 III 2000	二丈町 教育委員会
XIV	曲り田遺跡 第3次調査	糸島斎場建設	2000	今回報告	二丈町 教育委員会

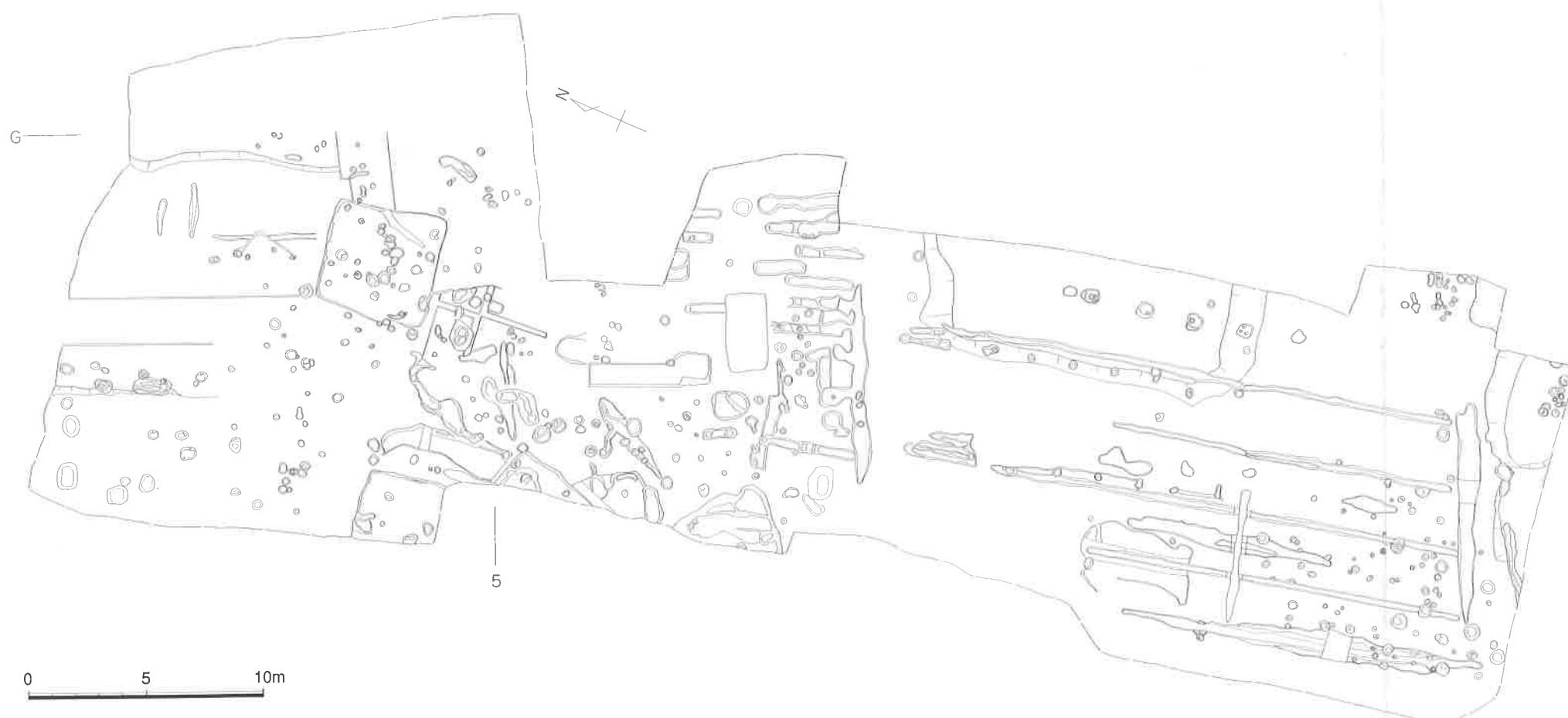


第2図 石崎地区遺跡群 遺跡分布図 (S=1/5,000)



第3図 調査区設定図 ($S=1/2,000$)





第5図 I区全体図 ($S = 1/250$)

III. 調査の記録

1. 概要

遺跡は、石崎丘陵北半部の30,947m²に及ぶ広域なものであり、且つ、部分的には2面～3面の遺構面を持つものである。このため、調査については、全域を通して時代区分に沿った調査を行う事が出来ず、造成工事の工程に合わせた形で、大きく7つの調査区に区分けして、順次、実施している。調査区の概要は、以下の表を参照されたい。また、遺構の報告については、便宜上、上巻（I区、V区、VI区）、中巻（IV区）、下巻（II区、III区、丸山古墳）とに分けて、報告している。

調査区名	位 置	遺構の概要	備 考
I	丘陵頂上部	竪穴式住居群（古墳時代前期） 柱穴状ピット群（弥生から平安時代）	上巻
II	丘陵最頂点部	近世墓群	下巻
III (曲り田古墳)	丘陵鞍部 (バイパス接点部)	柱穴状ピット群（平安時代） 円墳（古墳時代）	下巻
IV	丘陵西側緩斜面	上層 竪穴式住居（古墳時代） 掘立柱建物（平安から鎌倉時代） 鍛冶炉（平安時代） 井戸（平安時代） 溝状遺構（鎌倉時代） 道路状遺構（平安時代） 下層 竪穴住居（弥生時代～古墳時代） 掘立柱建物（平安時代） 最下層 竪穴住居（弥生時代） 土壙墓（古墳時代）	中巻
V	丘陵南東角	溝状遺構（近世） 竪穴式住居（弥生時代） 溝状遺構（弥生時代）	上巻
VI	丘陵北東角	土壙（縄文時代） 掘立柱建物（平安時代）	上巻
丸山地区	丘陵南西部	石蓋土壙墓（古墳時代）	下巻

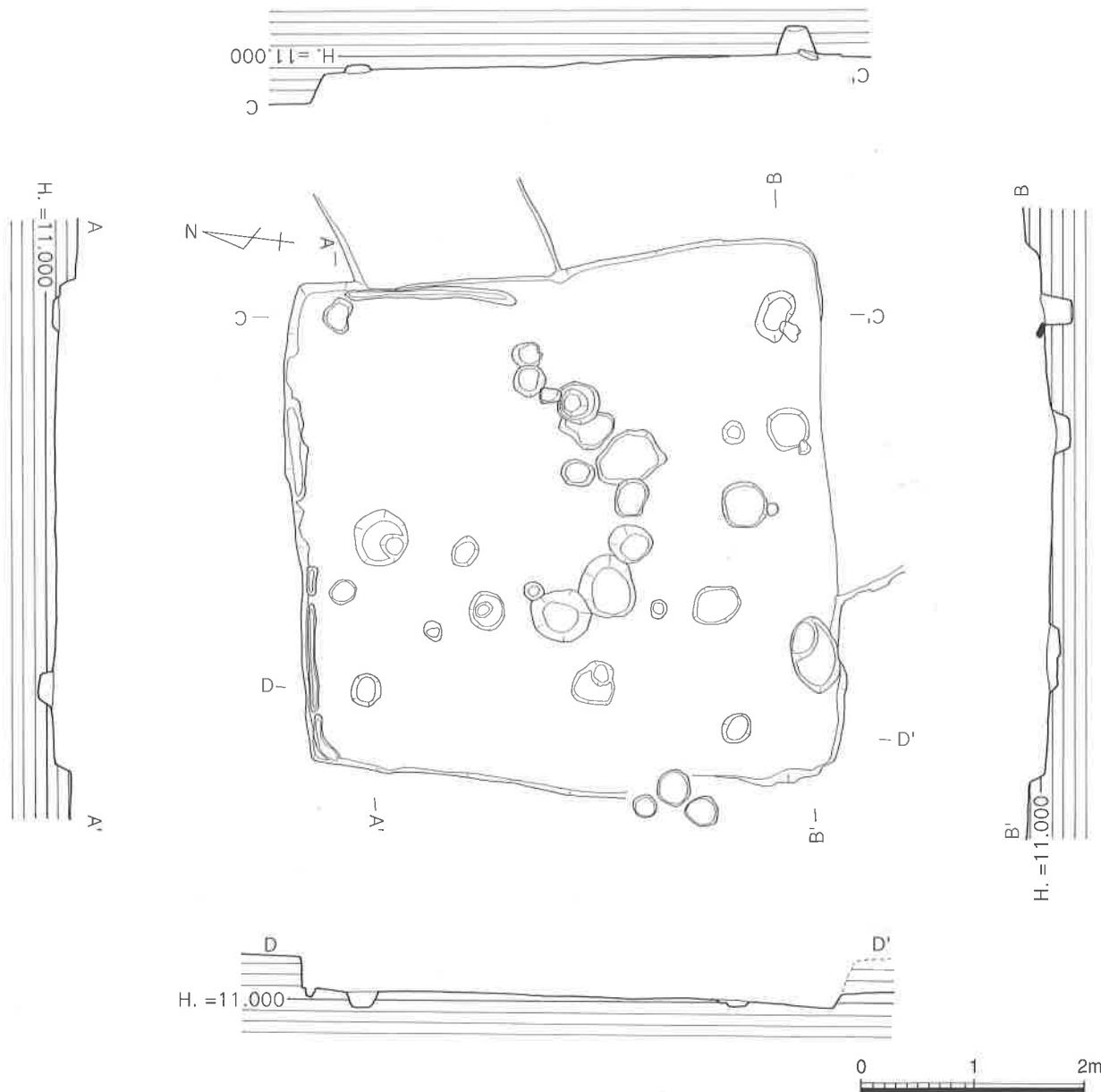
第2表 調査区概要

2. I 区の調査

丘陵頂上部にあたり、平坦な地形を呈しているが、西側に向かっては、緩やかに傾斜している。表土以下、直ぐに遺構面となり、多数の柱穴状ピットが出土した（上層）。続いて、中央部に試掘坑を設定し、掘り下げた段階で、住居跡等の遺構を検出したため、下層として調査を続行した。

下層では、調査区の中央部が谷頭を形成している事が判明したが、古墳期における客土の後、住居を営んでいたため、住居レベル以下の調査は行っていない。また、後に追加、拡張した南側の調査区については、大形の柱穴状ピットが多く、南隅は、人為的による掘り切りが確認されている。IV区で検出した道路状遺構の延長部分と考えられる。

検出した遺構は、古墳時代前期を主体とする竪穴式住居4棟や溝状遺構5条、土壙4基、柱穴状ピット等である。以下、順次、説明を加えていきたい。



第6図 I区下層1号住居跡実測図 ($S=1/60$)

a. 検出遺構

1. 1号住居跡（第6図）

調査区北側で検出したもので、一辺470cmを測る方形を呈する住居跡である。4隅の柱穴は浅く、中央のものが主柱となるものであろう。また、北側、東側では周壁溝が検出されたが、カマド等は検出されなかった。床面からは、焼土や炭化した柱材片が多く出土しているため、住居自体は、焼失したために破棄されたものと考えられる。

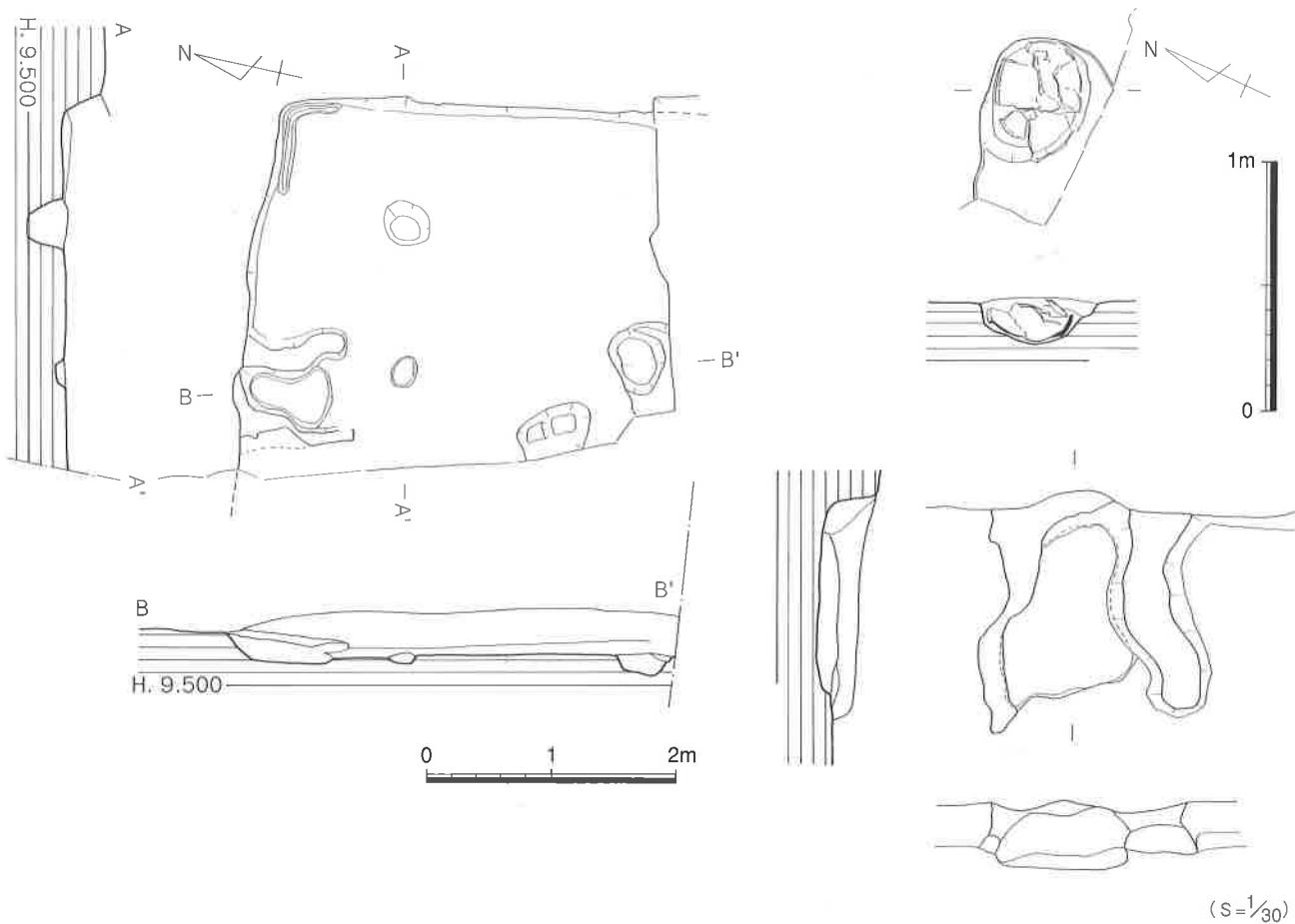
時期は、出土土器からみて、古墳時代前期（5世紀前半）であるが、須恵器は含まれてはいない。

2. 2号住居跡（第7図）

調査区西隅で検出したもので、3／4程は調査区外となる。北側にはカマドが付設され、北東角では、周壁溝を検出している。また、中央部には50cm×50cmを測る楕円形の土壙が確認され、大型の鉢形土器が埋設されていた。

カマドについては、黄色の粘土が使われ、35cm幅で、長さ80cm程が残っていた。

住居検出時、床面いっぱいには、炭化物や焼けた柱材が散乱しており、1号住居同様、焼失し、破棄されたものと考えられる。住居内の遺物には、須恵器瓶が含まれており、時期的には、古墳時代前期（5世紀前半）と考えられる。



第7図 I区下層2号住居跡実測図 (S=1/60)

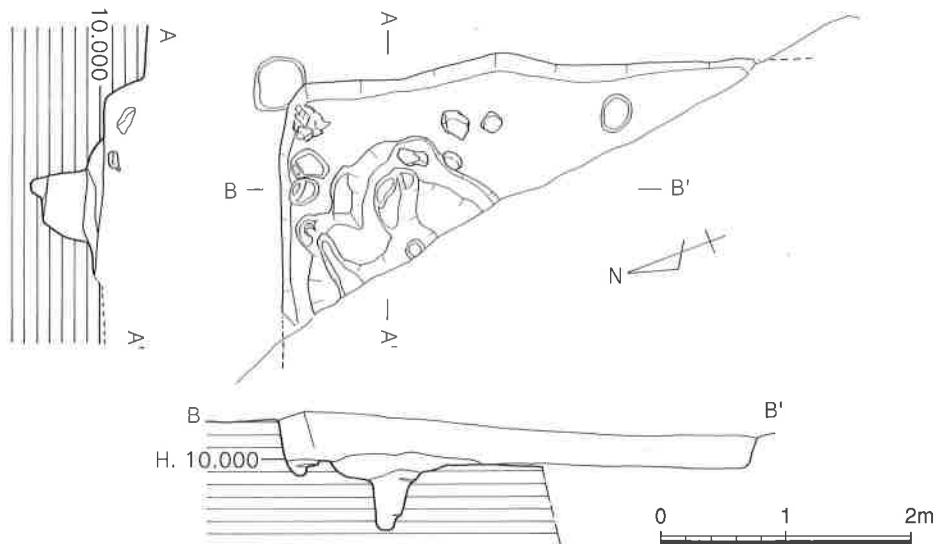
3. 3号住居跡（第8図）

調査区中央寄り西側隅で検出したもので、4号住居跡、2号溝状遺構を切っている。北東コーナーのみであり、大半は調査区外となるため、全容は不明である。

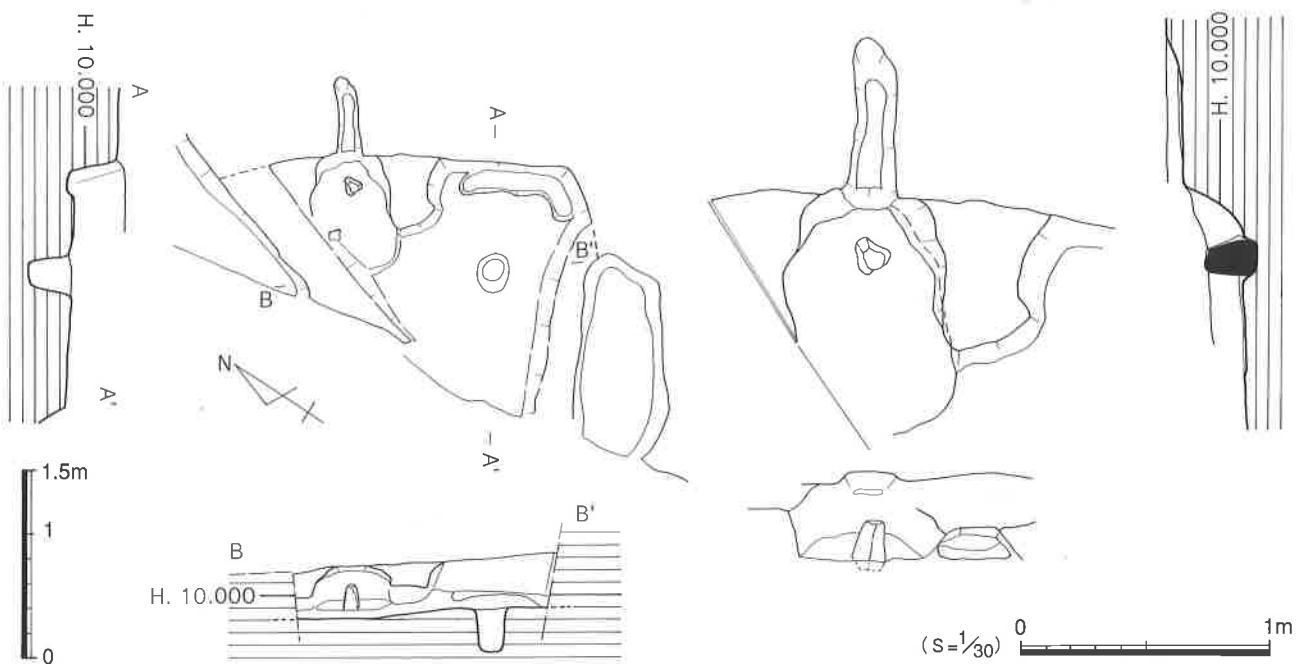
北東隅には、150cm程の土壙が検出された。時期については、切り合いの関係で2号、4号住居よりは、後出するが、さほど時期差はないであろう。

4. 4号住居跡（第9図）

3号住居、2号土壙に切られた形で検出したもので、大半は調査区外となるため、全容は不明である。東辺にカマドを付設しており、燃焼部には、石製の支脚が備えられていた。

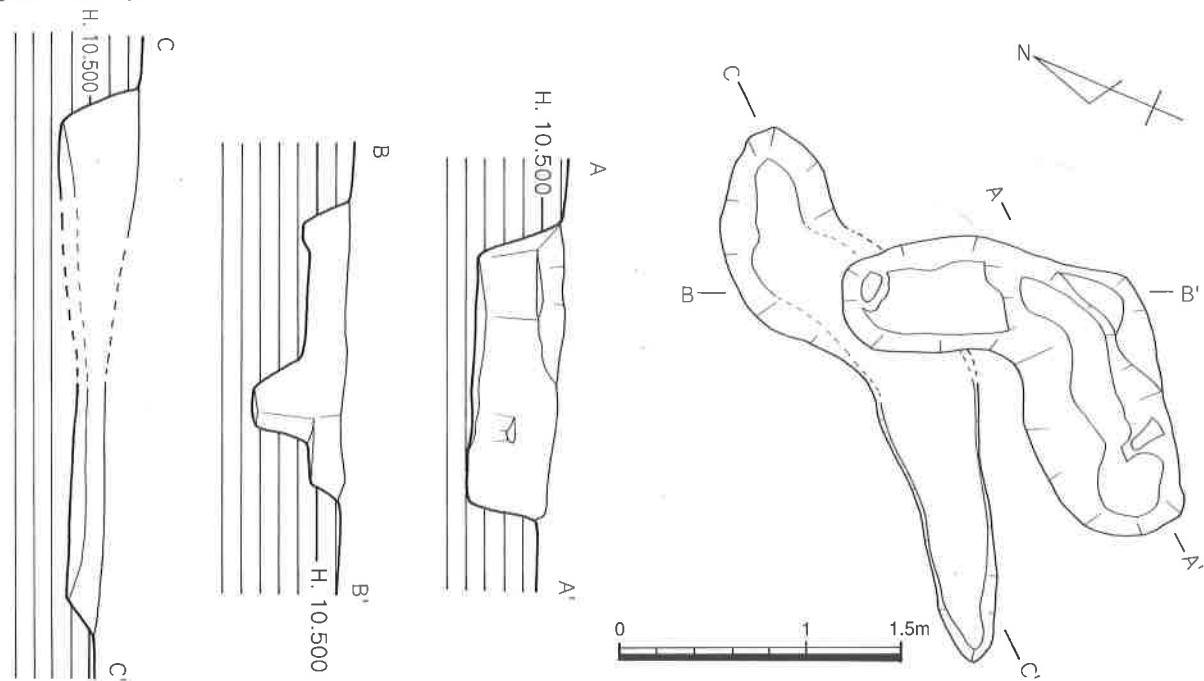


第8図 I区下層3号住居跡実測図 ($S=1/60$)

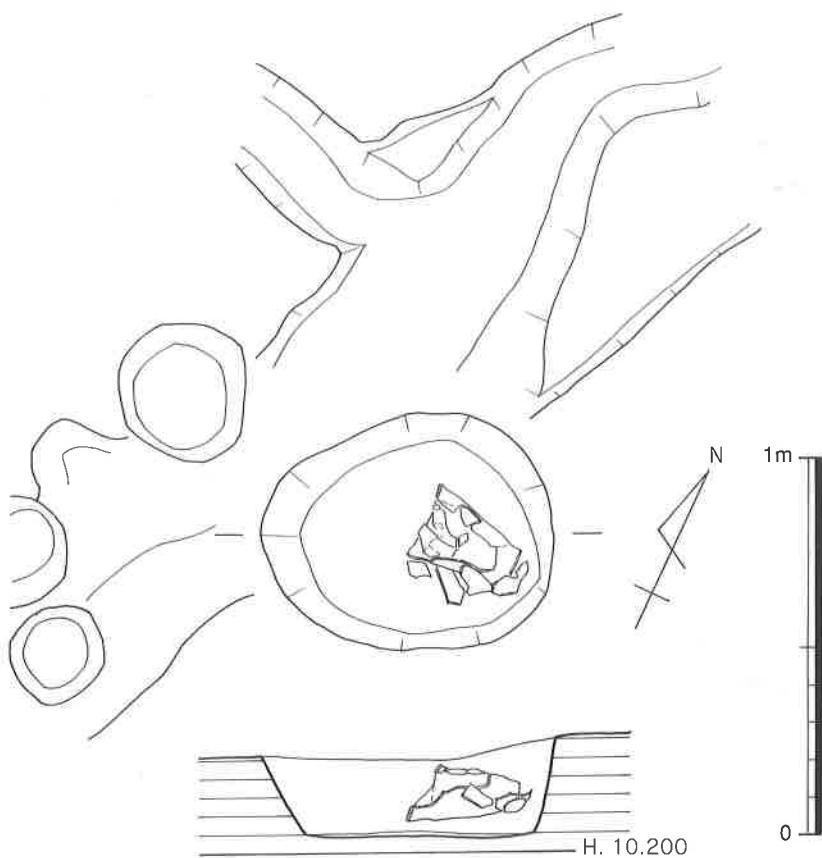


第9図 I区下層4号住居跡実測図 ($S=1/60$)

カマドは、淡黄色の粘土を使用し、50cm幅で、70cm程が残っていた。また、住居外へ、煙出しの溝が60cm程確認されている。時期については、出土土器よりみて、古墳時代前期（5世紀前半）と考えてよい。



第10図 I区下層1号・2号土壤実測図 ($S=1/40$)



第11図 I区下層3号土壤実測図 ($S=1/20$)

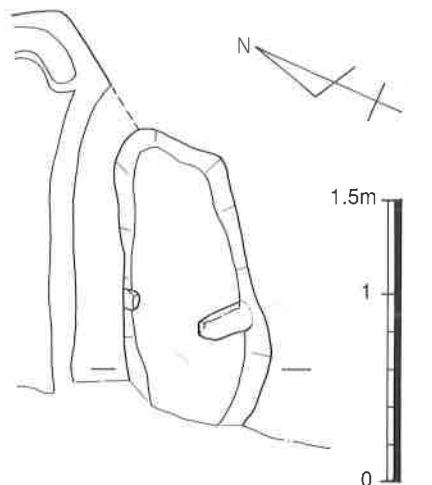
5. 1号土壙（第10図）

調査区中央部で検出した不整形の土壙であり、2号土壙に切られている。300cm×60cmを測り、深さは40cm程である。

出土土器には、土師器高台付椀や土師皿があり、時期は平安期と捉えられる。

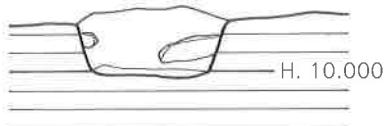
6. 2号土壙（第10図）

調査区中央部において、1号土壙を切る形で検出した不整形土壙である。220cm×80cm、深さ50cmを測る。時期は不明である。



7. 3号土壙（第11図）

調査区中央部、4号住居東側で検出した橢円形を呈する土壙であり、2号溝状遺構を切っている。規模は、80cm×60cm、深さ20cmを測る。土壙内より、板付I式の甕形土器や黒曜石製の石鏸等が出土している。



第12図 I区下層4号土壙実測図
(S=1/40)

8. 4号土壙（第12図）

調査区中央の西側寄りにおいて、4号住居を切る形で検出した土壙である。西側は調査区外となり、全容は不明である。出土遺物には土師椀などが多く、鍛冶炉の壁体なども含まれていた。時期的には平安期と考えてよい。

9. ピット-39（第13図）

調査区北側、2号住居北側のやや緩斜面の部分で検出したピットである。53cm×38cm、深さ35cmを測る。ピット内には、ほぼ直立した形で、甕形土器3個体が出土している。出土状況より、何らかの貯蔵穴と考えた方が妥当であるが、小児棺の可能性も捨てがたいものである。

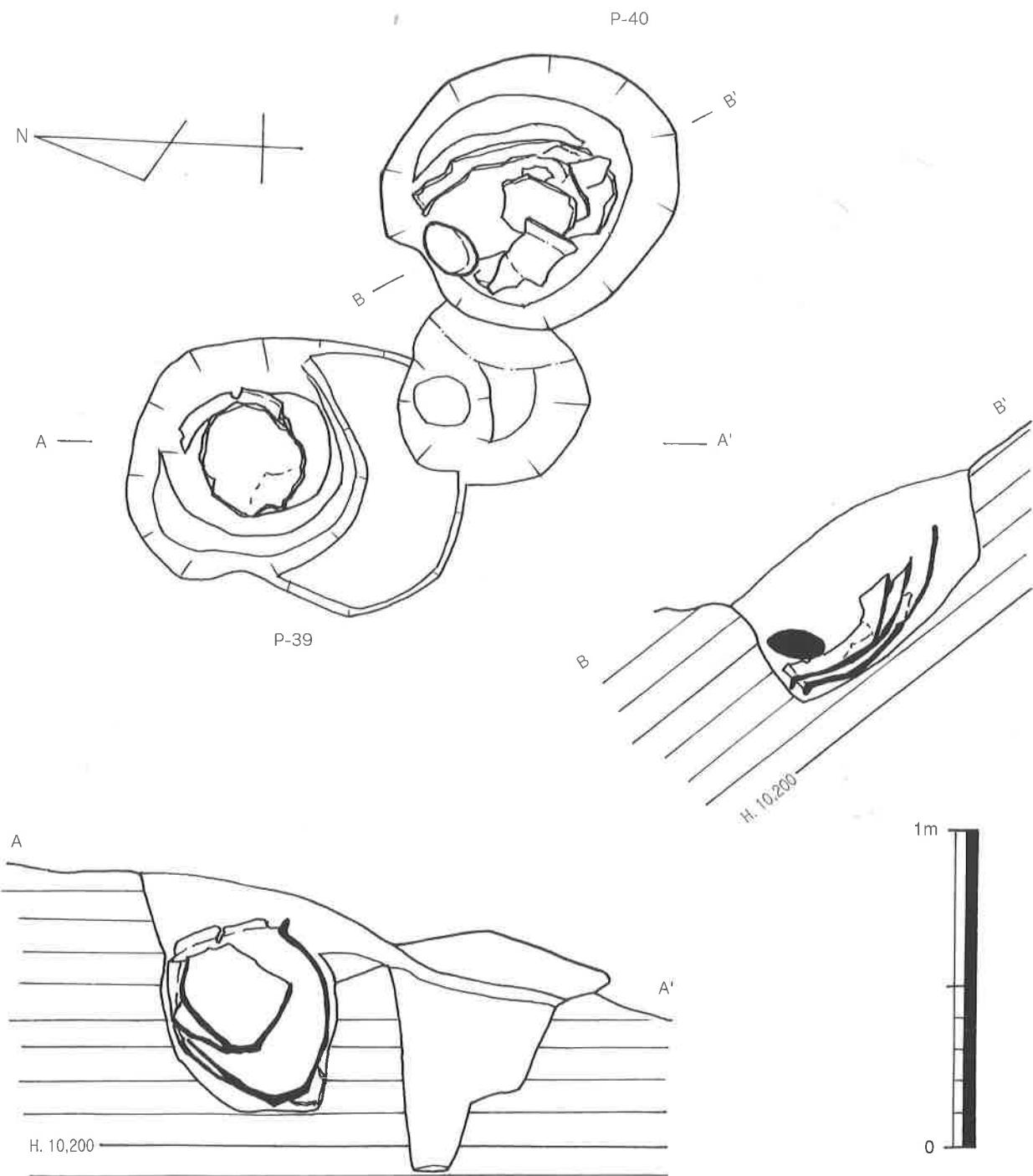
時期は、形式からみて弥生後期前半であろう。

10. ピット-40（第13図）

ピット-39東側で検出した同様のもので、43cm×43cm、深さ20cmを測る。ピット内には、甕形土器1個が出土した。時期については、切り合いからみて、ピット-39よりは後出するが、さほど時期差はないものである。

11. 1号溝状遺構（第14図）

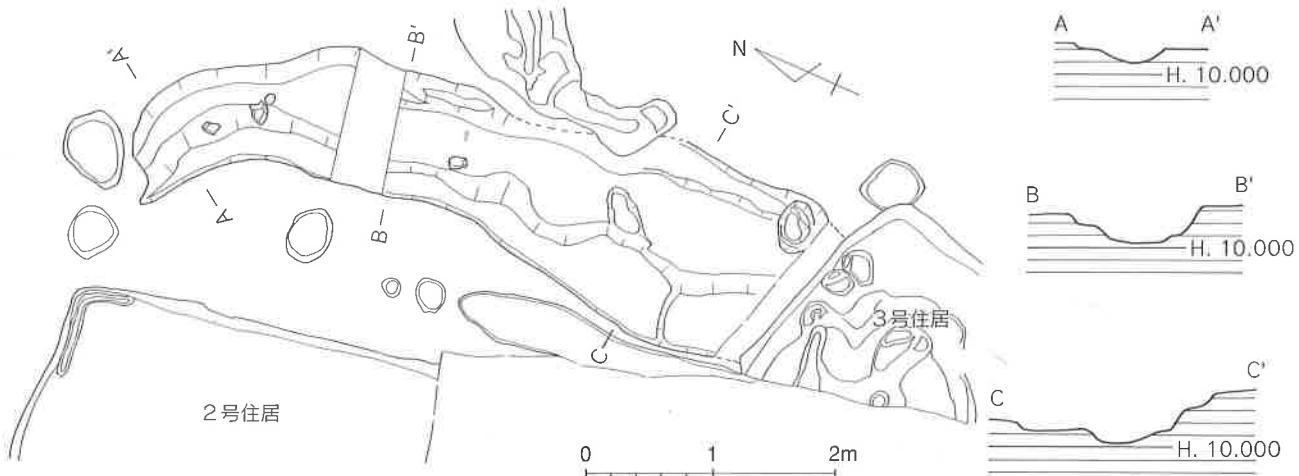
調査区中央部において、2号住居東側を周る形で検出した溝状遺構であり、3号住居に切られている。最大幅150cm、深さ40cmを測り、5m30cm程の長さで確認した。出土遺物は、古墳前期の破片が多く、概ね、2号住居と同時期であろう。



第13図 I区下層P-39・40実測図 (S=1/20)

12. 南側柱穴状ピット群

調査区南側で検出したピット群は、直径40cm以上程を測るものであり、建物となる可能性が高いが、後の搅乱や調査区外により、全容はつかめなかった。



第14図 I区下層1号溝状遺構実測図 ($S=1/60$)

13. 掘り切り状遺構

調査区南側で確認した段差50cm程の掘り切りである。IV区で検出した道路状遺構の延長部と考えられるが、詳細は、IV区の調査（中巻）に譲りたい。

b. 出土遺物

1. 1号住居跡出土遺物（第15図）

1~11は、1号住居出土遺物である。

1は、甕形土器であり、胴部中位より下を欠損する。頸部より外反し、口縁端部は丸く收める。外面は、ナデ調整を施し、内面には上方へ向かって、ケズリ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶色を呈す。口縁径16.6cmを測る。

2は、やや頸部のしまりが強いものであり、口縁内面にハケメが残る。胎土には若干砂粒を含み、色調は明黄白色を呈す。口縁径17.0cm。

3は、体部下半で屈曲する高杯である。脚柱部は直線的となる。内外面ナデ調整を施し、脚部内面には、しづり痕が残る。口縁径19.2cm、底径12.2cm、器高13.2cmを測り、胎土には微砂粒を含み、色調は茶褐色を呈す。

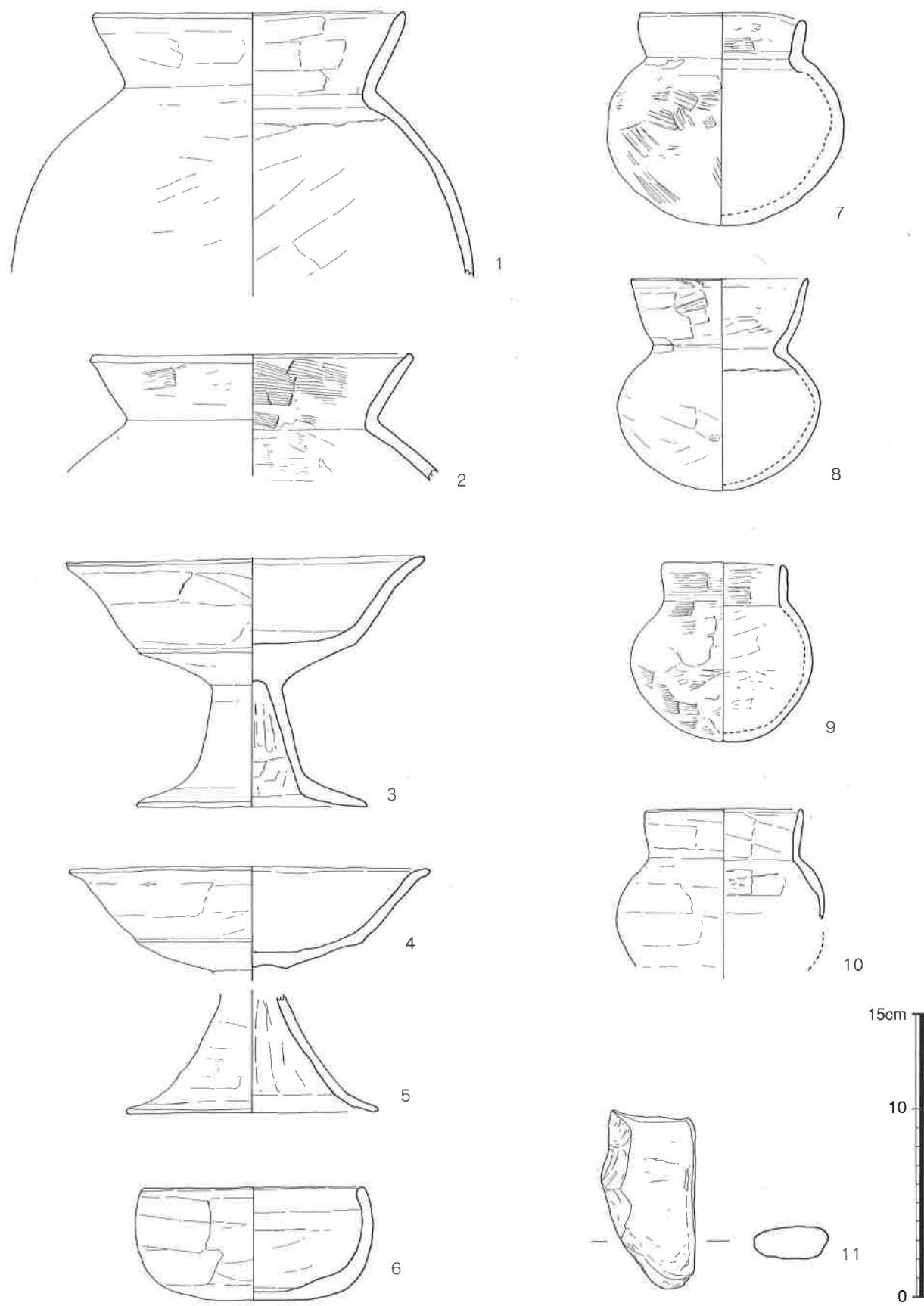
4は、杯部がやや丸みを呈するもので、口縁端部に平坦面を持つ。口縁径19.4cm。砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。

5は、高杯の脚部であり、接合面はないが、4と同一固体と考えられる。底径13.2cm。

6は、体部がやや内弯する鉢形土器である。内外面ナデ調整を施し、胎土には僅かに砂粒を含み、色調は茶褐色を呈する。口縁径11.8cm、底径9.9cm、器高6.0cmを測る。

7は、小型丸底壺である。球形を呈する胴部に小さめの口縁部が付く。外面には粗いハケメが残り、内面はナデ調整を施す。色調は暗茶褐色を呈する。口縁径8.7cm、器高11.3cm。

8は、口縁部が長いタイプであり、7に比べ器壁が薄い。内外面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は淡黄白色を呈する。口縁径9.4cm、器高11.2cmを測る。



第15図 I区下層1号住居遺物実測図 ($S=1/3$)

9は、頸部のしまりがないものであり、口縁部は短く、直線的である。胴部下半に粗いハケメが残る。色調は茶褐色である。口縁径6.5cm、器高9.5cmを測る。

10は、タイプ的には9と同様であるが、やや大ぶりである。胴下半を欠損する。色調は淡茶褐色を呈し、口縁径8.4cmを測る。

11は、頁岩製の石器であり、加工痕が残るもの未製品であろう。

2. 2号住居跡出土遺物（第16図～第18図）

12～27は、2号住居出土遺物である。

12は、口縁端部が波状を呈する甕形土器である。内外面ナデ調整であるが、内面胴部にはケズリ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈す。口縁部径14.7cm。

13は、12に比べやや大ぶりのもので、口縁部は直線的となる。色調は茶褐色を呈す。

14は、古式の須恵器である。胴中位には孔を穿つ。胴部はヘラケズリを施し、頸部と胴中位に波状文を施入する。胎土には砂粒を僅かに含み、色調は淡灰色、焼成は良好である。胴上位には自然釉を被る。口縁部径9.8cm、器高10.0cm、底部は丸底を成す。

15は、椀形土器であり、胴部はやや内彎して口縁部に至る。内外面ナデ調整。胎土には微砂粒を含み、色調は暗褐色を呈す。口縁部径13.0cm、器高7.4cm。

16は、硬質砂岩製の砥石である。上面、側面の2ヵ所に穿孔がある。全長22.9cm、幅9.0cm、厚さ4.9cmを測る。

17は、胴下半で屈曲する高杯である。杯内底にミガキ状の暗文を施入する。内外面ナデ調整。胎土には微砂粒を含み、色調は淡赤褐色を呈す。口縁部径19.0cm、底部径13.2cm、器高13.3cmを測る。

18は、やや杯部が深いものである。内外面ナデ調整を施す。黄褐色を呈し、口縁部径18.9cmを測る。脚部は欠損している。

19は、杯部がやや丸みをもつもので、内外面ナデ調整を施す。茶褐色を呈し、口縁部径20.0cmを測る。脚部は欠損している。

20は、17に近いが、内外面ハケメが顕著に残る。胎土には微砂粒を含み、色調は暗黄褐色を呈す。口縁部径16.6cm、底部径12.4cm、器高12.8cmを測る。

21も同様のタイプであるが、脚部との接合面に充填による粘土塊が認められる。色調は淡黄褐色～赤褐色を呈し、口縁部径17.4cmを測る。脚部は欠損している。

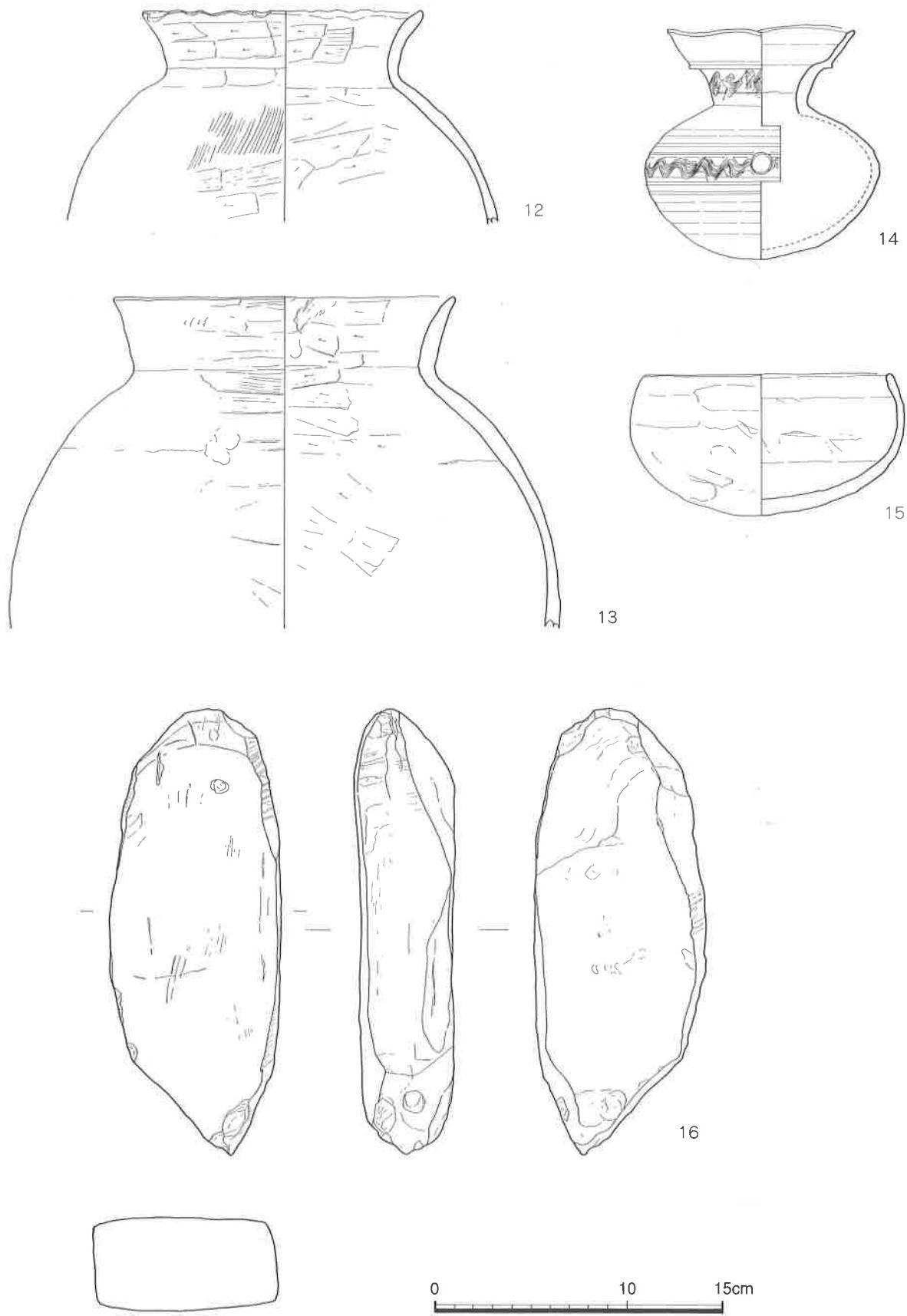
22は、胴下半の屈曲がややあまいもので、全体的に丸みを持つ。黄白色を呈し、口縁部径14.4cmを測る。脚部は欠損する。

23は、脚柱部であり、内外面ナデ調整を施す。色調は赤褐色を呈し、脚部径12.5cmを測る。

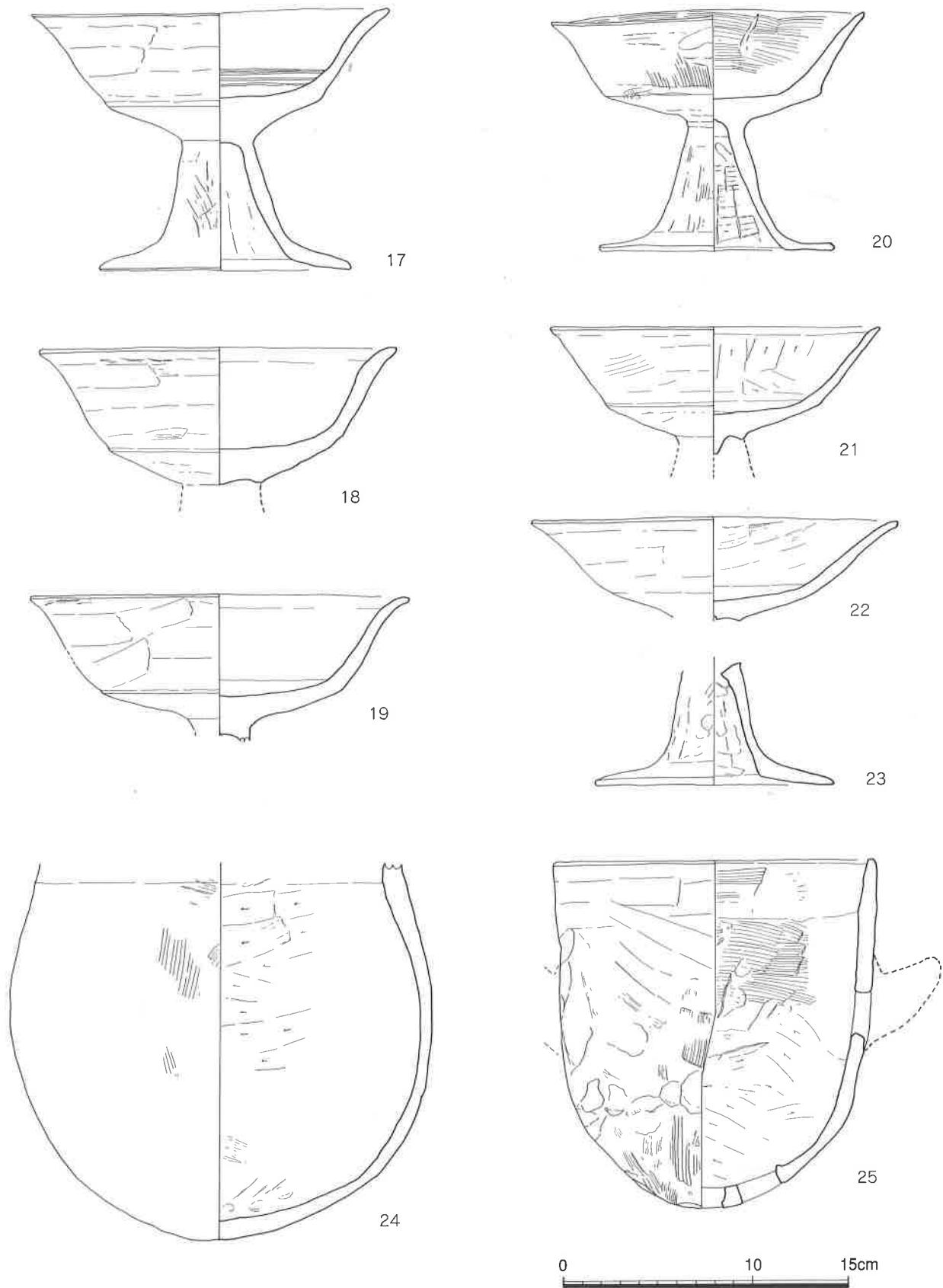
24は、底部が丸底を成す甕形土器である。外面ナデ調整、内面にはケズリ調整を施す。内面下方に指頭圧痕が認められる。色調は明茶色を呈し、現高で、19.8cmを測る。

25は、甌であり、握手部は欠損している。丸底から直線的に立ち上がる胴部となり、口縁部に至る。また、底部には5ヵ所に孔を穿つ。外面はナデ調整、内面下半はケズリ調整を施し、内面上位にはハケメが顕著に残る。胎土には砂粒を含み、色調は茶褐色を呈す。口縁部径17.0cm、器高18.3cmを測る。

26は、住居屋内土壙より出土した鉢形土器である。やや平底の感が残る底部より球形の胴部に至



第16図 I区下層2号住居遺物実測図-1 (S=1/3)



第17図 I区下層2号住居遺物実測図—2 (S=1/3)

り、小さめの口縁部が付く。外面には縦方向にハケメが残り、内面はケズリ調整が施される。

胎土には微砂粒を含み、色調は暗茶色を呈する。口縁部径28.2cm、底部径10.4cm、器高22.1cmを測る。

27は、頸部のしまりがない鉢形土器であり、底部は欠損する。色調は暗黄褐色を呈し、口縁部径28.0cmを測る。

3. 3号住居跡出土遺物（第19図）

28～30は、3号住居出土土器である。

28は、丸底で胴部が球形を成す鉢形土器である。外面ナデ調整、内面ケズリ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は茶褐色を呈す。

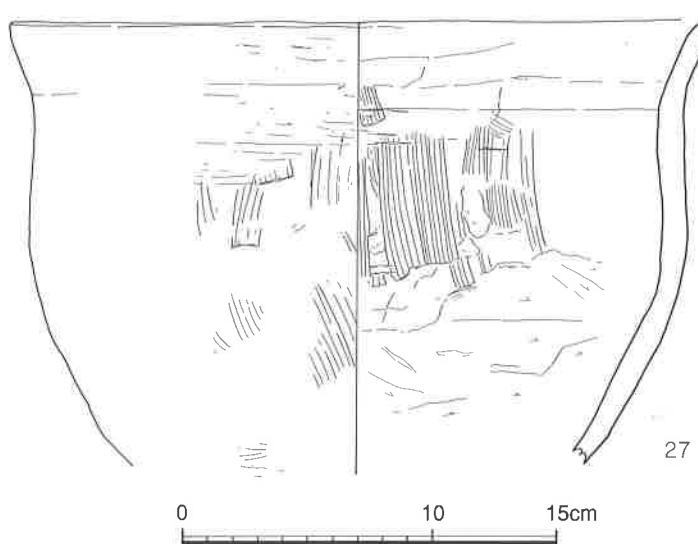
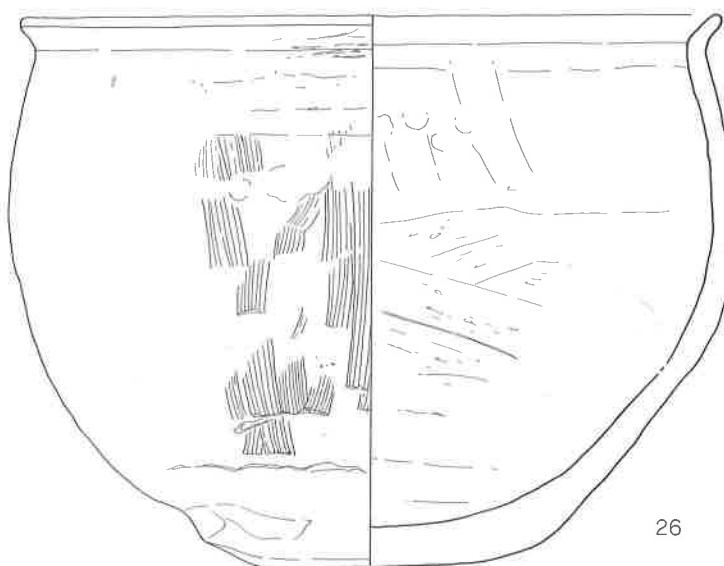
口縁部径21.8cm、器高15.5cmを測る。

29は、小型の甕形土器である。底部は丸底で、頸部のしまりはなく、小さめの口縁部が付く。内外面ナデ調整を施す。色調は淡赤褐色。口縁部径12.8cm、器高14.3cmを測る。

30は、小型の鉢形土器であり、頸部より上位を欠損する。底部は平底の感がある。色調は暗茶褐色。底部径4.0cm、現高で8.1cmを測る。

4. 4号住居跡出土遺物（第20図）

31は、4号住居カマド燃焼部内より出土した甕形土器である。頸部のしまりは強く、胴部は球形を呈する。外面にはハケメが残り、内面頸部下にはケズリ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は暗茶褐色を呈す。口縁部径17.2cmを測る。



第18図 I区下層2号住居遺物実測図—3 (S=1/3)

5. 1号土壙出土遺物（第21図）

32～36は、1号土壙出土遺物である。

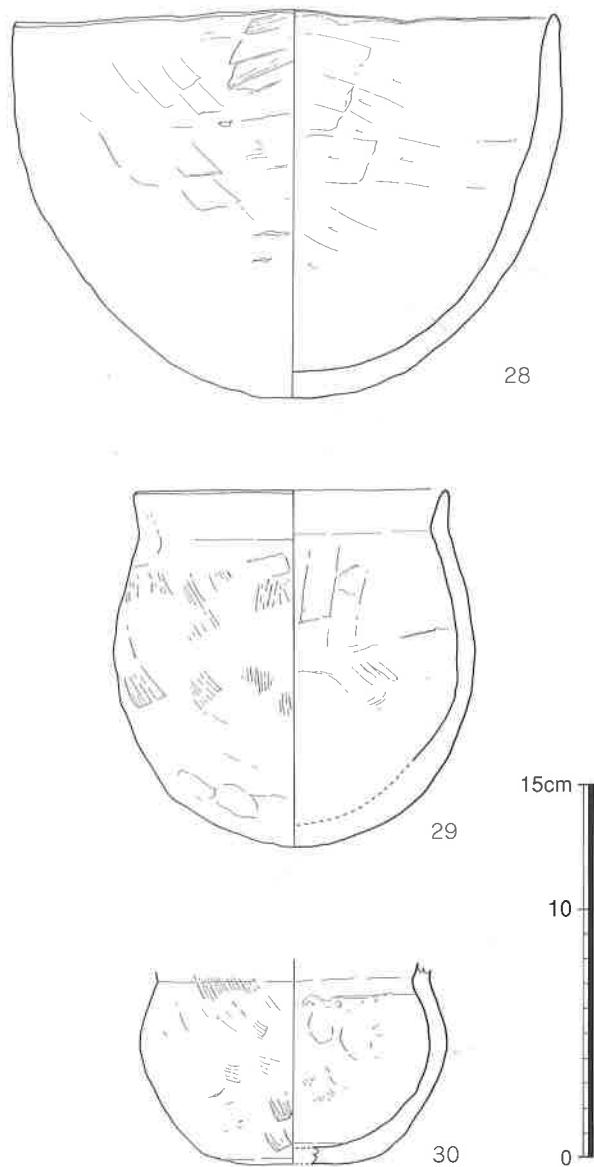
32は、土師器高台碗であり、シャープさが残る杯に高台が付く。全体的に横ナデ調整を施す。胎土には砂粒を若干含み、色調は赤褐色を呈す。口縁部径13.4cm、高台部径8.4cm、器高5.8cmを測る。

33は、高台部のみの破片である。高台は高く、開き気味である。色調は褐色を呈し、高台径11.4cmを測る。

34は、胴中位より欠損しているもので、杯部と高台部の境はしまりがない。内外面横ナデ調整を施す。色調は黄白色を呈す。高台部径8.6cm。

35は、古墳期の混入品である。丸みを持つ体部から口縁部に至り、端部は丸く收める。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を若干含み、色調は赤褐色を呈する。口縁部径14.0cm、器高4.9cmを測る。

36は、土師小皿であり、浅く、扁平なタイプである。内外面ナデ調整を施す。胎土に微砂粒を若干含み、色調は黄褐色を呈す。口縁部径9.4cm、底部径7.0cm、器高1.7cmを測る。



第19図 I区下層 3号住居遺物実測図 (S=1/3)

6. 3号土壙出土遺物（第22図）

37～42は、3号土壙出土遺物である。

37は、如意形口縁を呈する甕形土器である。頸部のしまりはなく、口縁端部下段に刻み目を入れる。また、底部には25mm程の孔を穿つ。内外面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は赤褐色を呈す。口縁部径21.8cm、底部径9.4cm、器高27.0cmを測る。

38は、甕形土器の小片であり、口縁端部に刻み目突帯を巡らす。内外面、板状工具によるナデ調整を施す。

39は、甕形土器の底部片であり、内外面ナデ調整を施す。胎土に微砂粒を多く含み、色調は茶褐色を呈する。底部径9.2cmを測る。

40は、鉢形土器の底部であろうか。内外面ナデ調整を施し、色調は黒茶色を呈する。底部径8.0cmを測る。

41は、凹基式の打製石鏃であり、表裏とも丁寧に加工している。全長1.9cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。黒曜石製。

42は、僅かに凹基を成す打製石鏃である。全長2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。黒曜石製。

7. 4号土壙出土遺物（第23図～24図）

43～59は、4号土壙出土の遺物である。

43は、甕形土器であり、弥生期の混入品である。未だ、平底の感が残る底部から丸みを持つ胴部に至る。外面は縦方向へのハケメが残り、内面にはナデ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、焼成は良、色調は暗茶褐色を呈す。時期は弥生時代後期後半であろう。底部径10.0cm、器高は現存高で、18.8cmを測る。

44は、土師器皿であり、底部からの開きが強い。口縁部径13.0cm、底部径7.0cm、器高2.0cmを測る。色調は黄褐色。

45は、土師器碗であり、胴部上位より欠損する。底部の器壁は厚い。底部径8.0cmを測り、色調は黄褐色。

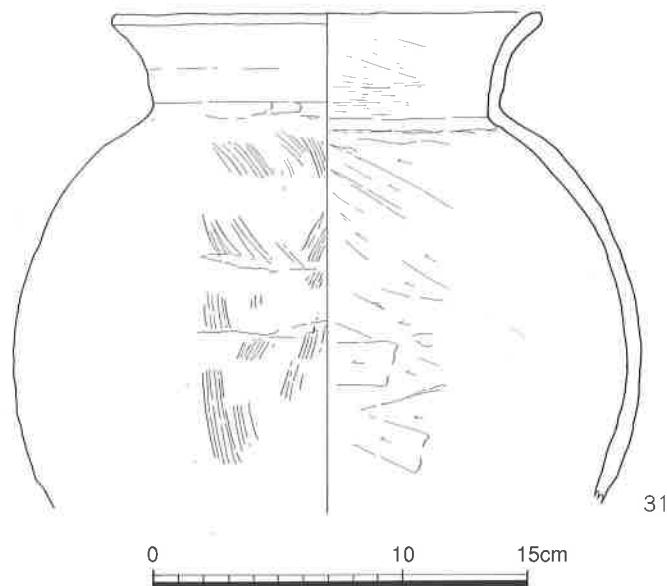
46は、土師器碗片であり、体部はやや丸みを持つ。内外面ナデ調整を施し、明黄褐色を呈す。復元で、口縁部径13.2cm、底部径8.0cm、器高4.0cmを測る。

47は、口縁を欠損しているが、45と同様のものである。底部径6.6cmを測る。明茶褐色。

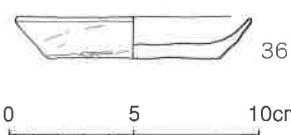
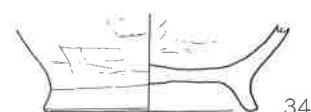
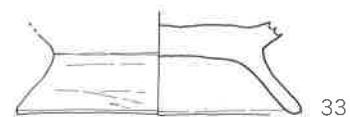
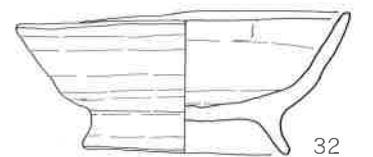
48は、甕形土器の口縁部片。頸部のしまりはなく、口縁部は肥厚している。丸みを持つ胴部となるものであろう。頸部内側下半までケズリ調整を施す。胎土には微砂粒を多く含み、色調は暗黄白色を呈す。

49は、土師器高台付皿であり、高台は欠損する。高台設置部分から肉厚となり、体部は直線的となる。内外面ナデ調整。胎土には微砂粒を含み、色調は淡茶褐色を呈す。口縁部径14.8cm。

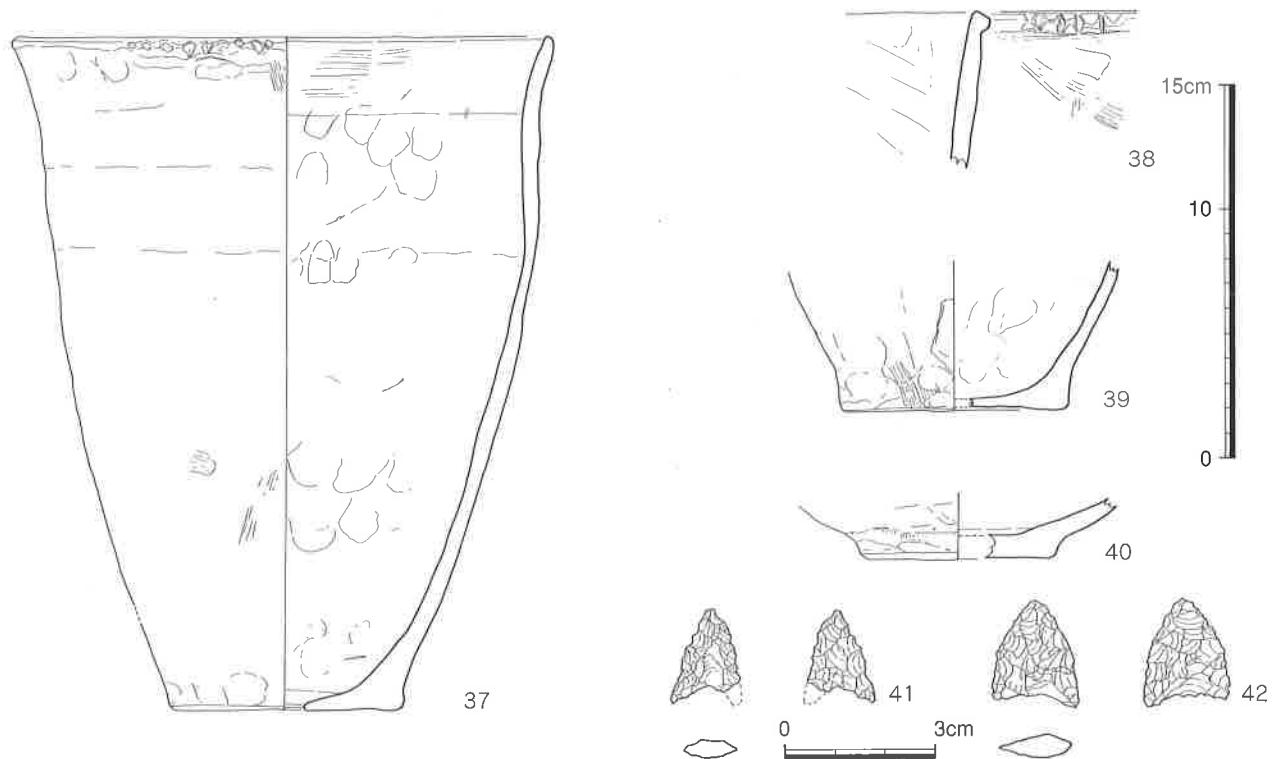
50は、土師器高台付碗であり、口縁部を欠損する。高台は小さく、直線的である。内外面ナデ調整を施し、色調は明茶



第20図 I区下層4号住居遺物実測図 (S=1/3)



第21図 I区下層1号土壤
遺物実測図 (S=1/3)



第22図 I 区下層 3号土壤遺物実測図 ($S=1/3 \cdot 2/3$)

褐色を呈す。高台径8.4cmを測る。

51は、土師器高台付椀の高台部である。高台は径の割には高い。色調は白桃色、高台径8.0cmを測る。

52は、越州窯の青磁碗であり、口縁部を欠損する。高台は蛇の目となる。胎土は密であり、山吹色の釉をかける。高台径5.6cm、現存高で3.8cmを測る。

53は、鞴の羽口片である。全長で5.9cm程しか残っていない。

54~59は、炉壁体の破片である。黒変した個所や胎土中にはスサの痕跡も確認できる。また、54、55には、送風孔と考えられる部分が観察できる。厚さ2.0cm~3.0cm。

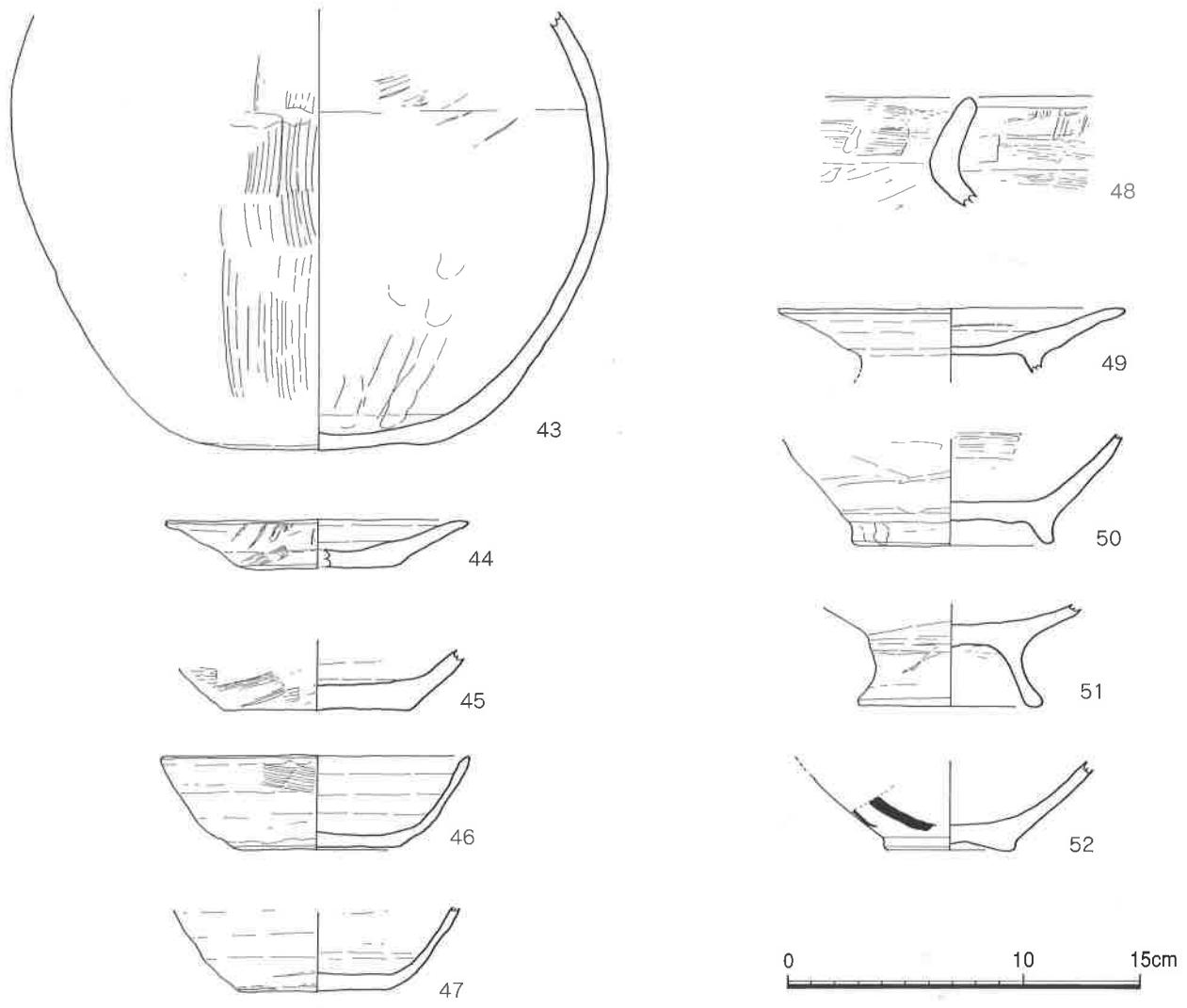
8. P-39出土遺物 (第25図)

60~62は、ピット内より三つに重なって出土した (上60、中61、下62) 弥生土器である。

60は、小型の甕形土器である。底部は平底を成し、丸みを持つ体部から口縁部に至る。外面ハケメ後ナデ調整を施し、板状工具の痕跡が認められる。また、内面は丁寧にナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色、焼成はやや不良である。口縁部径18.4cm、底部径6.5cm、器高18.2cmを測る。

61は、甕形土器であり、やや上げ底気味の底部から丸みを持つ胴部に至り、「く」の字状の小さい口縁部が付く。外面には縦方向へハケメが残り、内面はナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は淡褐色を呈する。口縁部径20.4cm、底部径7.0cm、器高25.9cmを測る。

62は、甕形土器であり、平底の底部から直線的な胴部に至る。口縁部は「く」の字状を呈し、頸



第23図 I区下層4号土壌遺物実測図 ($S=1/3$)

部のしまりは強い。外面には縦方向へ粗いハケメが残り、内面はナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。口縁部径18.1cm、底部径7.7cm、器高27.2cmを測る。

60はやや古相を呈するが、全て弥生時代後期前半代であろう。

9. P-40出土遺物（第25図）

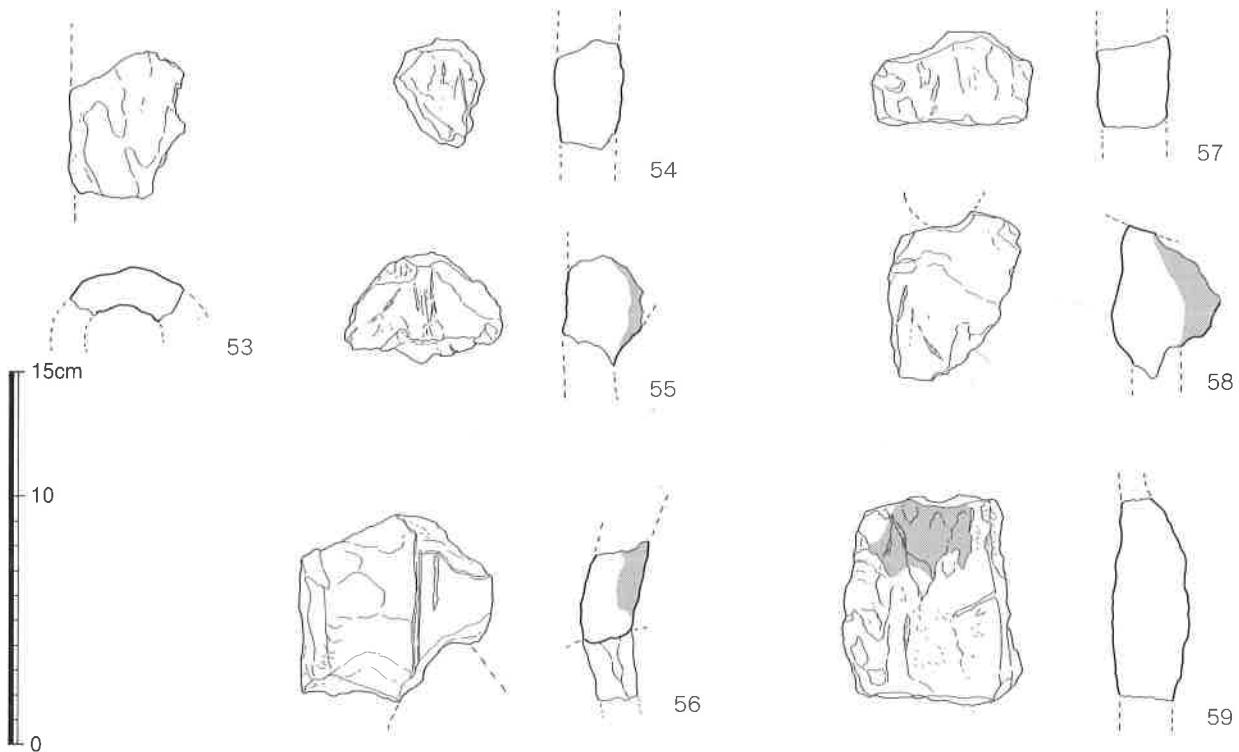
63は、P-40出土の甕形土器である。底部は平底で直径5cmと比較的小さい。丸みを持つ胴部からしまりの強い頸部に至り、「く」の字状の口縁部が付く。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を若干含み、焼成は良、色調は暗茶色を呈する。口縁部径22.0cm、底部径5.0cm、器高33.0cmを測る。

全体的には新しい様相を呈するが、底部の感じより弥生時代後期前半代としたい。

10. 上層遺構出土遺物（第26図）

64~73は、表土以下直ぐに検出した遺構出土の遺物である。

64~66上層ピット39出土の遺物である。



第24図 I区下層4号溝状遺構遺物実測図 (S=1/3)

64は、「板付Ⅰ式」の甕形土器口縁部片であり、内傾して立ち上がるタイプであり、口縁端部には刻み目を入れる。外面板状工具による擦過調整を施し、内面はナデ調整となる。胎土には微砂粒が多く含み、色調は暗茶色～黒色を呈す。

65も「板付Ⅰ式」の甕形土器口縁部片であり、口縁端部に刻み目を入れる。外面にはハケ目が残る。胎土には微砂粒を含み、色調は茶褐色を呈する。

66は、「板付Ⅰ式」の鉢形土器片である。胴部はやや丸みを持ち、口縁端部に刻み目を施す。外面板状工具による擦過調整を施し、口縁内部には、指頭圧痕が認められる。胎土には微砂粒を多く含み、色調は暗茶色。口縁部径は、復元で21.6cmを測る。

67は、上層ピット3出土の鉢形土器である。底部はやや平底の感が残り、内傾して口縁部に至る。外面板ナデ、内面ケズリ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は暗茶褐色を呈す。口縁部径15.8cm、底部径9.0cm、器高11.9cmを測る。

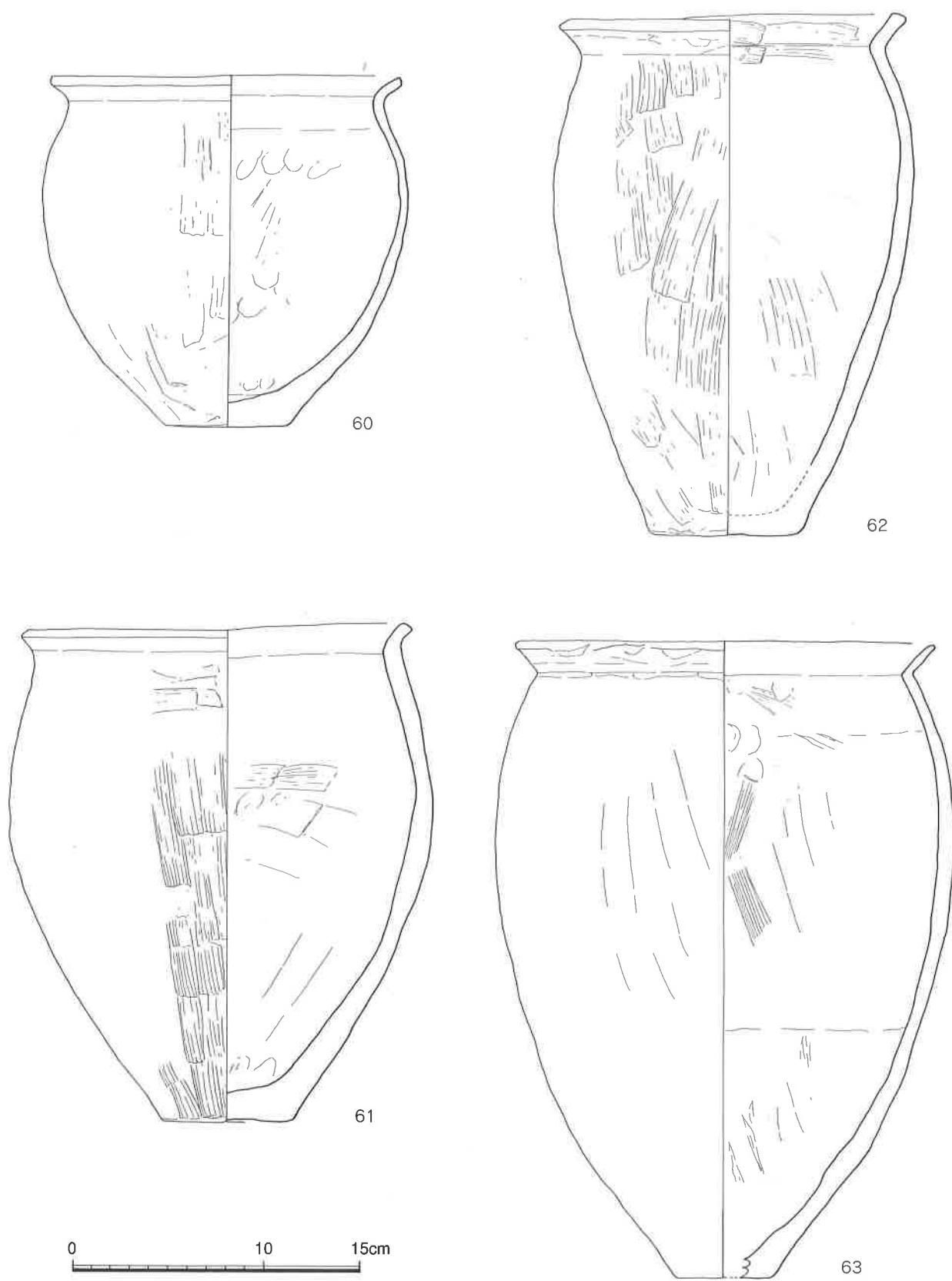
68は、上層ピット11出土の土師器高台付椀であり、体部中位より上を欠損する。内外面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は淡黄白色を呈す。高台部径9.4cmを測る。

69は、上層ピット38出土の土師器高台付椀であり、体部下位のみの破片である。内外面ナデ調整を施し、色調は淡黄白色を呈す。

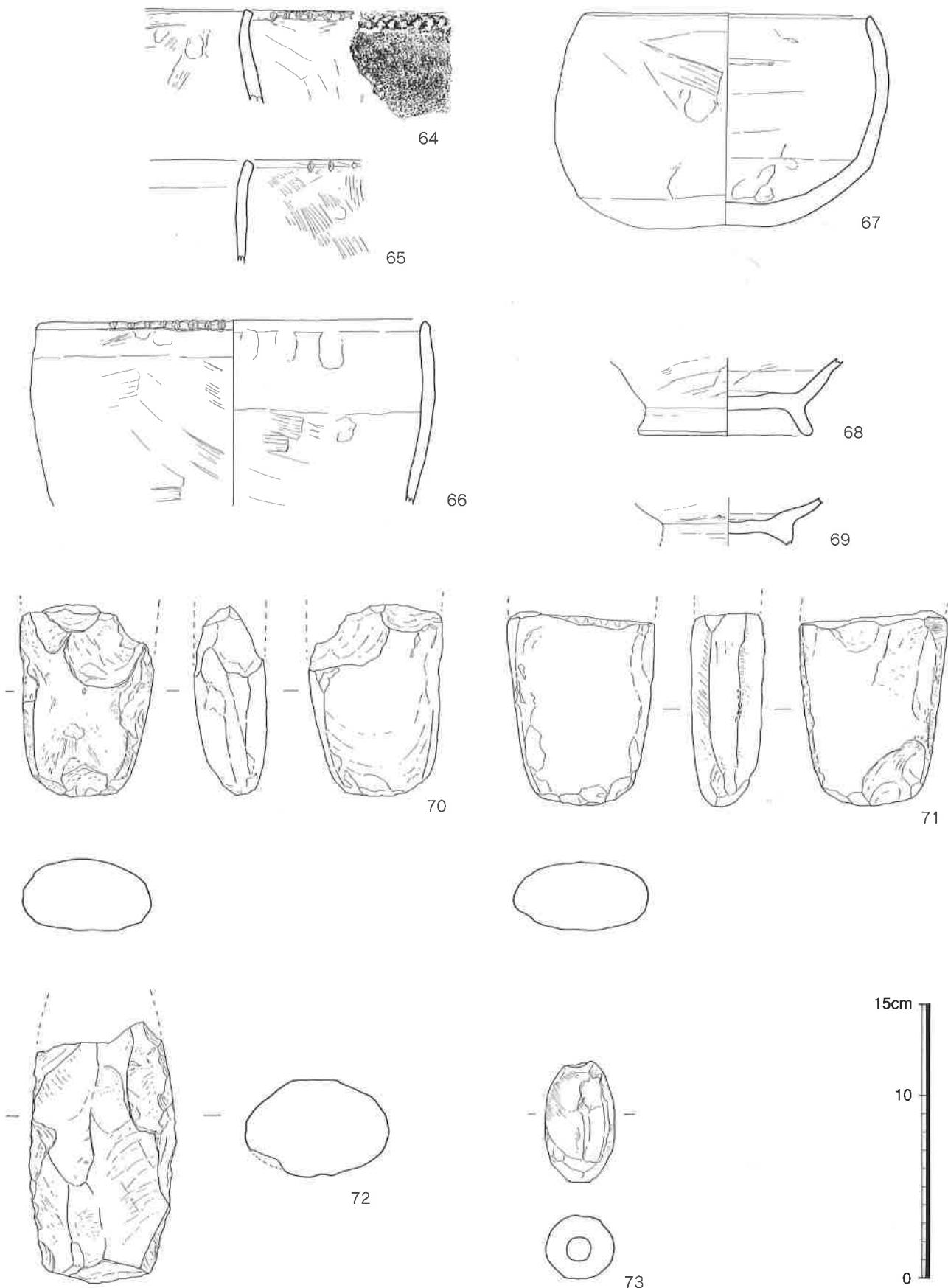
70は、上層SX4出土の磨製石斧であり、基部を欠損する。現存長で10.4cm、幅7.0cm、厚さ3.8cmを測る。硬質砂岩製。

71は、上層ピット27出土の磨製石斧であり、基部を欠損する。表裏とも丁寧に研磨し、先端部には打突による剥離面が認められる。現存長で10.0cm、幅7.8cm、厚さ4.0cmを測る。硬質砂岩製。

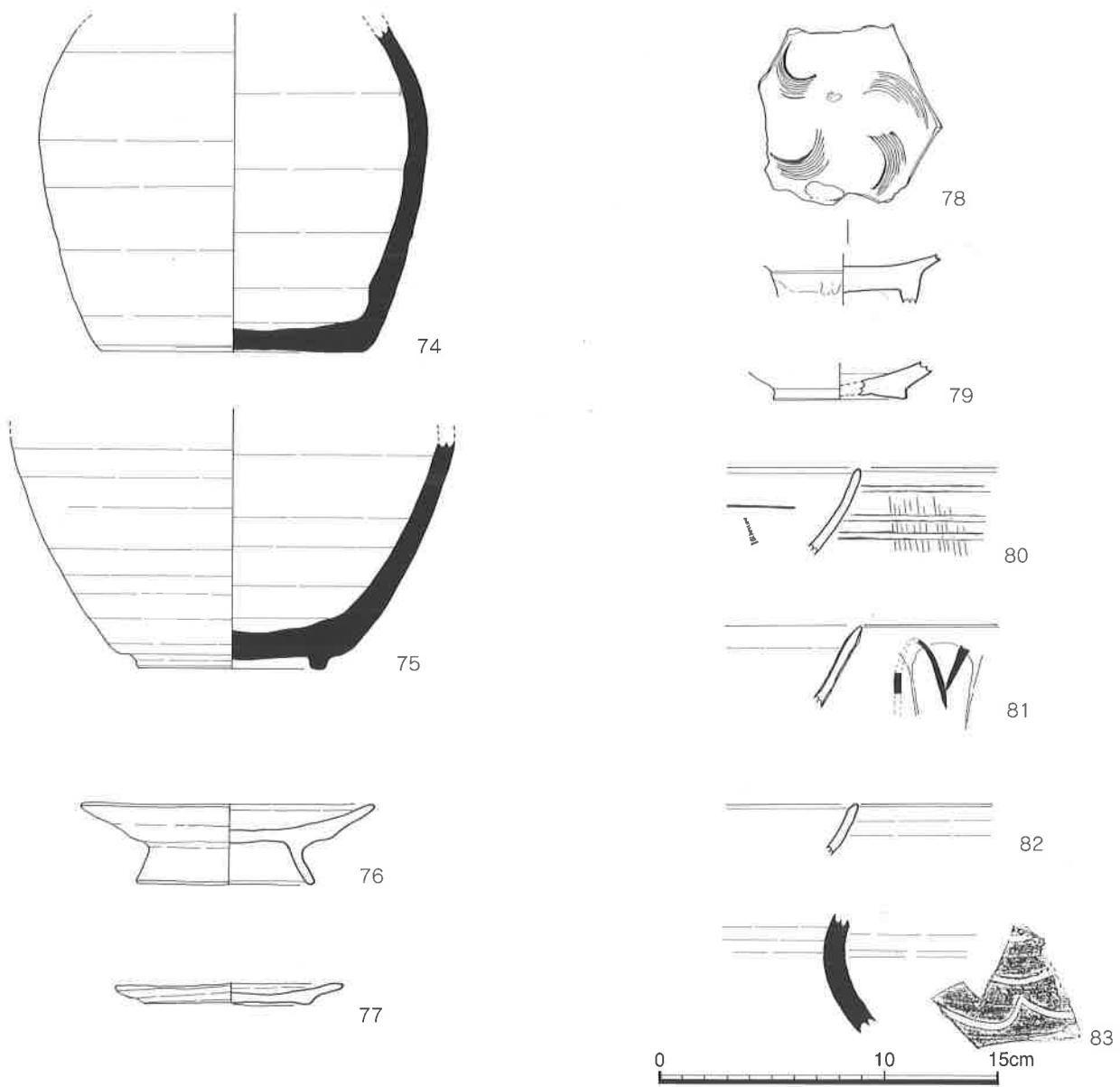
72は、上層ピット40出土の石斧未製品であり、表裏とも剥離面は大きい。現存長で13.0cm、幅8.0



第25図 I区下層P-39・40遺物実測図 ($S=1/3$)



第26図 I区上層遺構遺物実測図 ($S=1/3$)



第27図 I区上層包含層遺物実測図—1 (S=1/3)

cm、厚さ5.2cmを測る。玄武岩製。

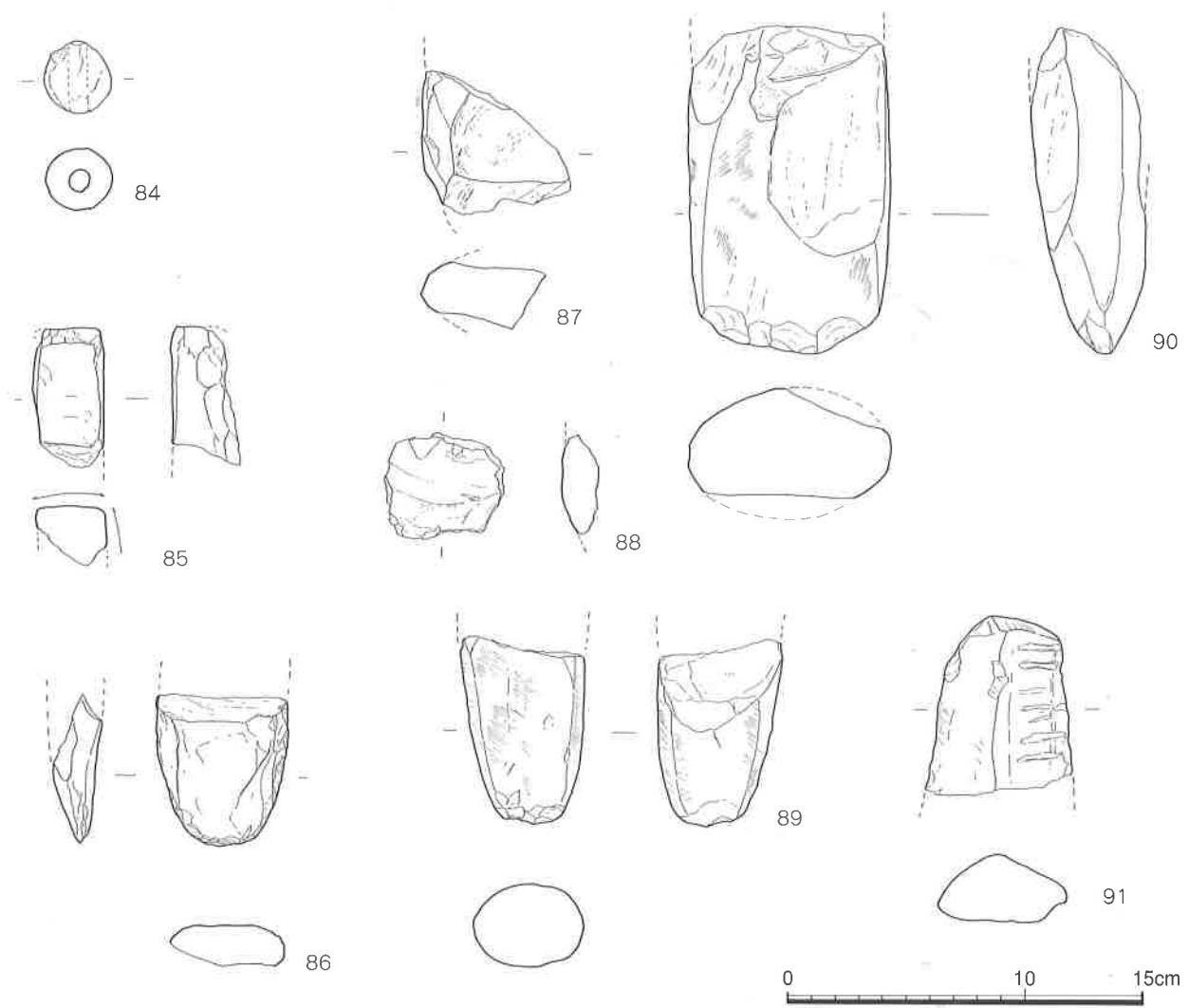
73は、上層調査区排水溝掘削時に出土した土錘である。外面には紐ずれの痕跡が顕著に観察できる。1.2cm程の孔を穿ち、色調は淡黄白色を呈す。全長6.4cm、幅3.8cm、厚さ3.4cmを測る。

64~66、70~72は弥生時代早期から前期前半代。67は古墳時代前期。68、69、73は平安初頭であろう。

11. 包含層出土遺物（第27図・第28図）

74~91は、上層の遺構検出時及び遺構面直上出土の遺物である。

74は須恵器の瓶形土器であり、胴上位より欠損する。底部は平底を呈し、胴中位より内傾するものである。内外面回転ヘラケズリを施す。胎土には砂粒を含み、焼成は良好、色調は灰色を呈する。



第28図 I 区上層包含層遺物実測図－2 ($S=1/3$)

底部径11.4cm、現存高15.0cmを測る。

75は、須恵器高台付土器であり、高台上は鉢形を成すものであろう。内外面回転ヘラケズリを施す。胎土には砂粒を若干含み、色調は灰色、焼成は良好である。高台径8.2cmを測る。

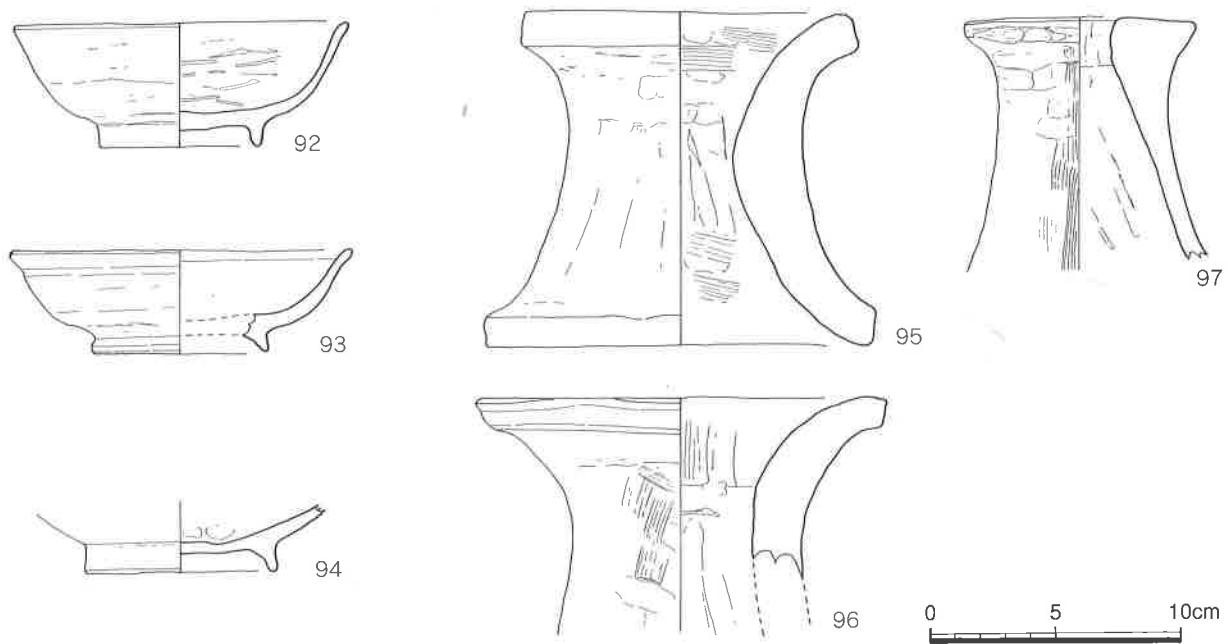
76は、土師器高台付皿である。体部は直線的に開き、高台は比較的高いものである。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色、焼成は良である。口縁部径13.2cm、高台部径8.0cm、器高3.6cmを測る。

77は、土師器小皿であり、器高が低く、扁平なタイプである。内外面ナデ調整を施し、色調は黄白色を呈す。口縁部径10.2cm、底部径7.4cm、器高0.7cmを測る。

78は青磁碗の底部片であり、高台部は欠損する。見込みには四連の櫛描花文を施入する。胎土は密で、灰色を呈しており、釉は淡黄緑色を呈する。

79は、綠釉陶器片であり、高台底部は「蛇の目」状を成す。胎土は密で灰色で、釉は淡黄緑色を呈する。復元で、高台径6.0cmを測る。

80は、青磁碗の口縁部片である。



第29図 I 区上層トレンチ遺物実測図 ($S=1/3$)

81も青磁碗の口縁部片であり、体部には連続の花弁文を施す。

82は、白磁口縁部片。

83は、須恵器であり、壺若しくは瓶の頸部であろう。内外面ナデ調整で、外面に波状文の沈線が入る。胎土には砂粒を若干含み、色調暗灰色、焼成は良好である。

84は、土錘であり、色調は明茶褐色を呈す。幅2.9cmを測る球形で、0.9cm程の孔を穿つ。

85は、砥石片であり、5.8cm程が残る。粘板岩製。

86は、磨製石斧で、先端部のみの破片である。現存長6.2cm、幅5.8cm、厚さ1.2cmを測る。玢岩製。

87は、扁平を呈する磨製石斧であり、先端部に近い部分の破片である。現存長6.0cm、幅6.0cm、厚さ2.8cmを測る。玄武岩製。

88は、磨製石斧片であり、先端部に近い部分である。現存長4.3cm、幅5.0cmを測る。頁岩製。

89は、磨製石斧であり、基部を欠損する。先端部は、打突による剥離面が顕著に観察できる。現存長7.5cm、幅5.0cm、厚さ3.6cmを測る。硬質砂岩製。

90は、大形の磨製石斧であり、基部を欠損する。現存長13.8cm、幅8.5cm、厚さ4.6cmを測る。凝灰岩質頁岩製。

91は、用途不明の石器であり、表面には小溝状の痕があり、紐ずれの痕跡とも考えられる。現存長7.3cm、幅5.8cm、厚さ2.9cmを測る。頁岩製。

12. 上層トレンチ出土遺物（第29図）

92～96は、上層調査終了後に中央部に設定したトレンチ出土の遺物である。

92は、高台付碗であり、所謂「黒色土器」と呼ばれるものである。高台部は低く直線的であり、口縁部は肥厚している。内外面ナデ調整であるが、内面にはミガキ調整も施す。胎土には微砂粒を僅かに含み、色調は黒色、焼成は良好である。口縁部径は復元で13.4cm、高台部径6.3cm、器高4.9cm

を測る。

93は、土師器高台付椀である。内外面ナデ調整を施す。色調は明茶褐色。口縁部径13.8cm、高台部径7.1cm、器高13.8cmを測る。

94も土師器高台付椀であり、体部下位より上を欠損する。所謂「内黒土器」と呼ばれるものである。内外面ナデ調整であり、内底には指頭圧痕が残る。色調は黄白色を呈す。高台部径7.8cmを測る。

95は、弥生土器の器台であり、やや肉厚の感が強いものである。外面ナデ調整、内面にはハケメが残り、中央にはしづら痕が観察できる。胎土には砂粒を多く含み、色調は明茶褐色、焼成は良好である。受け部径13.0cm、底部径15.5cm、器高13.2cmを測る。

96は、器台の受け部片である。内外面ハケ調整後、ナデ調整を施す。色調は淡黄褐色を呈す。受け部径16.5cmを測る。

97は、受け部が水平面を持つタイプである。受け部端部は丁寧に面取りを行う。外面ハケ調整後、ナデ調整。内面はケズリ調整を施す。色調は明茶褐色。口縁部径10.0cmを測る。

13. 下層包含層出土遺物（第30図～第31図）

98～121は、調査区中央部の遺構面直上出土。99～118は、下層検出時出土の遺物である。

98は、大形の鉢形土器であり、底部を欠損する。胴部は丸みを持ち、しまりの強い頸部から口縁部へ至る。また、頸部には三角凸帯が廻る。内外面細かいハケメ調整を施し、内部下半はナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は淡褐色、焼成は良好である。口縁部径32.0cm、現存高22.6cmを測る。

99は、甕形土器であり、底部を欠損する。「く」の字状の口縁部を持ち、頸部のしまりは強い。外面粗いハケメ調整を施し、内面は丁寧なナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色、焼成はやや不良である。口縁部径19.0cm、現存高21.8cmを測る。

100は、複合口縁を成す壺形土器である。口縁端部は欠損しているが、丸く収められるものであろう。複合口縁上部には、櫛歯による連続の半円弧文が描かれる。内外面ハケメ調整。胎土には砂粒を含み、色調は明茶褐色、焼成は良好である。

101は、高杯であり、脚部を欠損する。胴部は直線的に開き、上位1／3で屈曲して口縁部へ至る。内外面ナデ調整であり、外面上位にはハケメが残る。胎土には微砂粒を含み、色調は茶褐色、焼成は良である。口縁部径30.2cmを測る。

102は、同案窯系青磁の小皿である。見込みには、櫛歯による櫛点描文を施入する。胎土は密で灰色を呈し、淡黄緑色の釉をかけ、底部外面を搔き取る。口縁部径10.2cm、底部径4.8cm、器高2.2cmを測る。

103は、青磁の高台部である。胎土は密で、微砂粒を僅かに含む。淡黄緑色の釉をかける。高台は低く、径6.0cmを測る。

104は、須恵器高台付土器であり、上位は壺若しくは、鉢形であろう。内外面ヘラケズリを施し、内面には叩きの痕跡も観察できる。色調は外面淡赤褐色、内面灰色。高台部径12.0cmを測る。

105は、土師器椀である。胎土には砂粒を含み、色調は淡茶褐色を呈す。口縁部径12.6cm、底部径7.2cm、器高4.0cmを測る。

106、107、108は、土師器椀であり、ともに口縁部を欠損する。底部径7.0cm前後を測り、色調は

茶褐色を呈す。

109は、土師器高台付椀である。高台部は高く、外に開くタイプであり、口縁部も外側に開く。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は明茶褐色、焼成は良である。口縁部径14.4cm、高台部径9.4cm、器高4.9cmを測る。

110も土師器高台付椀であり、高台部は欠損しているが、径が小さく、高いタイプであろう。体部は、直線的となり、扁平で浅いものが付く。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色、焼成はやや不良である。口縁部径13.1cmを測る。

111、112は、土師器高台付椀であり、体部の浅い椀が付く。色調はともに茶褐色であり、高台部径7.8cm～8.7cmを測る。

113、114は、土錘であり、ともに球状を成す。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。直径3.0cmを測り、孔は0.9cm程である。

115～117は滑石製品である。115は、中央に2ヶ所の穿孔を持つ。直径2.3cm、厚さ0.3cmを測る。

116は、やや欠損するが、115と同様のものである。直径2.3cm～2.6cmといびつであり、厚さは0.3cmを測る。

117は、中央に1箇所の穿孔を持つもので、他と違い、面取りが雑である。直径2.0cm、厚さ0.5cmを測る。

118は、丸玉であり、直径0.4cm、幅0.2cmを測る。

119は、磨製石鎌であり、先端部は欠損するが、柳葉形を成すものである。鎌はしっかりと通り、断面は菱形、基部は六角形を成す。現存長5.0cm、幅1.1cmを測る。片麻岩製。

120は、打製石鎌であり、凹基形を成し、表裏とも丁寧に加工する。全長2.2cm、幅1.6cmを測る。黒曜石製。

121は、玄武岩製の石器であり、棒状を成す。表面は磨いているが、形状より石斧の未製品と考えたい。全長14.5cm、幅6.6cm、厚さ5.7cmを測る。

14. 下層トレンチ出土遺物（第32図）

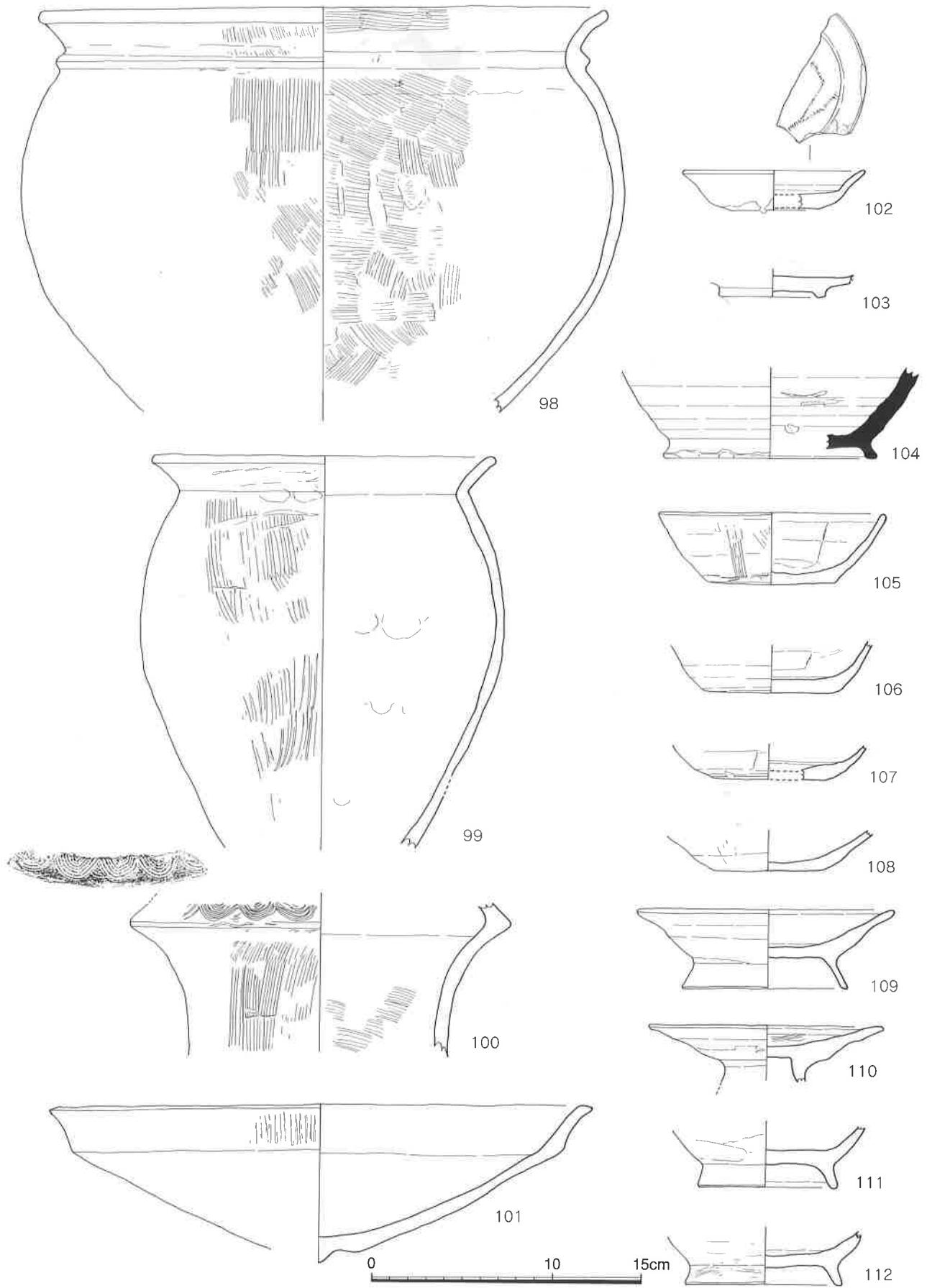
下層検出の遺構中、1号住居跡南側部分においては、弥生時代前期の遺物が出土していた。また、土色からも何らかの遺構を想定していたが、面的に確認する事ができず、トレンチを設定し、掘り下げを行った。結果的には、遺物が出土したのみで、遺構を検出する事はできなかった。

122は、やや大形の壺形土器口縁部片である。口縁部は粘土帯の添付により肥厚している。内外面板状工具による擦過調整。胎土には微砂粒を多く含み、色調は黒褐色、焼成は良好である。外面には、黒色顔料の塗布が認められる。

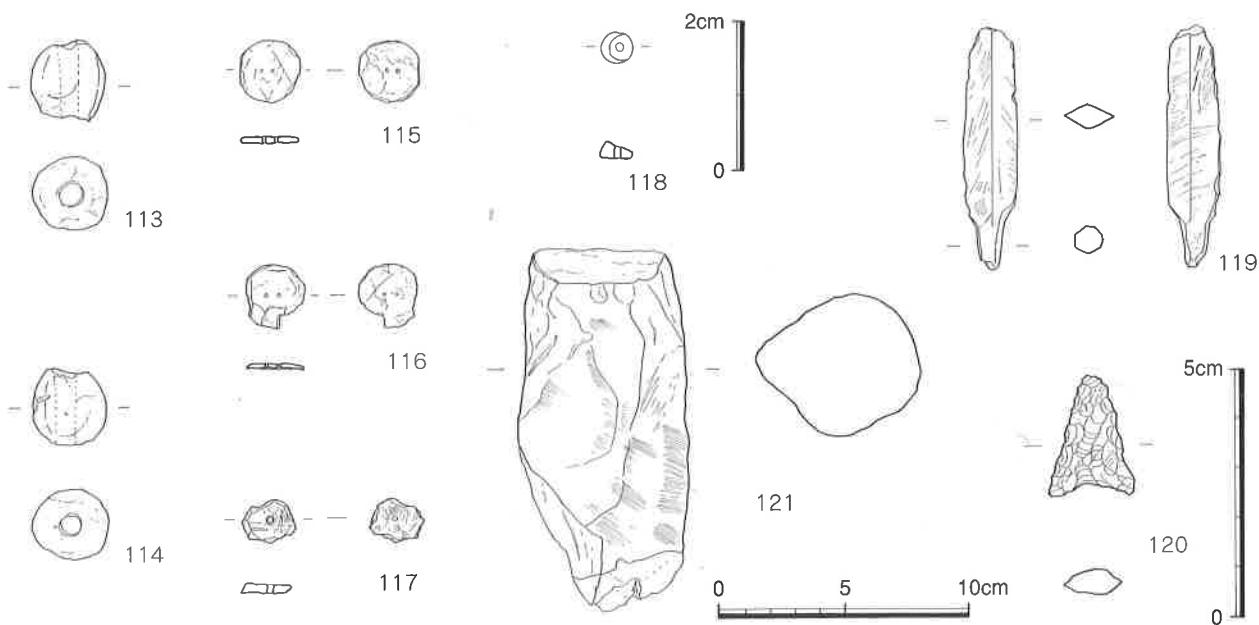
123は、壺形土器口縁部片である。口縁端部には刻み目を施入し、調整は内外面、板状工具による擦過である。色調は黒茶色を呈す。

124は、あまり如意状とならない壺形土器である。胴部は直線的であり、口縁部上部は平坦面を持つ。外面縦方向のミガキ調整を施し、内面はナデ調整である。胎土には微砂粒を多く含み、色調は黄褐色、焼成は良である。口縁部径19.6cm、現存高10.5cmを測る。

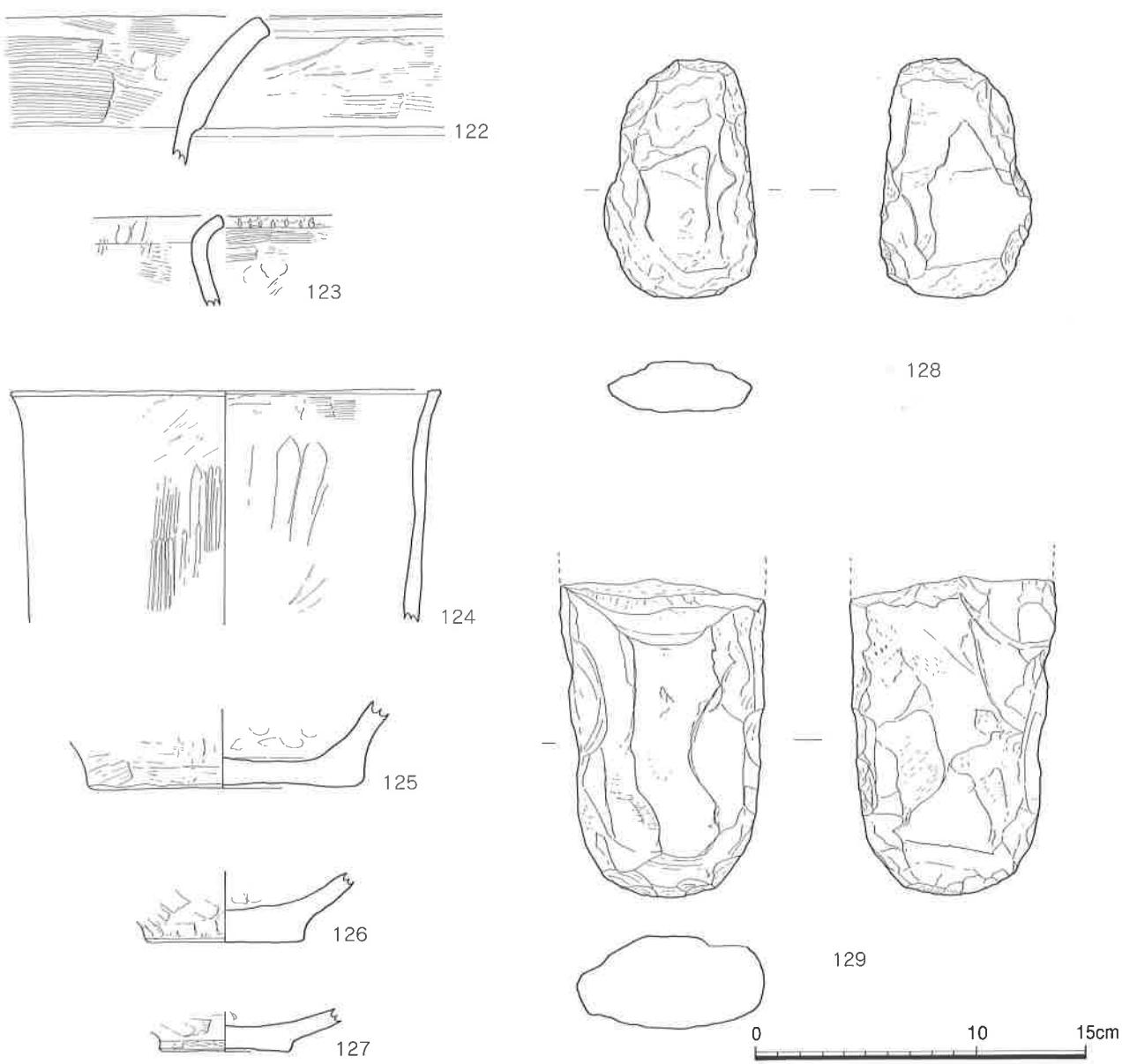
125は、壺形土器底部であり、内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は暗茶色。底径12.5cmを測る。



第30図 I区下層包含層遺物実測図一 1 ($S=1/3$)



第31図 I区下層包含層遺物実測図-2 (S=1/3・1/1・2/3)



第32図 I区下層トレンチ遺物実測図 (S=1/3)

126は、壺形土器底部であり、内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は暗黄白色を呈す。底部径7.1cmを測る。

127は、やや上げ底となる底部であり、立ち上がりからみて鉢形土器となるものであろう。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は赤褐色を呈す。底部径6.0cmを測る。

128は、端部を加工した頁岩製の石製品である。石斧の未製品であろう。全長11.0cm、幅6.7cm、厚さ2.3cmを測る。

129も石斧未製品であろう。全長14.5cm、幅9.2cm、厚さ4.2cmを測る。玄武岩製。

C. 小 結

I区の調査においては、5世紀初頭から前半代の竪穴式住居跡を中心とした遺構が検出された。同時期の住居群としては、石崎丘陵南部の東側緩斜面（曲り田周辺遺跡IV地区）でも確認されており、古墳時代前期の段階では、丘陵上において比較的しっかりとした地質を選んだ上で、全域に渡って集落形成がなされていたのであろう。

本調査区で検出した住居では、1号、2号住居埋土中にかなりの炭化した柱材が検出されており、状況的に焼失住居であると考えられる。また、両住居ともまとまった土器が出土しており、同時期の一括資料として捉えられるものである。

カマドの設置については、2号、4号住居で確認しているが、特に2号住居出土土器中には、初期須恵器が1点あり、同地区のカマド導入時期の指標となるものであろう。

奈良～平安期の遺構としては、I区南として拡張した調査区の南側に集中する。立地的に好条件の部分が近年の建物（養鶏場）により、削平されていたのが残念であるが、南側隅において、大型の掘立柱建物と考えられるピット群や官道設置による切り通しと思われる落ち込みが検出された事は興味深く、詳細な報告については、(中)卷に譲りたいが、同遺跡の性格を検討する上で重要な遺構と言えよう。

3. V区の調査

V区は丘陵鞍部の東側部分にあたる。地形は、調査区南西部は平坦となるが、全体的には東側に緩やかに傾斜している。また、後世の開墾により、東半分が段丘状に切られ、かなりの段差がついていた。調査前、2棟の養鶏場施設が立っていた事もあり、これによる遺構面の削平もひどく、かなり、手を加えられた地形と言える。

V区の遺構検出状況は、調査開始後、調査区南半分で、表土以下直ぐに南北に平行して走る近世期の溝状遺構7条が確認された。また、北半分では大量の弥生土器を含む溝状遺構が確認されたが、土質により、プランが明確にならなかった（上層）。このため、現状で確認できる遺構と段丘部の壁の精査を行い、北半分については、下層として調査を続行している。

東側段丘下段においては、かなりの弥生前期の土器が出土しているが、明確な遺構は確認されず、調査区外となる町道側以東に稻作開始期の遺構が広がるものであろう。

検出遺構としては、近世溝状遺構7条、柱穴状ピット、弥生期の竪穴式住居1基、溝状遺構1条等である。順次、説明を加える。

a. 検出遺構

1. 近世溝状遺構

調査区南半分で検出した溝状遺構であり、南北方向に平行した形で、7条が確認された。このため、西側より1号、2号・・・とナンバーリングしている。

近世溝－1 幅200cm、深さ12cmを測り、17mの長さで検出した。後世の開墾による段差と接しており、形状は乱れているが、2段掘りとなっている。

近世溝－2 幅90cm、深さ18cmを測り、16m80cmの長さで検出した。長方形を呈し、溝内には、炭化物を敷きつめられていた。

近世溝－3 幅110cm、深さ13cmを測り、15mの長さで検出した。溝中、4ヵ所に正方形の縦坑があり、形状より、近世以降の植樹坑と考えられる。

近世溝－4 幅100cm、深さ22cmを測り、14m50cmの長さで検出した。長方形を呈し、溝内には、炭化物を敷きつめられていた。

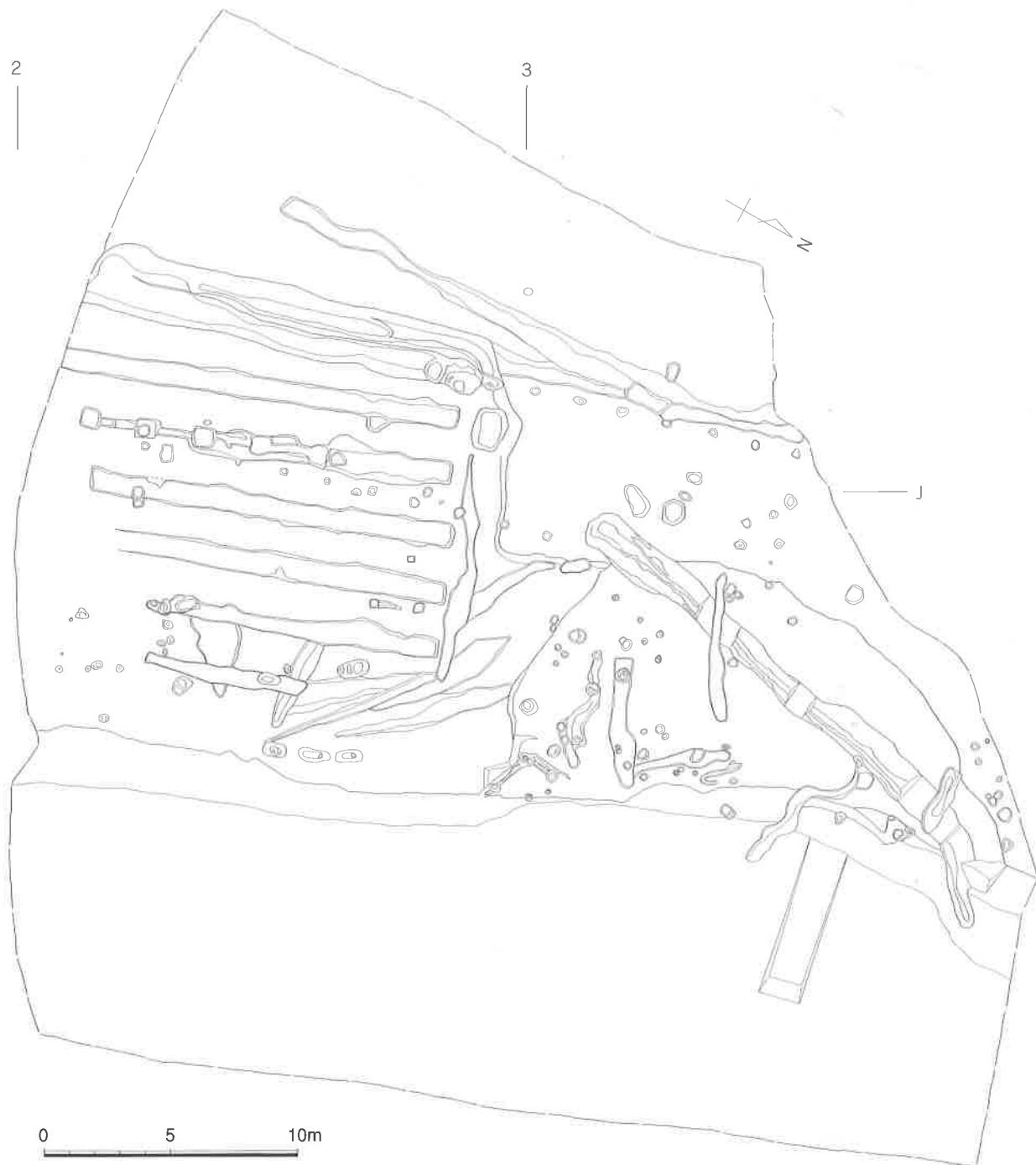
近世溝－5 幅100cm、深さ20cmを測り、13m30cmの長さで検出した。長方形を呈し、溝内には、炭化物を敷きつめられていた。

近世溝－6 幅60cm、深さ8cmを測り、11m70cmの長さで検出した。北側に向かって、形状が乱れ、途切れていた。

近世溝－7 幅70cm、深さ5cmを測り、6m40cmの長さで検出した。北側で途切れている。

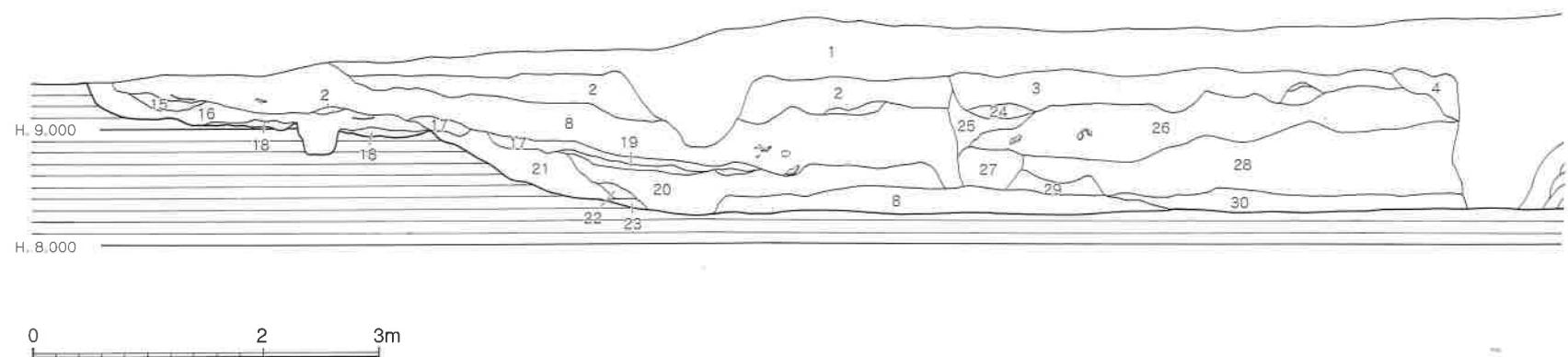
2. 1号溝状遺構

調査区北半分で検出した溝状遺構であり、北東側から南西に向けて伸びる。プランが明確ではな

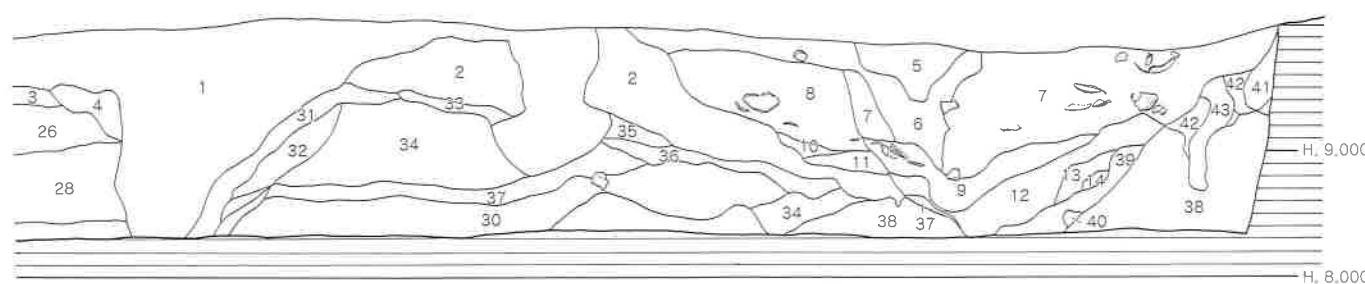


第33図 V区の全体図 ($S=1/250$)

1号 住居跡



1号 溝状遺構



- | | | | | |
|-----------------|--------------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1 黄白色砂質土 | 11 茶色土 (10より明) | 21 暗黒茶色土 | 31 暗黄色土 | 41 茶色土 (40より暗) |
| 2 淡茶色土 | 12 明茶色土 (地山ブロック含む) | 22 暗茶色土 | 32 暗黄色土 (31より明) | 42 淡茶色土 |
| 3 淡茶色土 (やや暗) | 13 茶色土 (地山ブロック含む) | 23 明黄褐色土 | 33 明黄褐色土 | 43 淡茶色土 (42より暗) |
| 4 淡茶色土 (炭まじり) | 14 茶色土 (13より暗) | 24 暗黄色土 | 34 黑茶色土 | |
| 5 明褐色土 | 15 黒色土 (赤色ブロック含む) | 25 暗黄色土 (24より明) | 35 茶色土 (遺物含む) | |
| 6 明茶褐色土 | 16 黒茶色土 | 26 暗茶色土 (遺物含む) | 36 明茶色土 | |
| 7 茶褐色土 | 17 暗茶色土 (炭まじり) | 27 黒色土 | 37 明黄色土 | |
| 8 黒色土 (遺物多量に含む) | 18 焼土 | 28 暗茶色土 (26より暗) | 38 明褐色土 (地山) | |
| 9 暗茶色砂質土 (炭まじり) | 19 黃褐色土 | 29 黒色土 (27より暗) | 39 暗黄色粘質土 | |
| 10 茶色土 | 20 暗茶色土 | 30 明茶色土 | 40 茶色土 | |

第34図 V区東壁土層図 (S=1/60)

く、2箇所にトレーニチを設定し、断面による調査を行った。詳細は次項に譲りたい。

3. 段丘部東壁（第34図）

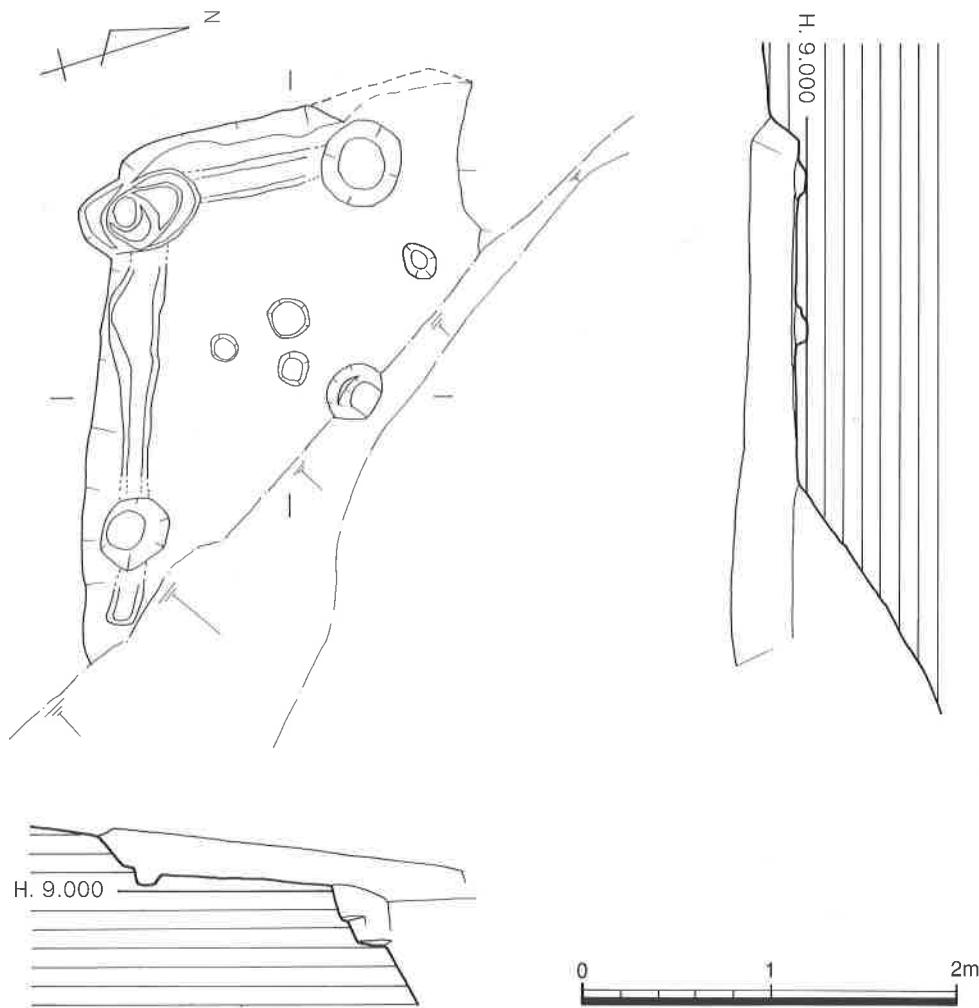
V区の地形は、後世の開墾により、段丘状にカットされている。また、上層として確認した遺構も本来の地山ではなく、1号溝状遺構の確認のためにも段丘面東壁の精査を実施した。

精査の結果では、南側隅において、竪穴式住居1棟が確認され、1号溝上遺構の断面も「V字」形を呈する事が判明している。

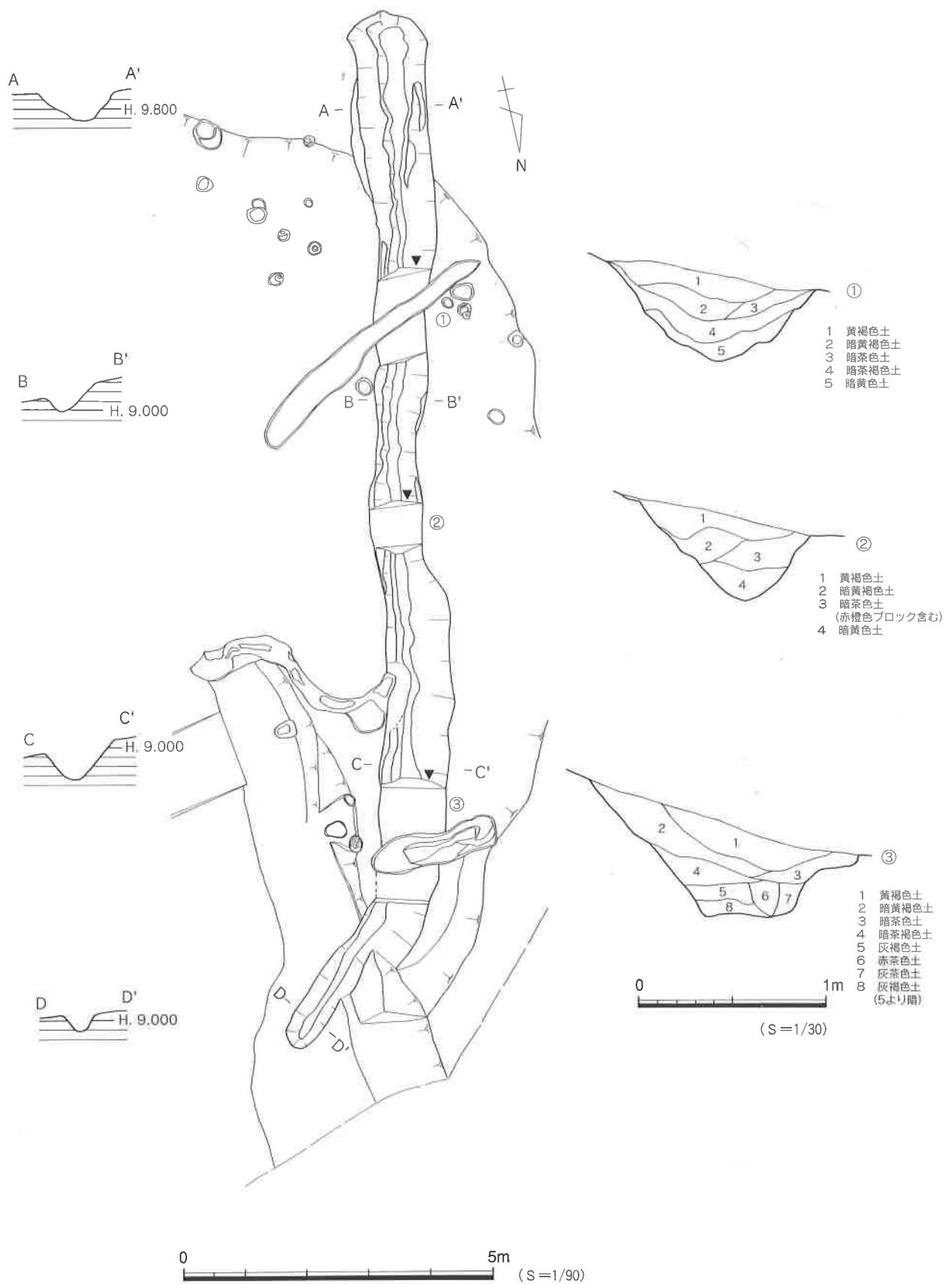
これにより、下層の掘下げを行い、引き続き、調査を開始した。

4. 1号住居跡（第35図）

下層で検出した竪穴式住居であり、方形を呈する。近世の開墾により大半は失われ、一辺しか残っていない。壁際に接して3個の柱穴状ピットを検出しておらず、周壁溝も確認された。また、床上



第35図 V区下層1号住居跡実測図 (S=1/40)



第36図 V区下層 1号溝状遺構実測図 (S=1/90)

には弥生前期の壺形土器が押し潰れた形で出土している。

5. 溝状遺構（第36図）

調査区を斜めに縦断するもので、南西から北東側へ伸びる。下層検出時では、幅1.2m、深さ50cmを測るが、上層検出段階から判明していたものであり、幅、深さなどは大きくなるものである。断面は「V」字形を呈し、部分的には「逆台形」を成す。17mの長さで確認している。

出土土器は、弥生時代中期後半～後期後半までと幅広いが、主体は後期前半代が占めていた。

b. 出土遺物

1. 上層出土遺物（第37図）

130～140は、上層で確認した近世期の遺物である。

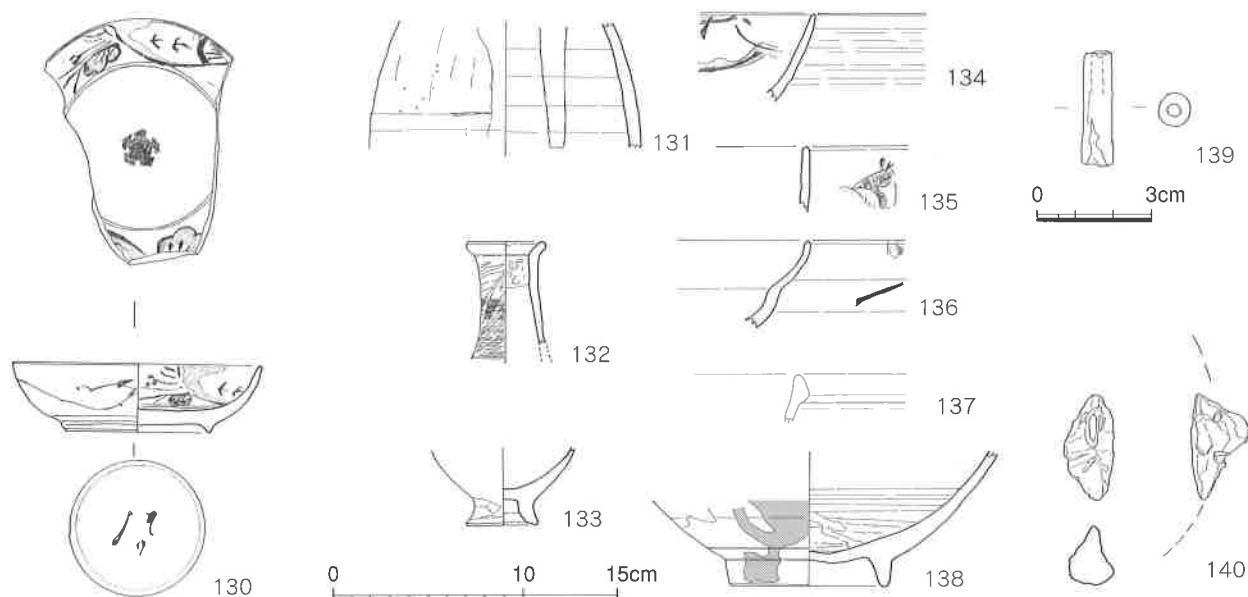
130は、表土以下直ぐで出土した染付けの皿であり、やや体部が深い。外面には枝を、内面には梅花文を描く。口縁部径13.0cm、底部径9.6cm、器高3.5cmを測る。

131は、1号溝に付随した土壙出土の瓶である。体部には面取りが施される。色調は外面灰色、内面明黄色を呈し、表面には白色の釉が垂れる。

132は、上層ピットー8出土の瓶頸部片であり、胴部は欠損する。胎土には微砂粒を含み、色調は小豆色、白色の釉をかける。

133は、上層検出面で出土した酒杯形の土器であり、やや高めの高台が付く。胎土には砂粒を含み、色調は暗黄色、焼成は良好である。高台部径3.8cmを測る。

134は、1号溝に付随した土壙出土の染付け碗である。素地は白色で、内面に発色の強い青色で、絵文が描かれている。



第37図 V区上層遺構遺物実測図 (S=1/4・1/2)

135は、近世溝4より出土した染付けの湯飲み椀である。素地は白色で、外面に発色の強い青色で、絵文が描かれている。

136は、2号溝状遺構出土の鉢である。口縁部は2段となり、口縁端部は丸く収める。外面は薄緑色に発色しており、内面は黒茶色を呈する。また、外面には鉄砂をかける。

137は、近世溝2より出土した玉縁口縁の白磁であり、混入品であろう。玉縁部分は比較的しっかりとしており、13世紀代のものであろう。

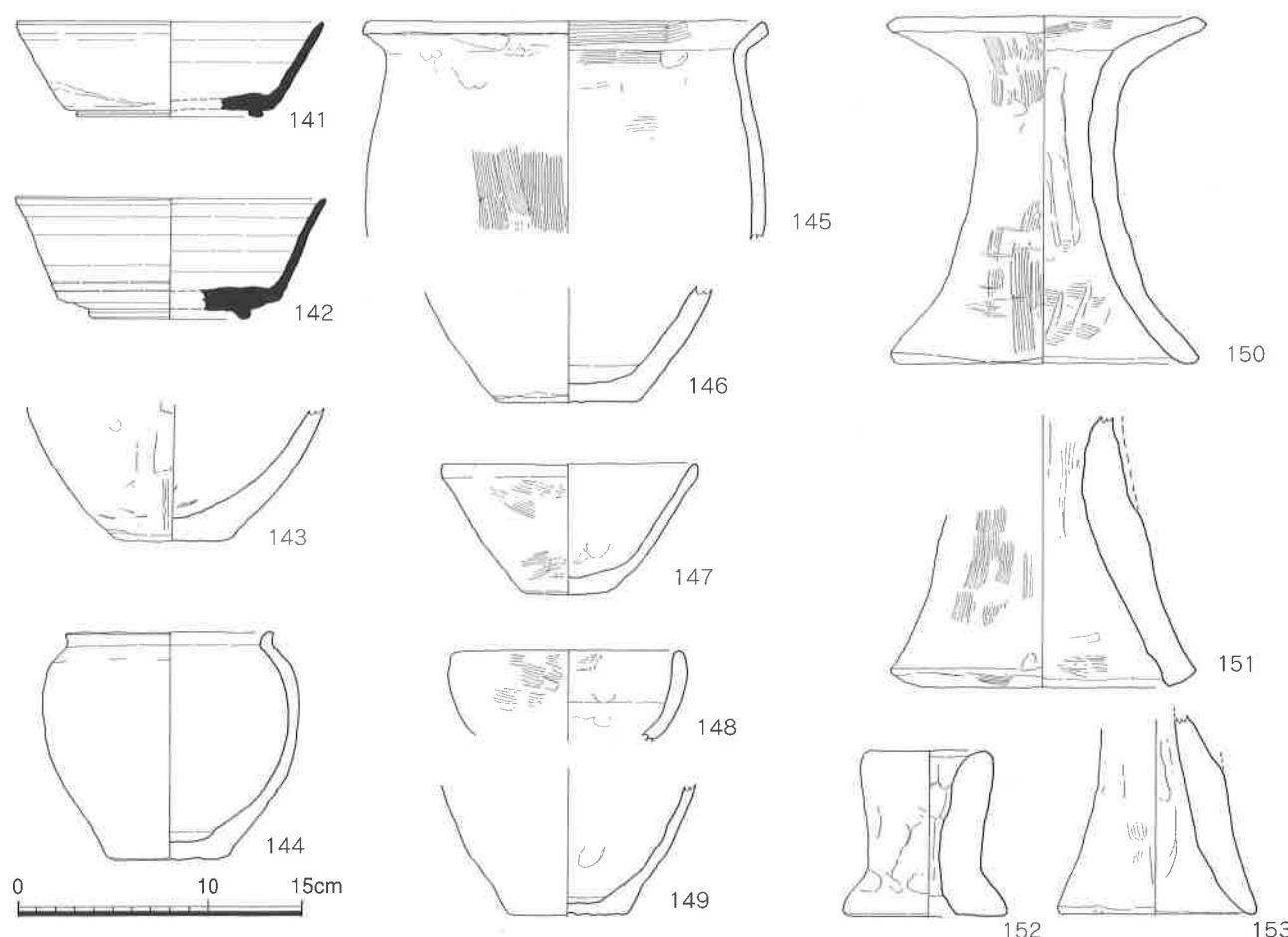
138は、遺構検出面出土の高台付の陶器であり、中型の椀若しくは鉢形を呈するものであろう。胎土には微砂粒を含み、色調は外面が小豆色を呈して、黒色の釉がかかり、内面は山吹色を呈し、白色の釉がかかる。高台部径8.0cm。

139は、近世溝3出土の銅管である。外面の一部に亀裂が生じ、全体的にも緑錆がひどい。全長3.0cm、幅0.8cmを測り、0.2cmの孔が通る。

140は、検出面出土の石製品である。滑石製石鍋の転用品であり、握手部分を当て具に転用したものである。

2. 上層検出面出土遺物（第38図）

141～153は、上層における遺構検出時に出土した遺物である。



第38図 V区上層検出面遺物実測図 (S=1/4)

141は、須恵器杯であり、接地部が平坦を成す低い高台を付ける。内外面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好である。復元により、口縁部径16.0cm、高台部径10.0cm、器高5.0cmを測る。

142は、体部が深い須恵器杯であり、高台は内側で接地する。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好である。復元により、口縁部径16.4cm、高台部径8.6cm、器高6.4cmを測る。

143は、1号溝状遺構上で出土した甕形土器の底部である。底部は平底を成し、胴部は丸みをもつ。内外面ハケ後ナデ調整。色調は明茶褐色を呈し、底部径6.4cmを測る。

144は、検出時出土の小型短頸壺である。胴部は丸みを持ち、短い口縁部が付く。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、色調は外面暗茶褐色、内面は黒色を呈す。口縁部径11.0cm、底部径8.6cm、器高12.0cmを測る。

145は、検出時出土の甕形土器である。胴部の張りはなく、頸部のしまりも緩い。内外面、ハケ目が残り、色調は淡黄褐色。口縁部径21.0cmを測る。

146は、甕形土器の底部片である。色調は暗黄色。底部径8.0cmを測る。

147は、鉢形土器である。底部はレンズ状を成し、体部は直線的に開く。また、体部最上位において稜を持ち、直立して口縁部へ至る。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。色調は明茶褐色。口縁部径13.4cm、底部径5.0cm、器高6.9cmを測る。

148は、椀形土器である。体部は丸みを持ち、口縁端部は丸くおさめる。外面ハケ調整、内面はナデ調整を施す。胎土には微砂粒を若干含み、色調は外面茶褐色～黒色、内面黒色を呈す。口縁部径12.4cmを測る。

149は底部片。やや上げ底となる。内外面ナデ調整を施す。色調は黄白色を呈す。底部径6.4cmを測る。

150は、1号溝状遺構検出時に出土した器台である。調整は、タタキ→ハケ→ナデ調整となり、下半にタタキ痕が顕著に観察できる。また、内面には、しばり痕が観察できる。胎土に砂粒を含み、受け部径16.8cm、接地部径16.6cm、器高18.6cmを測る。

151は、やや肉厚な器台の胴下半部である。外面には細かいハケメが残る。色調は暗茶褐色。接地部径16.1cmを測る。

152は、小型の器台である。接地部は平坦を成し、全体的に肉厚となる。また、体部は直線的に立ち上がり口縁部へ至る。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色。受け部径6.9cm、接地部径8.6cm、器高8.7cmを測る。

153は、器台胴下半部である。接地部はやや狭く、内傾気味に立ち上がる。色調は明黄褐色。接地部径10.4cmを測る。

3. 上層トレンチ出土遺物（第39図）

154～163は、プランが明確にならなかつたために設定した、1号溝状遺構のトレンチより出土した遺物である。

154は、頸部のしまりがない甕形土器である。底部は平底となり、張りのない胴部となる。外面は粗いハケ調整後ナデ調整、内面はナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は暗黄白色を呈す。

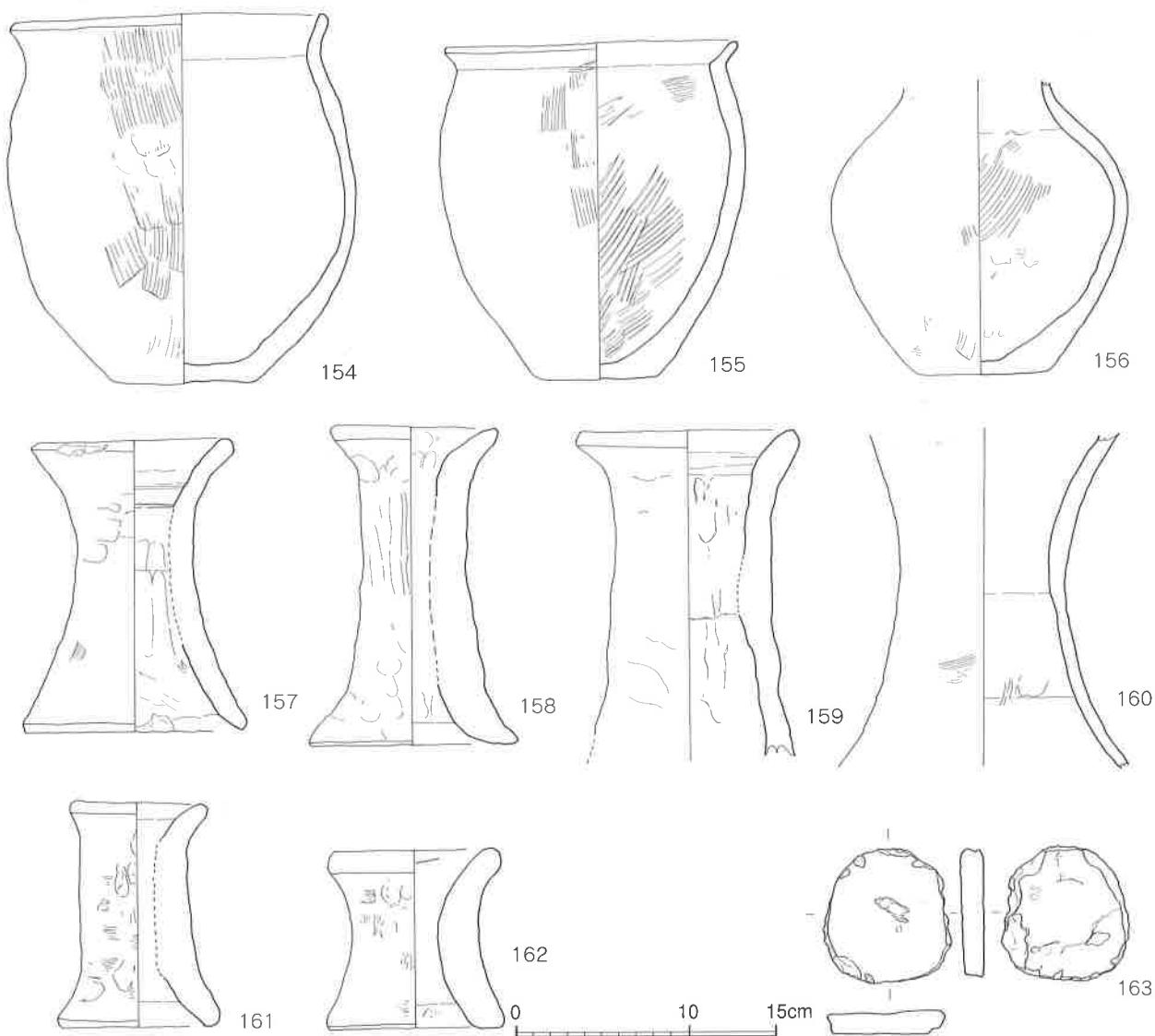
口縁部径17.8cm、底部径8.4cm、器高21.4cmを測る。

155は、「く」の字状の口縁を呈する壺形土器である。底部は平底を成し、丸みをもつ胴部へと至る。外面粗いハケ調整後ナデ、内面粗いハケ調整を施す。色調は黄白色を呈す。口縁部径16.8cm、底部径7.4cm、器高19.5cmを測る。

156は、壺形土器であり、頸部以上を欠損する。底部は平底となり、球形の胴部へと至る。肩部からは急に窄まるものであり、袋状の口縁となるものであろう。外面丁寧なナデ調整、内面は粗いハケ調整後ナデ調整を施す。頸部内面に粘土の継ぎ目が顯著に観察できる。胎土には微砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈する。底部径7.4cm、器高16.6cmを測る。

157は、器台である。受け部と接地部の径には差がなく、中位もカーブしている。内外面ナデ調整であり、内面にはおさえの痕跡が残る。胎土には砂粒を多く含み、色調は茶褐色を呈す。受け部径11.6cm、接地部径12.6cm、器高16.9cmを測る。

158は、中位が柱状となる器台である。上部で締まり、小さめの受け部となる。内外面ナデ調整で



第39図 V区上層トレンチ遺物実測図 (S=1/4)

あり、外面には指頭圧痕が残る。色調は黄白色を呈する。受け部径9.6cm、接地部径12.0cm、器高18.3cmを測る。

159も同様のタイプであるが、やや大ぶりとなる。内外面ナデ調整であり、外面には指頭圧痕が残る。色調は赤褐色を呈する。受け部径12.4cmを測る。

160は、破片資料であり、器形は154に近いものとなろう。比較的大型であるが、器壁は薄い。内外面ナデ調整。胎土に砂粒を多く含み、色調は黄白色を呈す。

161は、小型の器台である。受け部と接地部の径には差がなく、中位が柱状となる。外面細かいハケ調整後ナデ、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を僅かに含み、焼成は良好。淡黄褐色を呈す。受け部径7.6cm、接地部径9.0cm、器高13.1cmを測る。

162は、小型品で低いタイプの器台である。器壁は肉厚となる。外面細かいハケ調整後ナデ、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は淡茶褐色を呈す。受け部径9.2cm、接地部径10.0cm、器高10.3cmを測る。

163は、円盤状を呈する石製品である。端部の加工は雑であり、表裏とも磨く。7.8cm×6.8cmをなし、1.3cm程の厚さがある。滑石製。

4. 東壁出土遺物（第40図・第41図）

164～183は、段丘部において、土層観察用の精査を行った時に出土した遺物である。

164は、甕形土器であり、底部は欠損する。胴部は卵形を成し、強く締まった頸部に小さめ口縁部が付く。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶色を呈す。口縁部径23.6cmを測る。

165は、「板付I式」の甕形土器であり、胴中位下半を欠損する。胴部は「如意状」を呈するが、頸部には明瞭に稜線が入る。口縁端部下端にはヘラ状工具による刻み目を施す。外面、擦過調整。胎土には砂粒を含み、色調は暗茶色を呈す。口縁部径22.0cmを測る。

166は、頸部のしまりのない甕形土器である。胴部は直線的で、器壁は薄い。内外面ハケ調整後ナデ。暗黄白色を呈す。口縁部径26.6cmを測る。

167は、頸部に三角凸帯を持つ甕形土器であり、胴部下半を欠損する。外面ハケ調整、内面ナデ調整である。色調は明黄褐色で、内外面丹塗りの痕跡がある。口縁部径22.8cm。

168は、胴部が球形となる甕形土器である。外面ハケ調整後ナデ、内面ナデ調整を施す。色調は淡黄褐色。口縁部径17.4cmを測る。

169は、甕形土器の胴部下半である。底部は平底であり、やや丸みを持って立ち上がる。外面ハケ調整、内面ナデ調整であり、内面下部に工具の痕跡が顕著に残る。胎土には微砂粒を多く含み、色調は淡茶褐色、焼成は良好である。底部径7.6cmを測る。

170は、小型の壺形土器であり、外面は丹塗りである。平底を有し、胴部は球形を呈す。外面はミガキ調整、内面ナデ調整を施す。また、肩部内面には、粘土の継ぎ目が顕著に観察できる。胎土には微砂粒を僅かに含み、色調は淡黄白色（外面丹塗り）、焼成は良好である。底部径6.0cmを測る。

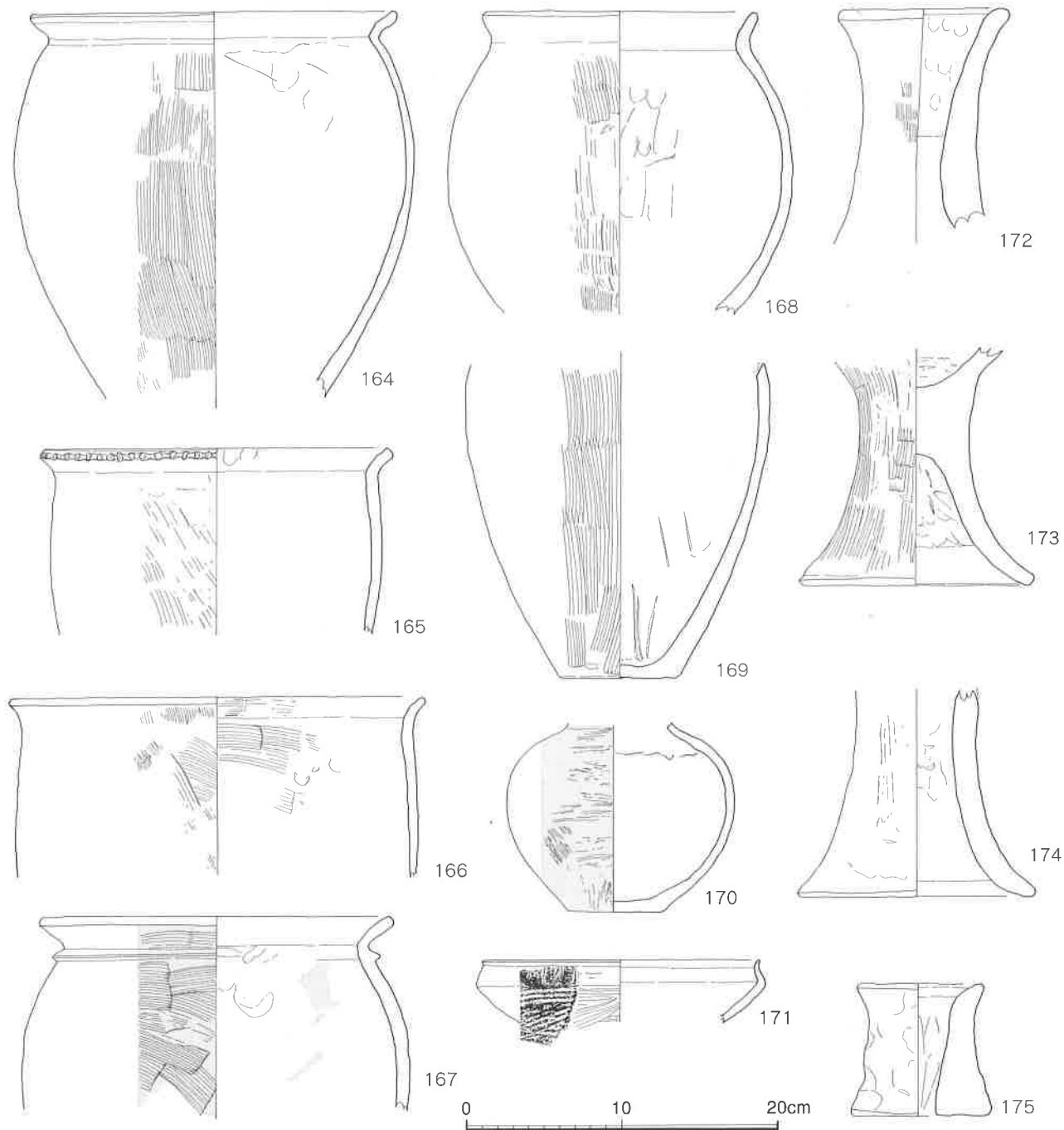
171は、縄文晚期の浅鉢である。破片資料であり、口縁部径には確証はない。胴上位より内気味に立ち上がり、口縁部に至る。外面条痕、内面ナデ調整を施す。

172は、器台である。接地部を欠損するが、受け部と接地部の径に差がないタイプであろう。外面

ハケ調整後ナデ、内面ナデ調整を施す。色調は暗褐色で、受け部径11.0cmを測る。

173は、高杯状の形態をとる器台である。接地部から内傾し、上位より開く。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を若干含み、色調は黄白色、焼成は良好である。接地部径14.7cmを測る。

174は、中位が柱状となる器台であり、受け部は欠損している。外面ハケ調整後ナデ、内面ナデ調整を施す。色調は黄白色で、接地部径15.4cmを測る。



第40図 V区東壁出土遺物実測図-1 (S=1/4)

175は、小型の器台である。接地部の器壁は厚く、全体的に手捏ね状となる。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗褐色、焼成は良好である。受け部径8.0cm、接地部径8.8cm、器高8.5cmを測る。

176は、夜臼～板付Ⅰ式期に見られる土製紡錘車である。底面は反りあがり、上面は中位より柱状となる。また、孔は柱上面より貫通している。胎土には砂粒を含み、色調は赤褐色、焼成は良である。径6.2cm、器高3.1cmを測る。

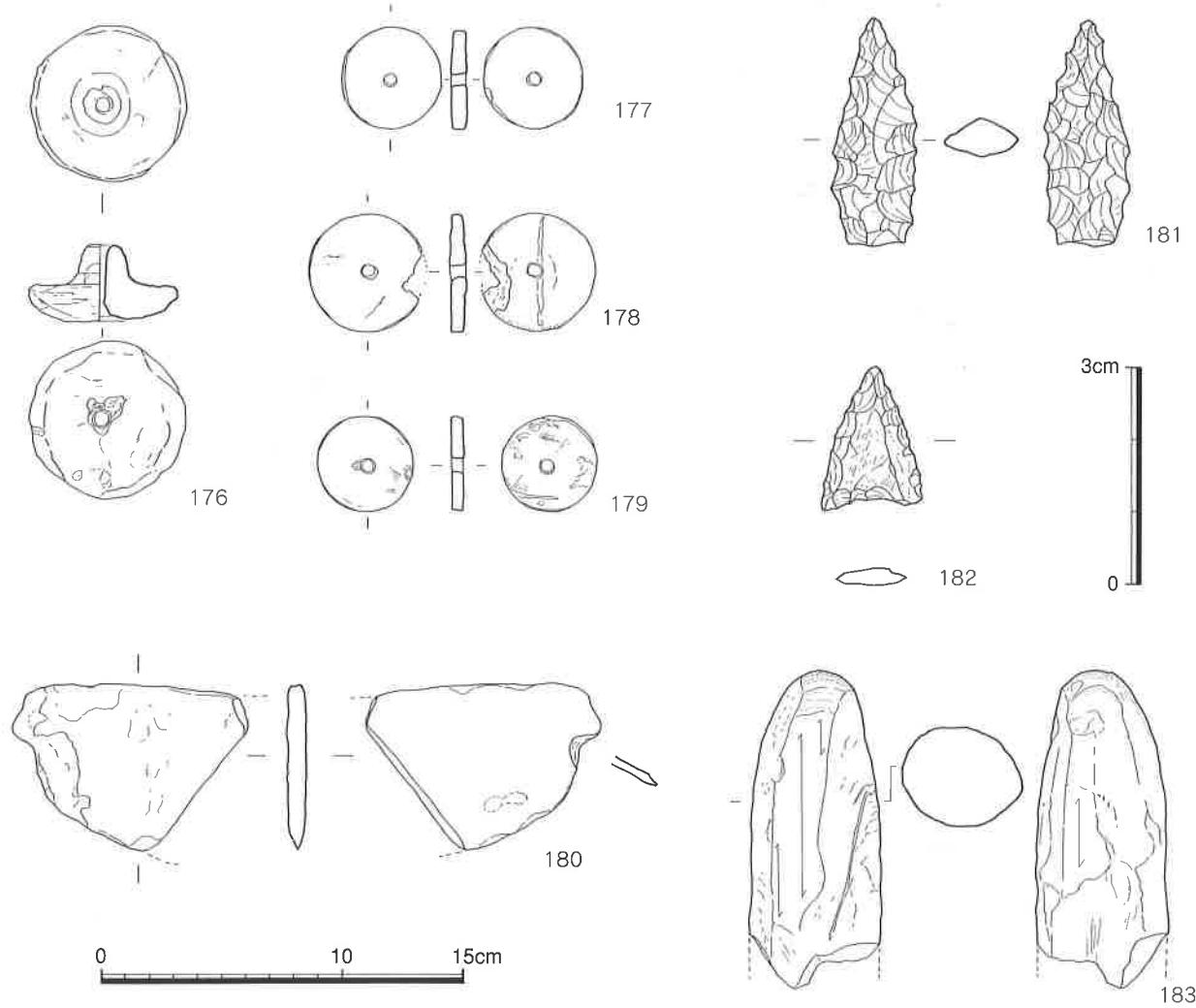
177は、石製紡錘車であり、正円形を呈す。直径4.2cm、厚さ0.5cm、孔径0.4cmを測る。

178も正円形を成す石製紡錘車であり、一部欠損している。直径4.9cm、厚さ0.5cm、孔径0.5cmを測る。

179も同様の石製紡錘車であり、表裏とも丁寧に磨く。直径4.0cm、厚さ0.5cm、孔径0.4cmを測る。

180は、やや大ぶりの石庖丁片であり、1／3程が欠損している。形態は三角形状であり、穿孔はなく、抉入が入る。安山岩製。

181は、打製石鎌であり、表裏とも丁寧に加工する。全長3.2cm、幅1.1cm、厚さ0.5cmを測る。黒曜石製。



第41図 V区東壁出土遺物実測図一2 (S=1/3・1/1)

182も打製石鏃であり、僅かに凹基となる。端部のみ加工し、表面中位は打割面を残す。全長1.9cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmを測る。黒曜石製。

183は、石棒である。上下面には研磨を施す。現存長13.0cm、幅5.1cm、厚さ4.1cmを測る。硬質砂岩製。

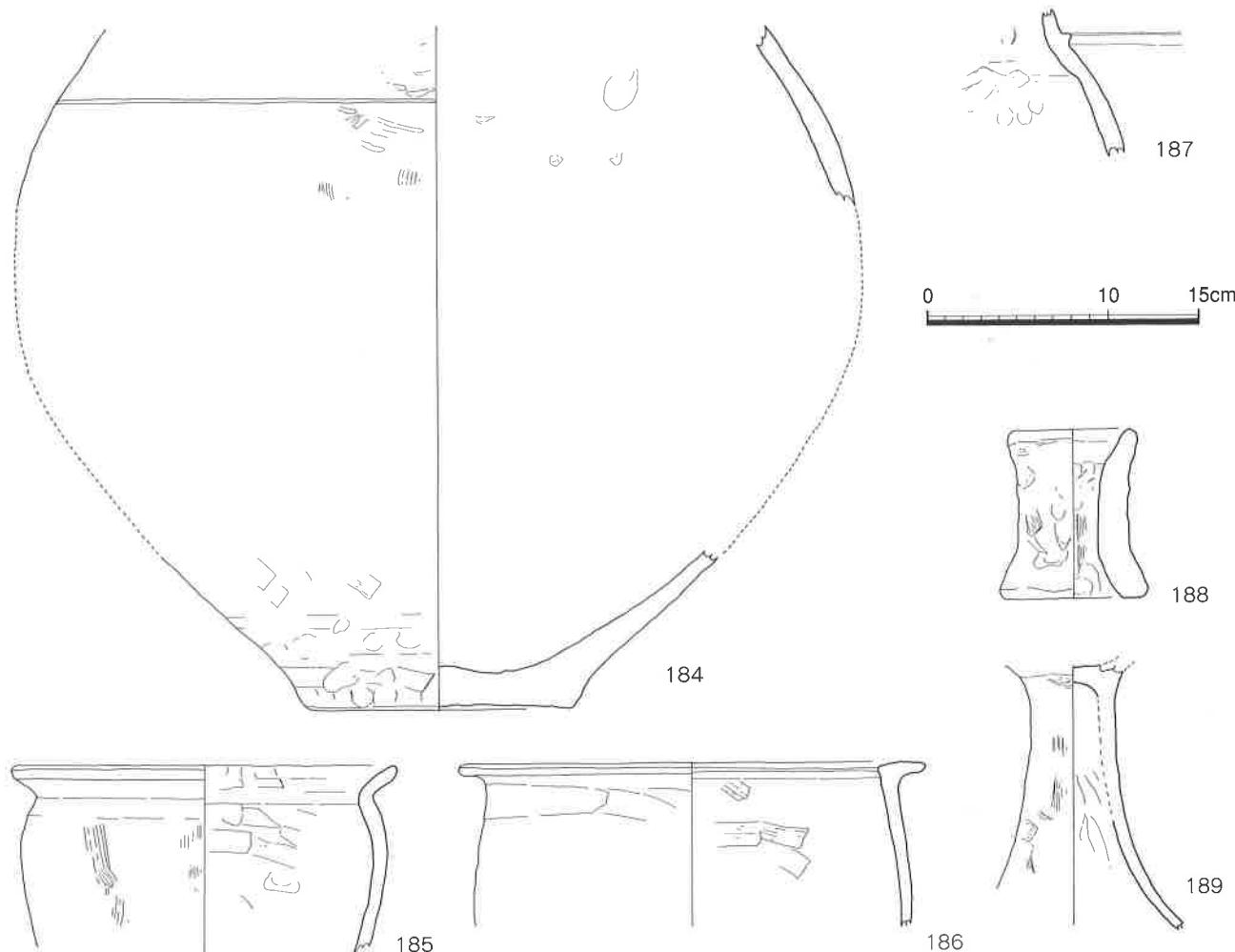
5. 下層 1号住居跡出土遺物（第42図）

184～186は、段丘部上の北側下層で検出した竪穴式住居出土の遺物である。

184は、住居跡床面に張り付いた形で出土した壺形土器である。接合面はないが、その傾きから概ね37.7cm程の高さに復元できる。底部はやや上げ底氣味となる平底を成し、肩部には沈線に入る。外面ミガキ調整、内面ナデ調整を施す。色調は黄白色。底部径14.8cmを測る。

185は、「く」の字口縁を成す壺形土器片である。外面ハケ調整後ナデ、内面ナデ調整を施す。色調は黄白色を呈す。口縁部径21.3cm。

186は、「逆L」字状の口縁を成す壺形土器片である。内外面丁寧なナデ調整を施す。明黄白色を呈し、口縁部径25.8cmを測る。



第42図 V区下層 1号住居遺物実測図 (S=1/4)

187は、肩部に三角凸帯を有する壺形土器片である。内外面ナデ調整を施す。黄褐色を呈す。

188は、器台であり、中位が柱状となる小型のタイプである。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、色調は淡褐色、焼成は良である。受け部径7.0cm、接地部径7.8cm、器高9.3cmを測る。

189は、高杯の脚柱部である。外面ハケ調整後ナデ、内面にはしづりの痕跡が残る。色調は赤褐色を呈す。

出土状況から見て、184のみが、住居に伴うものであり、他は混入品と考えられる。

6. 1号溝状遺構出土遺物（第43図～第54図）

190～271は、1号溝状遺構出土の遺物である。便宜上、形態ごとに分けて報告したい。

蓋形土器（190～195）

190は、甕形土器の蓋である。頂点部は高く平坦面を持ち、八の字に開く体部からシャープな口縁部に至る。内外面丁寧なナデ調整。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色。頂点部径6.4cm、口縁部径26.2cm、器高6.7cmを測る。

191は、頂点部を欠損するもので、体部は大きく八の字に開く。外面ナデ調整、内面ハケ調整後ナデ調整を施す。色調は明黄褐色。口縁部径28.0cmを測る。

192は、頂点部が低く、体部も丸みを持ちながら開くものである。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は黄白色を呈す。頂点部径4.6cm、口縁部径25.0cm、器高4.9cmを測る。

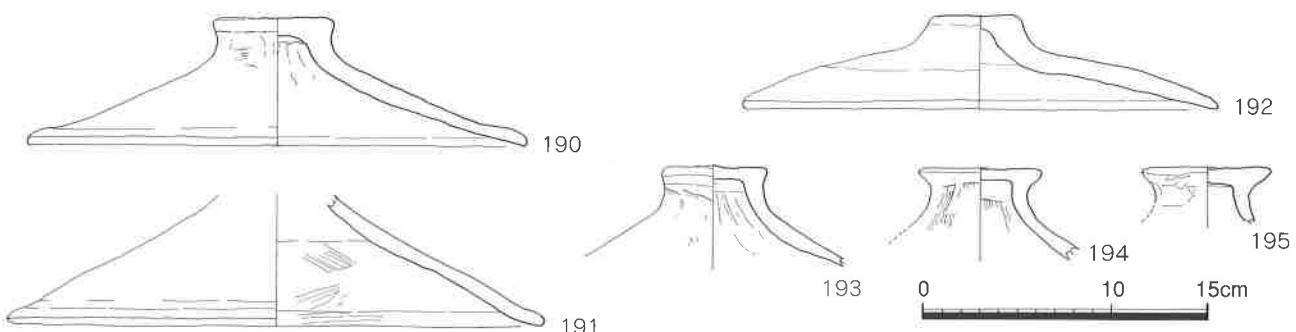
193は、頂点部のみの破片であり、調整は内外面ナデ。色調は明黄褐色を呈す。頂点部径5.4cm。

194も頂点部のみの破片であり、頂点端部は外側に開いている。内外面ハケ調整。褐色を呈し、頂点部径は6.6cmを測る。

195も同様のものであるが、やや歪となる。黄白色を呈し、頂点部径は6.7cmを測る。

甕形土器（196～236）

196は、やや垂れ気味となる「L」字口縁の甕形土器である。底部は平底であり、胴中位に最大径がくる。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は暗黄色、焼成はやや不良である。口縁部径27.0cm、底部径7.4cm、器高31.1cmを測る。



第43図 V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-1 (S=1/4)

197は、「L」字口縁の甕形土器であり、口縁部下に凸帯を持つ。口縁内側端部は摘みだされ、シャープとなる。底部は平底であり、胴上位に最大径がくる。内外面丁寧なナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は淡褐色。口縁部径25.6cm、底部径7.6cm、器高33.1cmを測る。

198も同様なタイプであり、底部がやや上げ底気味の平底となる。口縁部径27.2cm、底部径8.0cm、器高32.7cmを測る。

199は、胴中位が張り、内傾して「く」の字状口縁へ至る。底部は上げ底気味となり、胴部は全体的に歪な感じを受ける。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は暗茶色を呈す。口縁部径24.0cm、底部径9.0cm、器高34.0cmを測る。

200は、胴下半を欠損するが、196に近い。内外面ナデ調整であるが、外面にはハケメが残る。色調は暗茶色で、口縁部径25.6cmを測る。

201は、やや大ぶりで、全体的には194に近い。外面ハケ調整後ナデ、内面ナデ調整を施す。暗茶色を呈し、口縁部径33.8cmを測る。

202は、垂れ気味となる「L」字口縁の甕形土器である。底部は平底であり、胴中位に最大径がくる。また、口縁部下にややだれた凸帯を付ける。内外面丁寧なナデ調整であり、内面は黒色顔料を塗布する。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色を呈す。口縁部径26.4cm、底部径8.2cm、器高30.6cmを測る。

204は、器高が低く、鉢形土器に近い。頸部のしまりはなく、口縁端部を丸く収める。内外面ナデ調整であり、外面は丹塗りとなる。胎土には砂粒を若干含み、色調は暗茶色を呈す。口縁部径31.4cm、底部径9.2cm、器高19.0cmを測る。

205は、上部が平坦となる「L」字口縁の甕形土器である。口縁部下には、凹線状の沈線が2条巡る。外面ハケ調整、内面ナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、色調は明褐色を呈す。口縁部径25.0cmを測る。

206は、頸部のしまりの強く、「く」の字状を呈する口縁部の甕形土器である。外面ハケ調整後ナデ、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は明黄褐色を呈す。口縁部径24.4cm、を測る。

207は、破片資料であり、器形は197に近い。色調は黄褐色で、口縁部径は復元で28.5cmを測る。

203は、甕形土器の胴下半部である。平底であり、胴外面には黒斑が残る。内外面ナデ調整。胎土には微砂粒を多く含み、色調は暗黄白色を呈す。底部径7.8cmを測る。

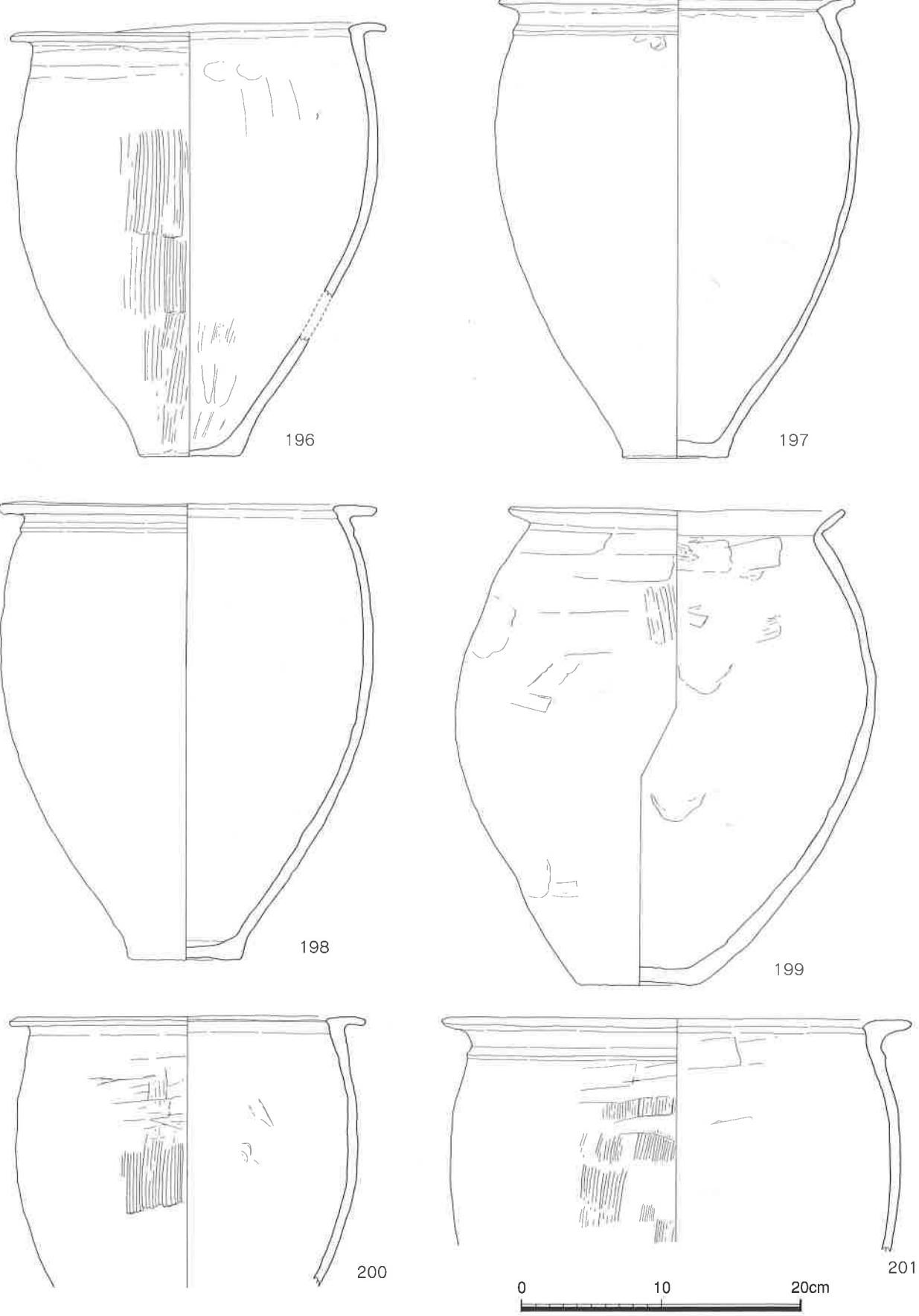
208は、垂れ気味の「L」字状口縁を有するもので、調整は内外面ナデ調整となる。胎土には砂粒を多く含み、色調は明褐色。口縁部径24.5cmを測る。

209は、胴上位より内傾するもので、外面も上位のみハケメのナデ消しを施す。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色。口縁部径25.2cmを測る。

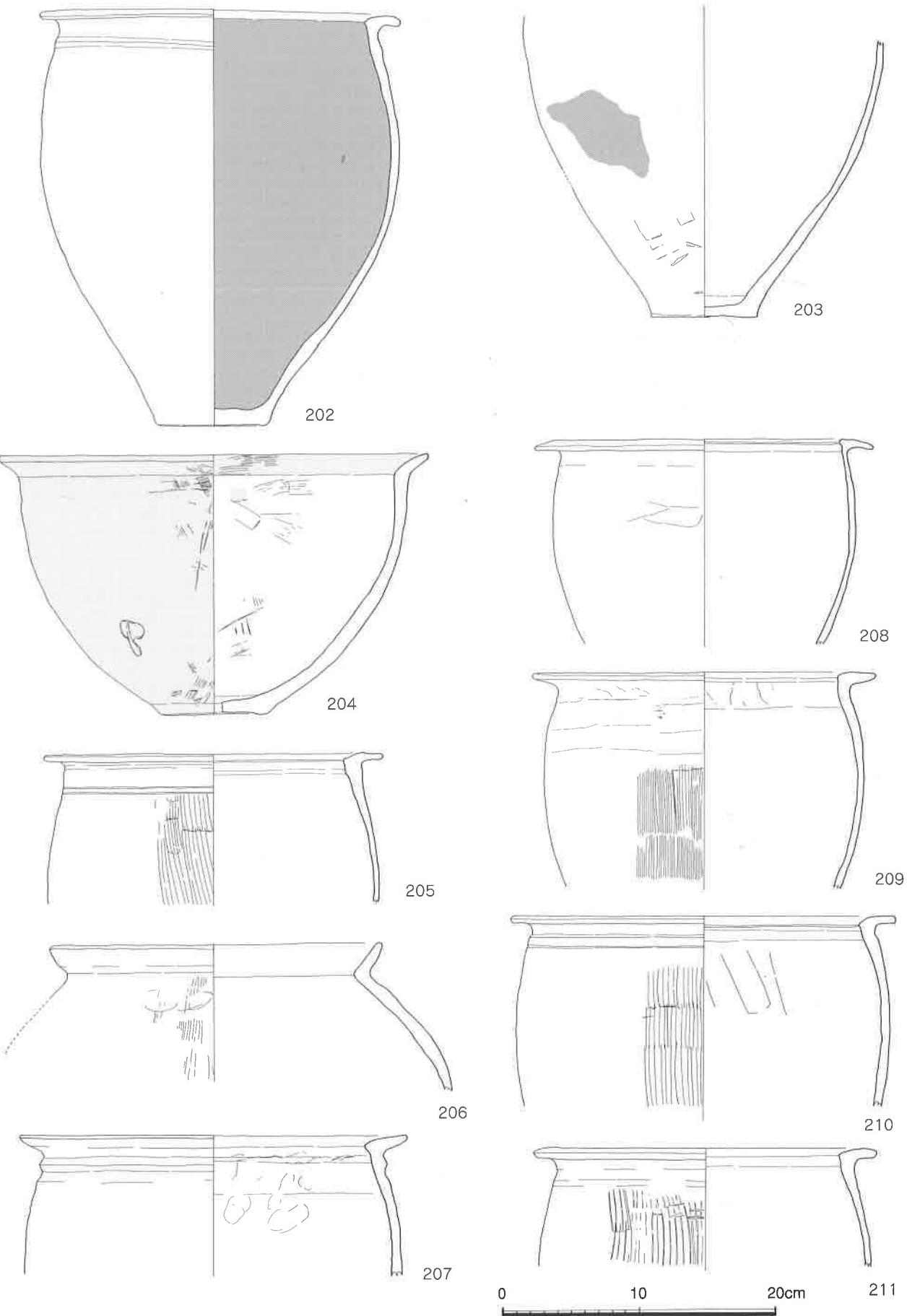
210は、口縁部下にややだれた凸帯を付ける。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を僅かに含み、色調は淡茶褐色。口縁部径28.2cmを測る。

211も口縁部下にややだれた凸帯を付ける。外面粗いハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を僅かに含み、色調は暗褐色。口縁部径25.2cmを測る。

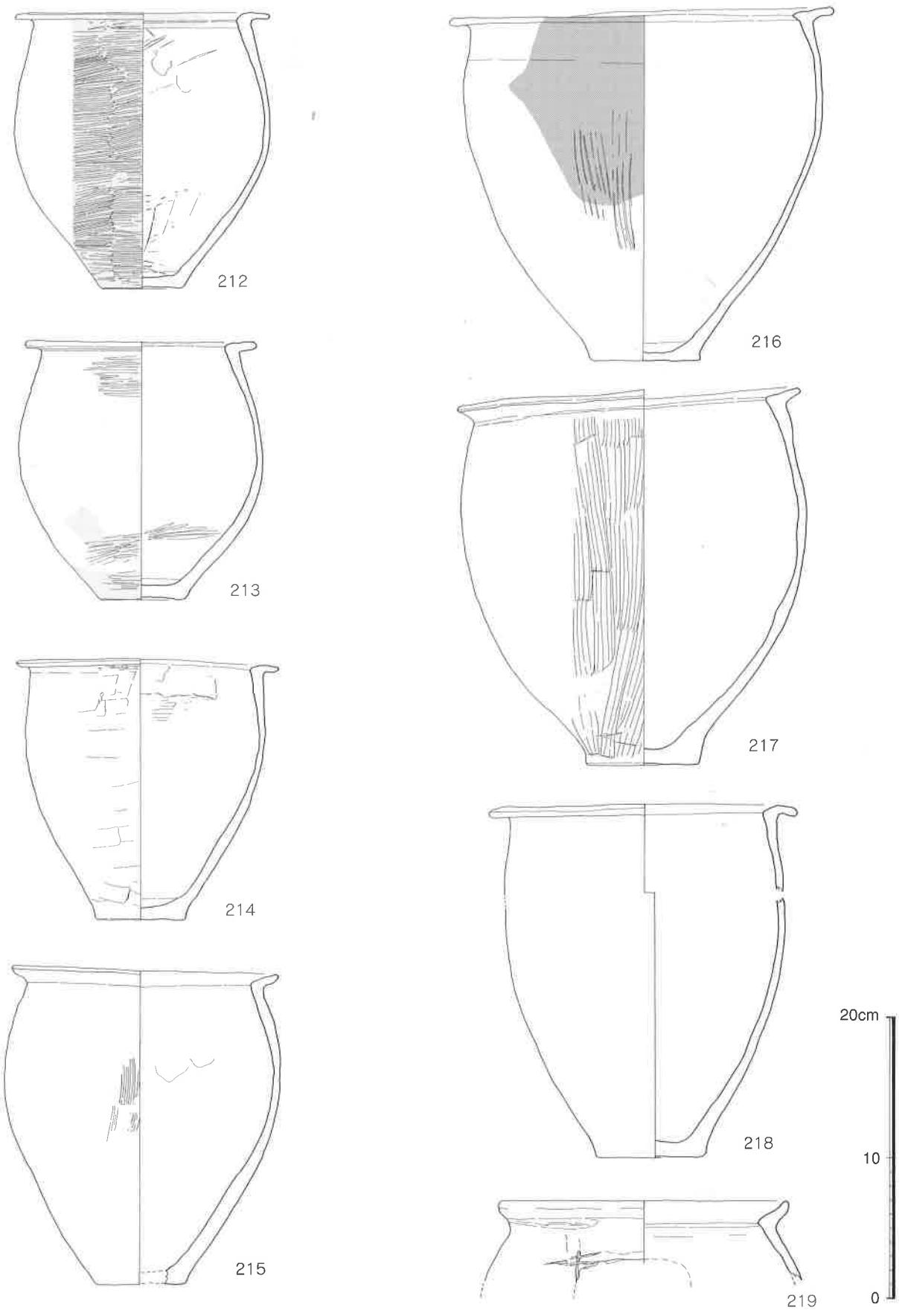
212は、丹塗り磨研の甕形土器である。底部は平底を成し、口縁部は「L」字状となる。外面横方向への細かいミガキを施し、内面は丁寧なナデ調整を施す。胎土は微砂粒を僅かに含み、色調は明



第44図 V区下層1号溝状遺構遺物実測図-2 (S=1/4)



第45図 V区下層 1号溝状遺構遺物実測図—3 (S=1/4)



第46図 V区下層1号溝状遺構遺物実測図—4 (S=1/4)

茶褐色（外面赤色顔料塗布）、焼成は良好である。口縁部径18.4cm、底部径6.0cm、器高19.7cmを測る。

213も同様なタイプのものであるが、器表の剥落が著しい。口縁部径16.6cm、底部径6.2cm、器高18.4cmを測る。

214は、小型の甕形土器である。平底から胴部に至り、「L」字口縁が付く。内外面ナデ調整を施す。胎土は砂粒を多く含み、色調は暗黄色、焼成は良である。口縁部径18.8cm、底部径6.6cm、器高18.7cmを測る。

215も同様なタイプであるが、口縁部や底部の形態から見て、やや後出するものである。外面にはハケメが残る。胎土は砂粒を多く含み、色調は黄白色、焼成はやや不良である。口縁部径19.2cm、底部径6.4cm、器高22.1cmを測る。

216は、口縁部径の割には器高が低い甕形土器である。胴上位には稜線が入り、直立して口縁部へ至る。外面にはハケメが残り、2次加熱による大きな黒斑がある。胎土は砂粒を含み、色調は淡茶褐色、焼成は良である。口縁部径27.0cm、底部径8.0cm、器高26.2cmを測る。

217は、胴部が丸みをおびたもので、外面に粗いハケ調整が施される。胎土は微砂粒を多く含み、色調は暗褐色、焼成は良好である。口縁部径24.6cm、底部径8.2cm、器高27.0cmを測る。

218は、垂れ気味の「L」字口縁を持つ甕形土器であり、やや小ぶりなタイプである。内外面ナデ調整。胎土は微砂粒を含み、色調は暗褐色、焼成は不良である。口縁部径22.0cm、底部径8.0cm、器高25.2cmを測る。

219は、「く」の字状に強く外反する口縁部を持つ甕形土器である。破片資料であり、全様は掴めないが、胴上位に窓を有するものである。内外面ナデ調整。胎土は砂粒を含み、色調は赤褐色、焼成は良好である。口縁部径20.6cmを測る。

220は、大ぶりな甕形土器である。胴部は丸みを持ち、頸部から外側へ伸びる口縁部を有す。またシャープな三角凸帯を頸部に付す。外面は細かいハケ調整後ナデ、内面は粗いハケ調整後ナデ調整を施す。色調は淡黄褐色、口縁部径34.8cmを測る。

221もやや大ぶりな甕形土器である。底部は平底であり、丸みを持つ胴部から「L」字状の口縁部へ至る。また、口縁部下には三角凸帯を付す。外面ハケ調整後、上位のみナデ消し。内面はナデ調整を施す。胎土は微砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色、焼成は良好である。口縁部径35.2cm、底部径9.2cm、器高39.0cmを測る。

222～235は、底部の破片資料である。219～221、223～229、231は、中期代のものであり、外面調整も、ハケ調整、ハケ後ナデ調整、全面ナデ調整とに分かれる。

225は、壺形若しくは鉢形土器の底部片である。底部は上げ底となり、胴中位に「M」字凸帯を付す。内外面丁寧なナデ調整を施す。色調は明黄褐色を呈し、底部径6.0cmを測る。

228は、丹塗り磨研土器の底部片である。外面横方向へのミガキを施す。底部径6.8cm。

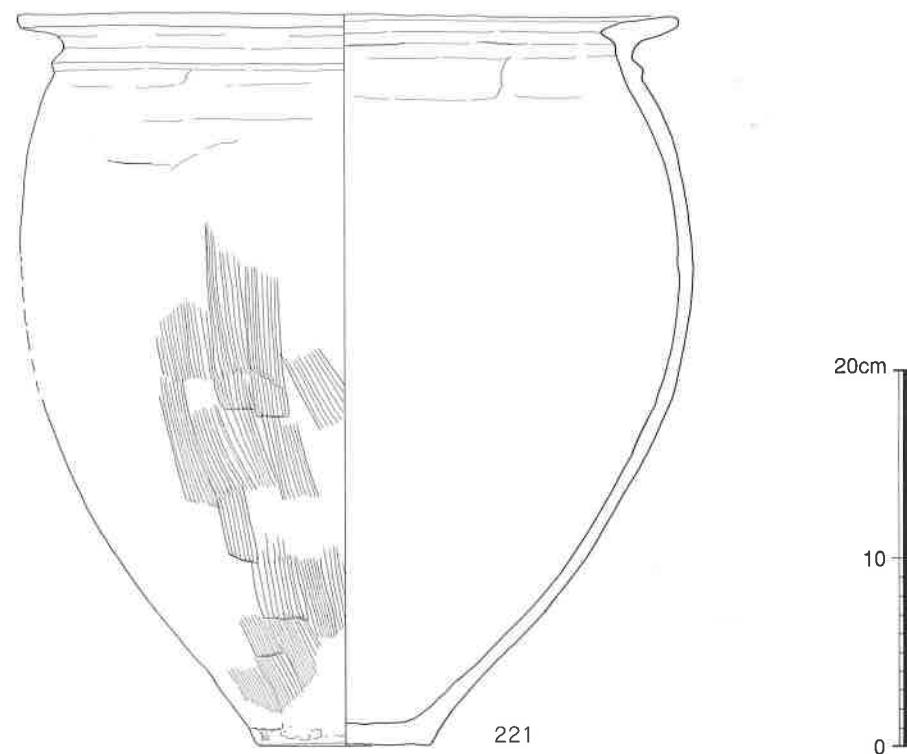
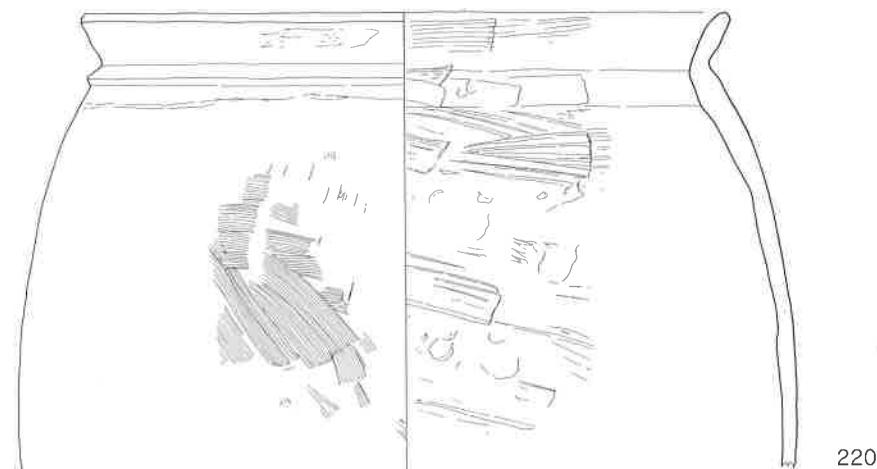
235は、底部の感じより後期後半代の所産であろう。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は暗褐色。底部径4.2cmを測る。

236は、異形の甕形土器である。底部は上げ底を成し、2cm程立ち上がって、胴部に至る。また、胴下位は丸みを持ち、1／3程から円筒状に立ち上がる。口縁部は歪で、粘土を貼り付けただけのものである。調整も雑であり、外面ハケ調整後ナデ、内面は板状工具による横方向へのナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、色調は黒茶色から明茶褐色を呈し、焼成はやや不良である。形態

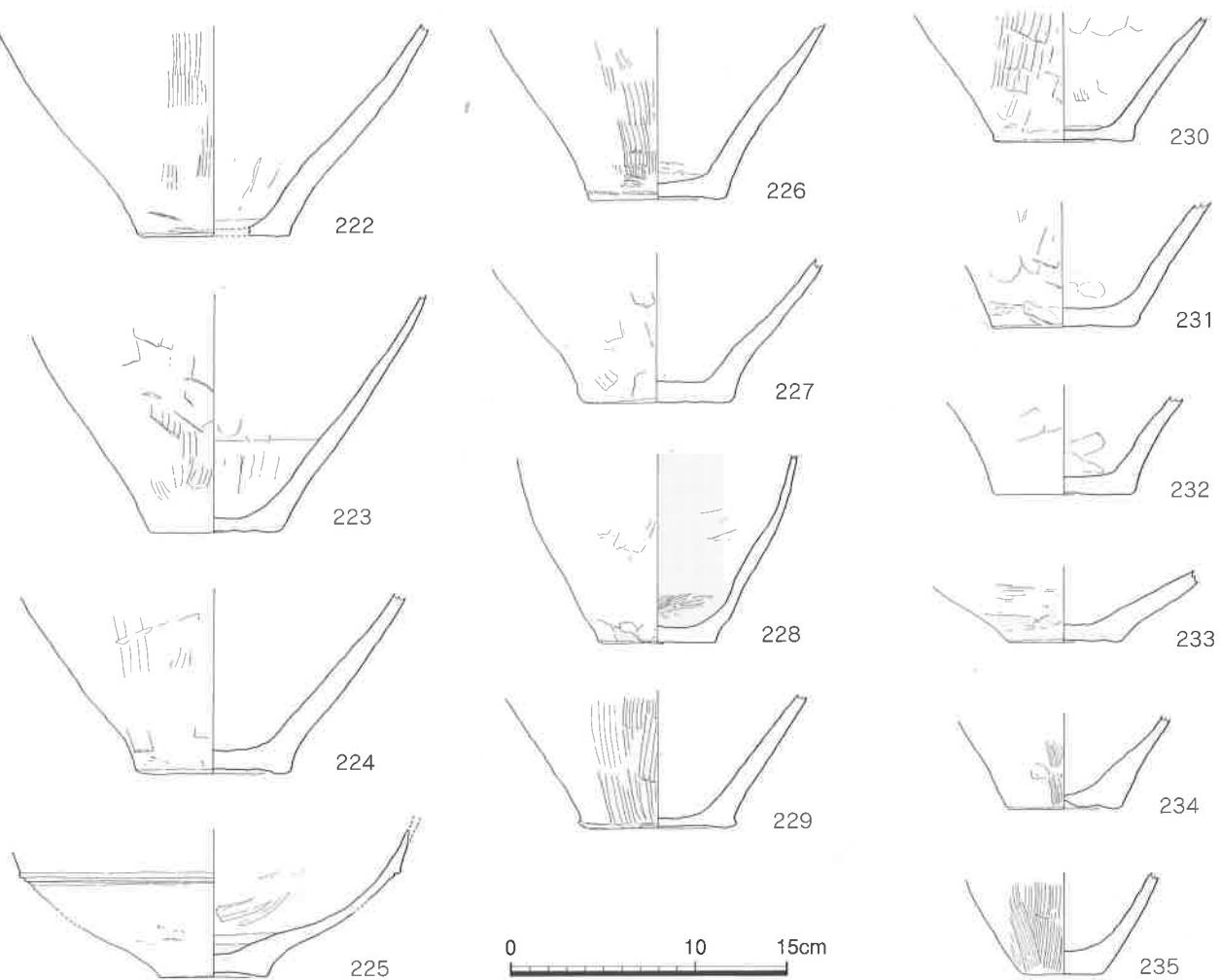
や調整方法など在地にはないものである。口縁部径20.4cm、底部径9.6cm、器高29.0cmを測る。

壺形土器（237～243、245、246）

237は、頸部と胴中位に三角凸帯を持つ壺形土器である。底部は平底で、丸みを持つ胴部から頸部で強く外反して口縁部に至る。内外面器表の剥落が著しいが、丁寧なナデ調整を施したものであろう。外面胴下半に黒斑が見られる。胎土には砂粒を多く含み、色調は淡黄白色、焼成は不良である。口縁部径21.2cm、底部径10.8cm、器高37.2cmを測る。



第47図 V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-5 (S=1/4)

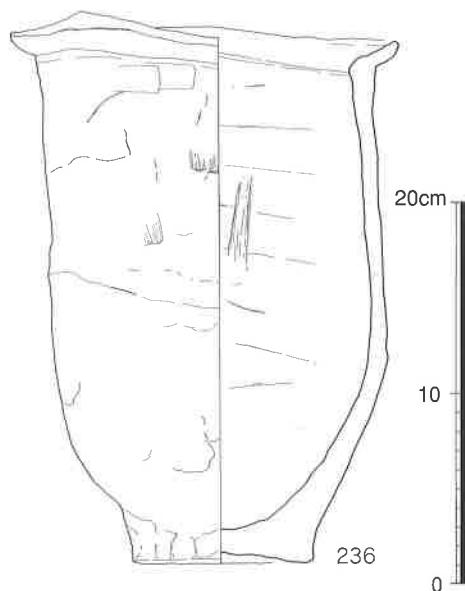


第48図 V区下層 1号溝状遺構遺物実測図-6 ($S=1/4$)

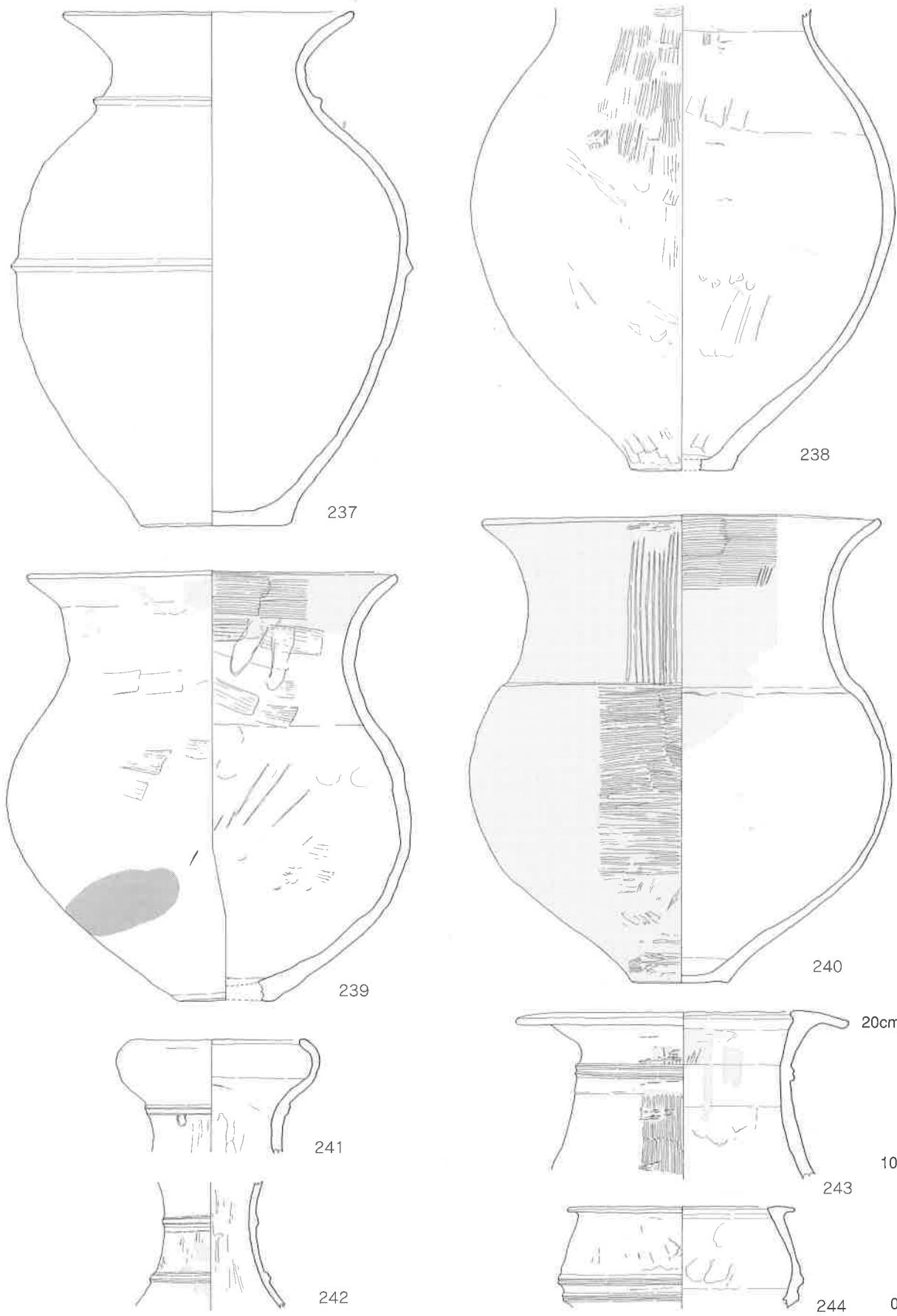
238は、頸部以上を欠損するが、口縁部は広口となる壺形土器であろう。底部は小さく、平底を成す。外面ハケ調整後ナデ、内面はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、色調は明茶褐色を呈す。底部径7.6cm、現存で器高33.4cmを測る。

239は、広口の壺形土器である。底部は平底であるが、安定感はなく、球形の胴部上位より外反して口縁部へと至る。外面板ナデ後ナデ調整、内面口縁付近はハケ調整を施す。また、胴部内側には工具痕や爪の圧痕が顕著に観察できる。頸部以上の内外面に丹塗りの痕跡も残る。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色（丹塗り）、焼成は良好である。口縁部径26.8cm、底部径7.2cm、器高31.2cmを測る。

240は、丹塗り磨研の広口壺である。底部は平底で



第49図 V区下層 1号溝状遺構
遺物実測図-7 ($S=1/4$)



第50図 V区下層1号溝状遺構遺物実測図-8 (S=1/4)

あり、球形状の胴部へと至る。また、胴上部と頸部の境には明瞭な段を有し、広口の口縁へと続く。胴部外面は横方向へのミガキ調整であり、頸部以上には縦方向へ暗文状のミガキを入れる。内面は丁寧なナデ調整となる。胎土には砂粒を含まない精良な粘土を使用し、色調は淡黄褐色（内外面丹塗り）、焼成は良好である。口縁部径28.8cm、底部径7.0cm、器高34.9cmを測る。

241は、袋状口縁壺の口縁部片である。袋部と頸部の境には「M」字状凸帯を付す。袋部は丁寧なナデ調整、頸部は縦方向にミガキ調整を施す。外面には丹の痕跡が認められる。胎土には微砂粒を若干含み、色調は黄白色を呈す。口縁部径12.4cmを測る。

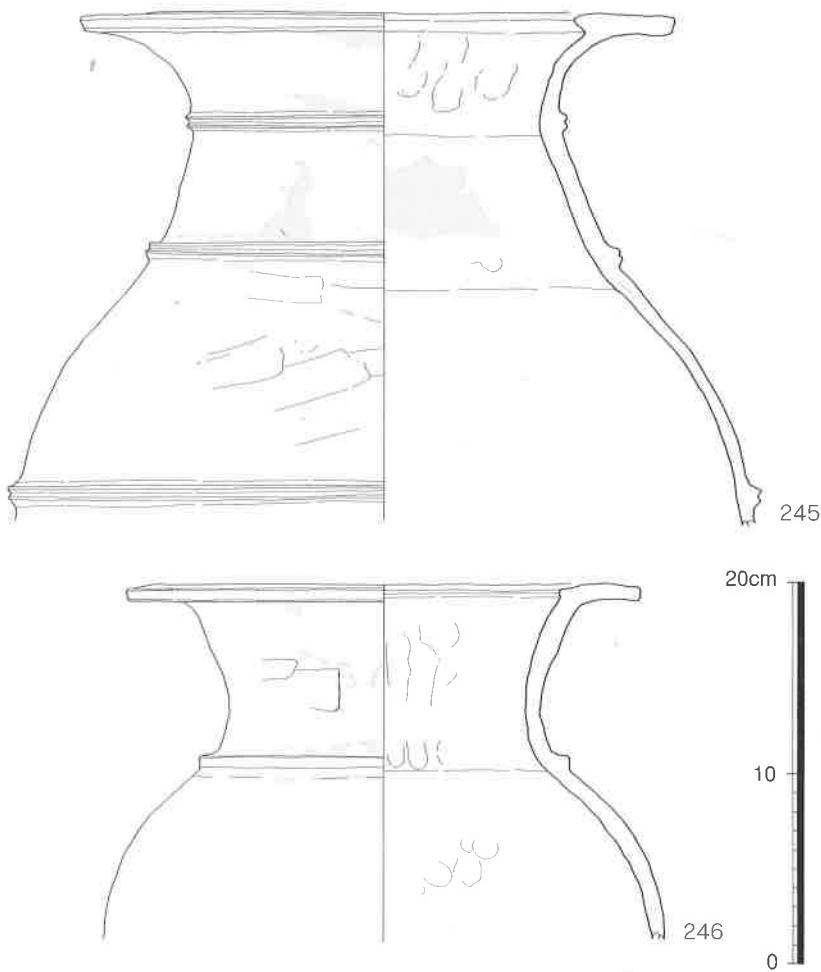
242は、袋状口縁壺の頸部片である。2条の「M」字状凸帯を付す。外面に丹塗りの痕跡が認められる。色調は黄褐色。

243は、丹塗り磨研を施す鋤先状口縁壺である。口縁部は鋤先状となり、頸部上位に「M」字凸帯を付す。口縁付近ナデ調整、頸部以下縦方向へのミガキ調整を施し、内面は丁寧なナデ調整となる。内外面丹塗り。胎土には微砂粒を僅かに含み、色調は淡黄褐色（丹塗り）、焼成は良である。口縁部径24.2cmを測る。

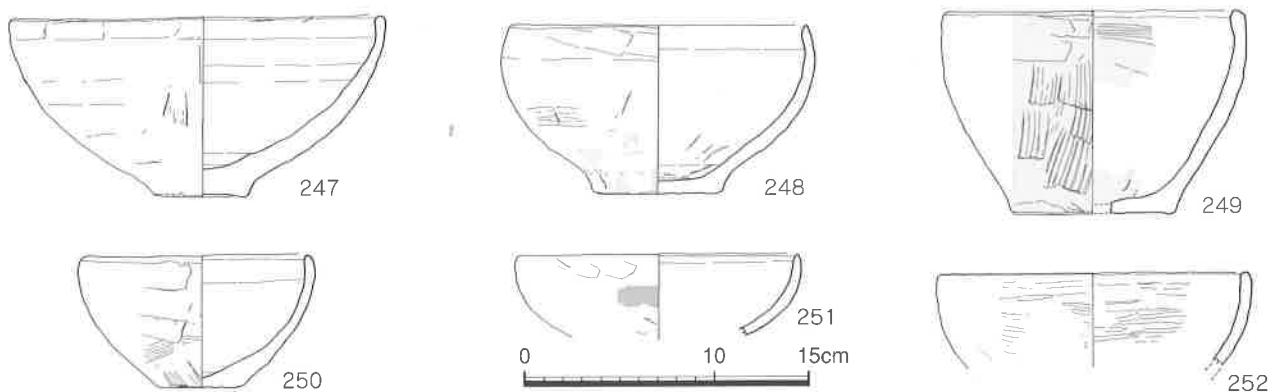
244は、台付き鉢形土器である。口縁部は「L」字状を成し、胴中位に2条の「M」字凸帯を付す。内外面ナデ調整を施す。復元で口縁部径16.4cmを測る。

245は、やや大ぶりな鋤先状口縁壺である。胴中位（最大径）と頸部上位、下位の3箇所に「M」字凸帯を付す。内外面ナデ調整を施し、丹塗りの痕跡が認められる。色調は淡黄褐色（内外面丹塗り）、焼成は良好である。口縁部径31.2cm。

246も鋤先状口縁壺であるが、口縁内端は突出しない。胴部との境に三角凸帯を付す。内外面ナ



第51図 V区下層1号溝状遺構遺物実測図—9 (S=1/4)



第52図 V区下層1号溝状遺構遺物実測図 ($S=1/4$)

デ調整を施し、外面に丹塗りの痕跡が認められる。胎土には微砂粒を含み、色調は黄白色（丹塗り）、焼成は良である。口縁部径27.0cmを測る。

鉢形土器・椀形土器（247～252）

247は、中期後半代の鉢形土器である。底部は上げ底を呈し、丸みを持つ胴部から口縁部に至る。内外面丁寧なナデ調整。胎土には微砂粒を多く含み、色調は明茶褐色、焼成は良である。口縁部径19.8cm、底部径5.0cm、器高9.5cmを測る。

248は、胴部上位から内傾するタイプであり、底部は平底を呈する。内外面ナデ調整。外面下位に丹塗りの痕跡が認められる。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色（丹塗り）を呈す。口縁部径16.2cm、底部径7.0cm、器高8.9cmを測る。

249は、安定感のある平底を有するもので、胴部も直線的となる。外面は粗いハケ調整を施し、内面はナデ調整となる。内外面丹塗りの痕跡が認められる。胎土には微砂粒を若干含み、色調は黄白色、焼成は良好である。口縁部径16.0cm、底部径8.6cm、器高10.7cmを測る。

250は、比較的小ぶりなもので、形態的には249に近い。外面ハケ調整後ナデ、内面はナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は淡褐色、焼成は良好である。口縁部径11.8cm、底部径4.4cm、器高6.9cmを測る。

251は、椀形土器である。胴部は丸みを持ち、体部は浅い。底部は欠損するが、丸底となるものであろう。内外面ナデ調整であり、外面に黒斑が残る。胎土には微砂粒を含み、色調は茶褐色を呈す。口縁部径15.0cmを測る。

252は、丹塗り磨研の鉢形土器である。胴部は丸みを持ち、内外面横方向へのミガキ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色（丹塗り）、焼成は良である。口縁部径16.4cmを測る。

高杯・器台（253～270）

253～257は、口縁部が鋤先状を呈する丹塗り磨研の高杯である。

253は、脚部が柱状を成し、体部も比較的深い。口縁部は長く、垂れ気味となり、後期初頭代に下るものと考えたい。外面は剥落が酷いが、内面は横方向へのミガキ調整となる。胎土には微砂粒を含み、色調は黄白色（丹塗り）、焼成は良好である。口縁部径29.2cmを測る。

254は、比較的体部が浅いものであり、脚部は欠損する。外面は剥落が酷く、内面は横方向へのミ

ガキ調整となる。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色（丹塗り）、焼成はやや不良である。口縁部径28.6cmを測る。

255は、口縁部上端が平坦面を成すものであり、体部は深い。外面板ナデ、内面ナデ調整を施し、丹塗りの痕跡が認められる。胎土には微砂粒を含み、色調は黄白色（丹塗り）、焼成はやや不良である。口縁部径26.6cmを測る。

256は、形態的には254に近いものの、口縁部が長く垂れ気味のものである。外面ナデ調整、内面横方向へのミガキ調整となる。胎土に砂粒を僅かに含むものの精良な粘土を使用し、色調は明褐色（丹塗り）、焼成は良好である。口縁部径27.8cmを測る。

257は、形態的には253に近い。外面板ナデ、内面横方向へのミガキを施す。胎土には微砂粒を含み、色調は明黄褐色（丹塗り）、焼成は良である。口縁部径30.0cmを測る。

258は、高杯の脚部である。外面はミガキ調整を施し、内面にはしづら痕が残る。胎土には微砂粒を若干含み、色調は明黄白色（丹塗り）、焼成は不良である。底部径18.6cm、現存で器高16.0cmを測る。

259は、脚柱部である。外面縦方向へのミガキ調整で、内面にはしづら痕が残る。外面は丹塗りで、内面にも丹の点滴が認められる。胎土には砂粒を含み、色調は明黄褐色（丹塗り）、焼成は良好である。

261は、受け部径と接地部径に差がない器台であり、中位も直線的となる。外面ハケ調整後ナデ、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は明茶褐色、焼成は良好である。受け部径9.1cm、接地部径10.8cm、器高16.5cmを測る。

262は、受け部径と接地部径に差がないものの、中位がしまったタイプである。外面ナデ調整であるが、整形は難である。また、内面にはしづら痕がある。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色、焼成は良である。受け部径10.6cm、接地部径12.6cm、器高13.8cmを測る。

263は、受け部を欠損するが、形態的には259に近い。内面下半には指頭圧痕が顕著に確認される。胎土には砂粒を含み、色調は茶褐色、焼成は良好である。接地部径10.6cmを測る。

264は、やや接地部からの立ち上がりが急なものである。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は明茶褐色、焼成は良好である。接地部径12.4cmを測る。

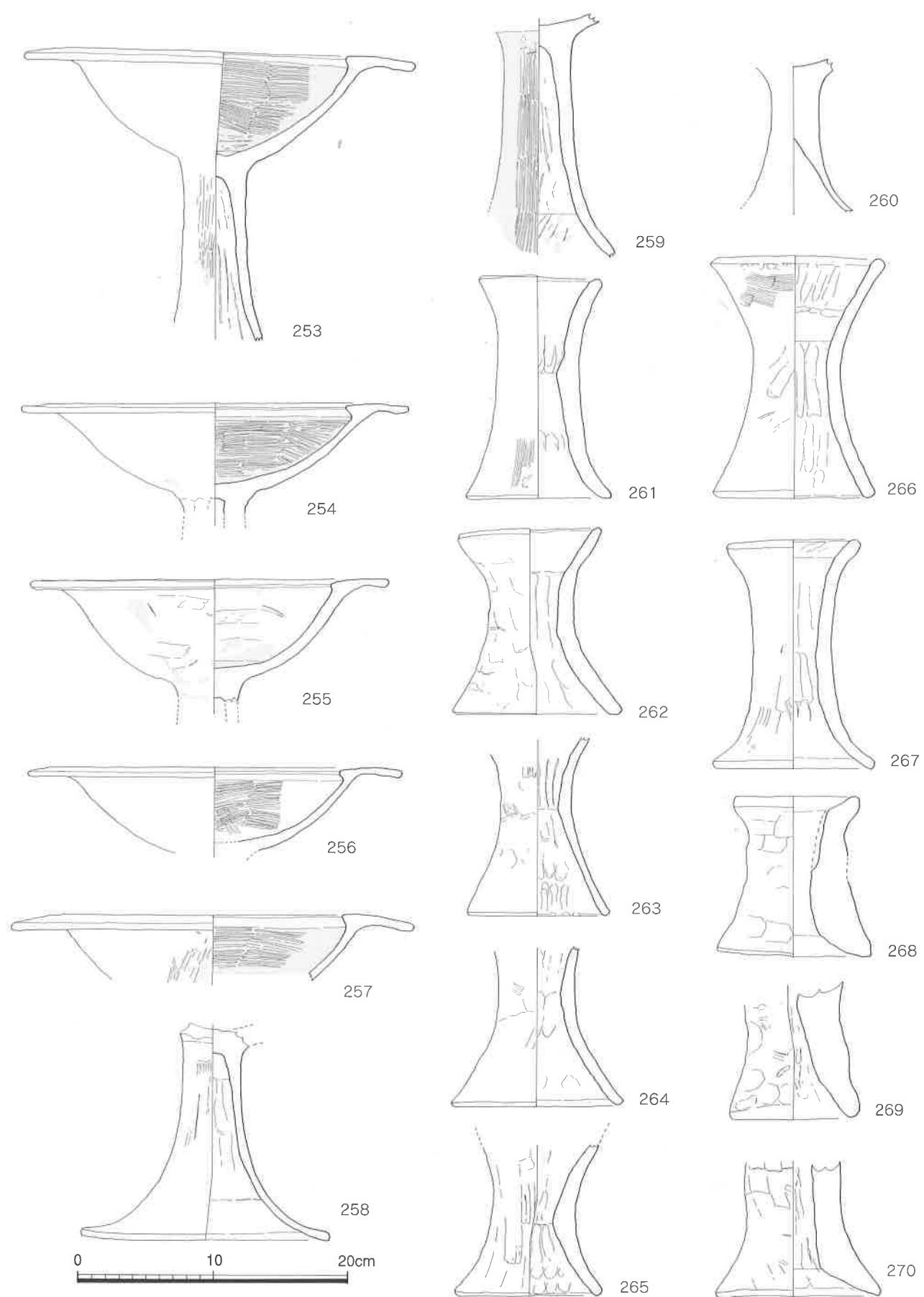
265は、中位から受け部にかけての開きが強いものである。外面ナデ調整、内面下半には指頭圧痕が顕著に確認される。胎土には砂粒を含み、色調は茶褐色、焼成は良である。接地部径11.0cmを測る。

260は、高杯の脚柱部である。内外面ナデ調整を施し、色調は淡茶褐色を呈す。

266は、受け部径と接地部径に差がないものの、中位がしまったタイプである。外面上位にはハケメが残るが、下位は強いナデ調整を施し、内面にはしづら痕が顕著に残る。胎土には微砂粒を僅かに含み、色調は暗茶色、焼成は良好である。受け部径13.2cm、接地部径12.0cm、器高17.9cmを測る。

267は、形態的には261に近い。胎土には微砂粒を多く含み、色調は明茶褐色、焼成は良好である。受け部径9.8cm、接地部径11.6cm、器高17.0cmを測る。

268は、やや小ぶりの器台である。器壁は肉厚となり、受け部内側には明瞭な稜線が入る。内外面ナデ調整を施し、全体的に手捏状となる。胎土には砂粒を含み、色調は淡茶褐色、焼成は良である。受け部径9.2cm、接地部径11.4cm、器高11.9cmを測る。



第53図 V区下層1号溝状遺構遺物実測図 ($S=1/4$)

269は、接地部から直線状に立ち上がるるもので、器壁もかなり肉厚となる。外面ナデ調整を施し、内面にはしづり痕が残る。胎土には砂粒を含み、色調は茶褐色、焼成は良である。接地部径9.6cmを測る。

270は、接地部からの立ち上がりが急なものであり、中位が直線的となる。接地部内面には明瞭な稜線が入り、器壁も肉厚である。外面ハケ調整後ナデ消し、内面にはしづり痕が残る。胎土には砂粒を多く含み、色調は明茶褐色、焼成は良好である。接地部径12.0cmを測る。

装身具（271）

271は、溝出土のガラス玉である。

7. 水走り出土遺物（第55図）

272～281は、1号溝状遺構を切る形で検出した自然流路（水走り）出土の遺物である。人為的な遺構ではなく、図化に堪えうるものは少ないものの、かなりの破片遺物が出土していたため、ここで報告したい。

272は、甕形土器片である。口縁部は「T」字を呈し、口縁部下に三角凸帯を付す。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色、焼成は良好である。復元で、口縁部径27.6cmを測る。

273は、須恵器甕口縁部片である。口縁中位に波状文を施入する。胎土には微砂粒を含み、色調は暗灰色を呈す。

274は、小型の甕形土器であり、胴下半を欠損する。頸部のしまりは緩く、口縁端部は丸く収める。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色、焼成は良好である。復元で、口縁部径14.4cmを測る。

275は、甕形土器底部片である。平底の底部から直線的な胴部へと至る。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、色調は赤褐色。底部8.0cmを測る。

276も同様なもので、外面下位に工具痕が残る。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色。底部7.8cmを測る。

277は、底部がやや上げ底となる。外面ハケ調整後ナデ、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は黄褐色。底部8.0cmを測る。

278は、須恵器台付杯片である。破片資料であり全様は不確かであるが、体部は深い。内外面横ナデを施す。胎土には微砂粒を多く含み、色調は暗灰色、焼成は良好である。

279は、やや大ぶりな壺形土器底部片である。平底であり、外面下方に擦過調整を施す。弥生前期後半代の所産であろう。胎土には砂粒を含み、色調は淡黄褐色、焼成は良である。底部13.0cmを測る。

280は、甕形土器の底部片であり、外面ハケ調整を施す。色調は黄褐色、底部径6.6cmを測る。

281は、硬質砂岩製の石斧である。打ち欠きにより整形しているが、未製品であろう。全長10.5cm、幅6.0cm、厚さ2.3cmを測る。

第54図 V区下層
1号溝状遺構出土
ガラス玉 (S=1/2)

8. 下層検出面出土遺物（第56図）

282～287は、下層遺構の検出時に出土した遺物である。また、後期代のものについては、1号溝状遺構に伴う可能性が高い。以下、説明を加えたい。

282は、弥生前期の壺形土器口縁部片である。口縁部は肥厚し、口縁下で段をつくる。内外面板状工具による擦過。胎土には微砂粒を僅かに含み、色調は明黄褐色、焼成は良好である。口縁部径44.6cmを測る。

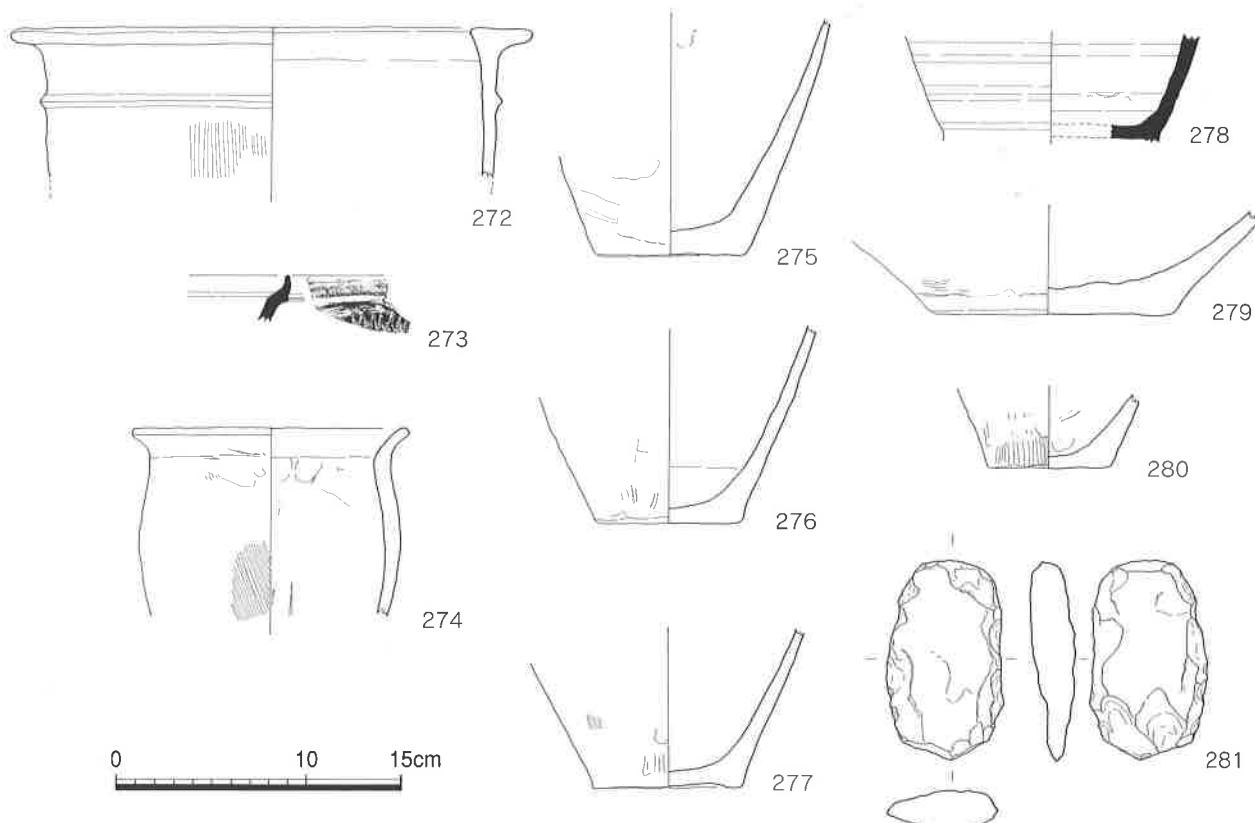
283は、弥生後期の大型広口壺である。全体的に歪を生じる。肩部から直立し、頸部上位から鋭角に外反して口縁部に至る。また、肩部には「コ」の字凸帯を付す。内外面ハケ調整を施し、頸部内面はナデ調整となる。胎土には微砂粒を含み、色調は暗黄色～灰色、焼成は良好である。口縁部径53.5cmを測る。

284は、鋤先状口縁を呈する広口壺である。口縁端部には丹塗りの痕跡が認められる。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を含み、色調は明茶褐色。口縁部径24.2cmを測る。

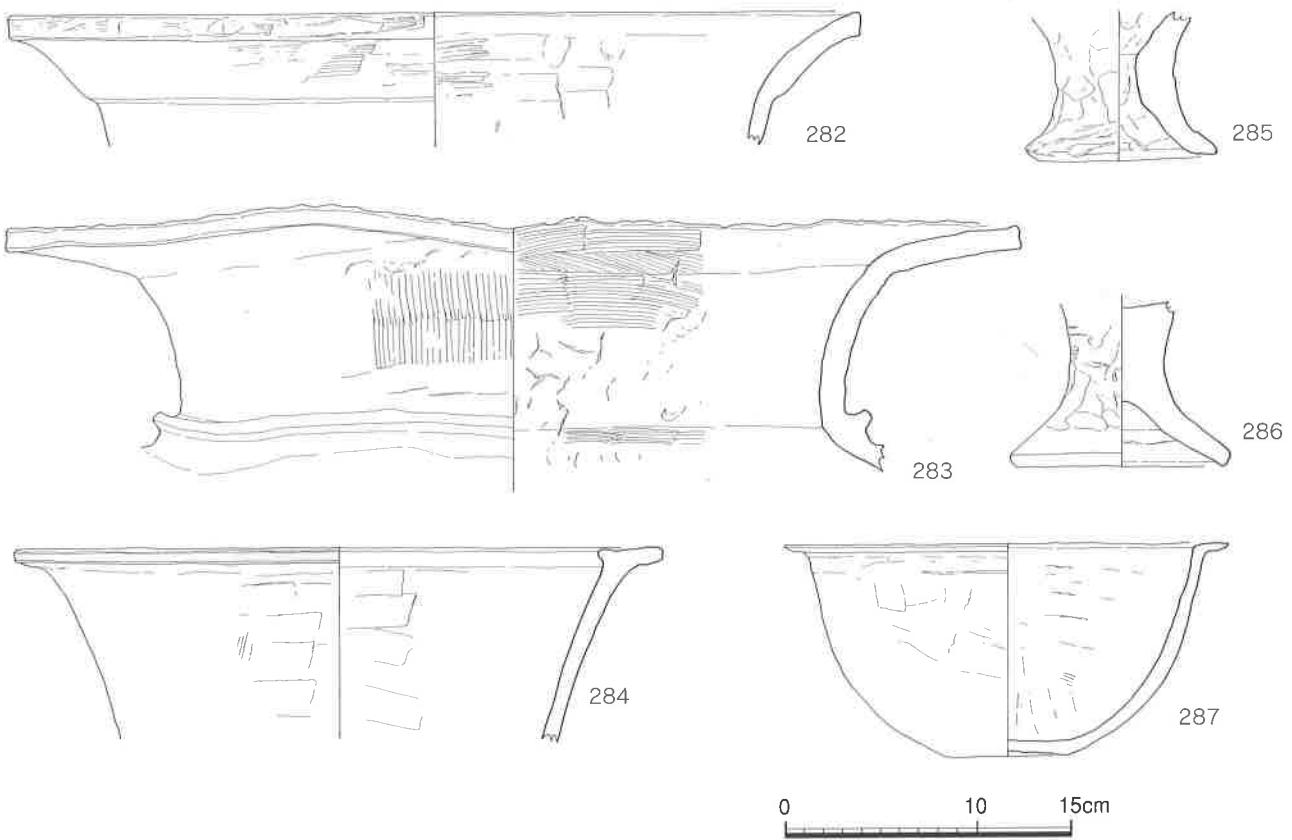
285は、手捏状の器台である。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は明黄褐色を呈す。接地部径10.0cm。

286も器台であり、中位が棒状を成す。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を僅かに含み、色調は明黄褐色を呈す。接地部径11.0cm。

287は、鉢形土器である。上げ底気味の底部から丸みを持つ胴部に至り、口縁は「L」字状となる。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を含み、色調は淡黄褐色、焼成は良好である。口縁部径23.4cm、底部



第55図 V区下層水走り遺物実測図 (S=1/4)



第56図 V区下層検出面遺物実測図 ($S=1/4$)

径6.4cm、器高11.2cmを測る。

9. 段丘下段包含層出土遺物（第57図～第62図）

288～360は、調査区東側、段丘下段より出土した遺物である。近世の開墾により、遺物の時期が混在しており、遺構についても検出されていない。ここでは、便宜上、前期の土器、後期の土器、石器とに分けて、報告したい。

弥生前期の土器（288～306）

288は、肩部に沈線を持つ甕形土器である。肩部から外反し、口縁部は折り曲げる様に付ける。また、口縁端部にはヘラ状工具による刻み目を入れる。外面ナデ調整、内面板状工具による擦過調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は暗黄色、焼成はやや不良である。口縁部径25.8cmを測る。

289は、張らない胴部から屈曲して口縁をつくり、端部には刻み目を入れる。黒茶色を呈し、口縁部径20.2cmを測る。

290は、頸部から口縁外面にかけて肥圧させ、明瞭な段をつくる。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶色を呈す。口縁部径24.4cm。

291は、肩部に沈線を持つもので、頸部上位より外反させて口縁部をつくる。また、口縁端部下段に刻み目を入れる。胴部外面には縦方向にハケ調整を施し、内面にはナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗褐色、焼成は良好である。口縁部径26.8cm。

292は、胴部から外傾して口縁部に至るもので、口縁端部に刻み目を入れる。胎土には微砂粒を多く含み、色調は黒茶色を呈す。

293は、胴部から外反して口縁部に至るもので、口縁端部下段に刻み目を入れる。胎土には砂粒を含み、色調は暗黄白色。

294は、胴部から緩やかに外反して口縁部に至るものであり、外面調整は条痕状となる。胎土には砂粒を含み、色調は黒茶色。

295は、肩部に刻み目突帯を持つもので、刻み目は棒状工具によるものである。胎土には砂粒を含み、色調は明茶褐色。

296は、頸部から口縁外面を肥圧させて、段をつけるタイプである。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色。

297は、器壁が薄く、胴部から外反して口縁部に至るもので、口縁端部下段に刻み目を入れる。胎土には砂粒を多く含み、色調は明茶褐色。

298は、胴部から丸みをもって緩やかに外反して口縁部に至るものである。胎土には微砂粒を含み、色調は黒茶色。

299は、胴部から外反して口縁部に至るもので、口縁端部下段に刻み目を入れる。胎土には微砂粒を含み、色調は暗茶褐色。

300は、器壁が薄く、胴部から外反して口縁部に至るもので、口縁端部下段に刻み目を入れる。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色。

301は、大型の壺形土器である。口縁部は肥圧し、口縁下で段をつくる。内外面ナデ調整であり、口縁外面には板状工具による擦過も施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は黄白色、焼成は良である。口縁部径44.6cmを測る。

302は、前期末の壺形土器である。肩部から頸部にかけては強く外反し、口縁上端は粘土帯を添付して肥圧させる。また、頸部と肩部には沈線を入れる。内外面ナデ調整。胎土には微砂粒を多く含み、色調は黄白色である。口縁部径20.6cm。

303は、壺形土器の胴部であり、肩部に4条の沈線を入れる。外面ミガキ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は赤褐色を呈す。

304は、肩部に有軸羽状文を入れる壺形土器である。肩部からの立ち上がりはやや鋭い。内外面ナデ調整を施し、色調は淡黄褐色を呈す。

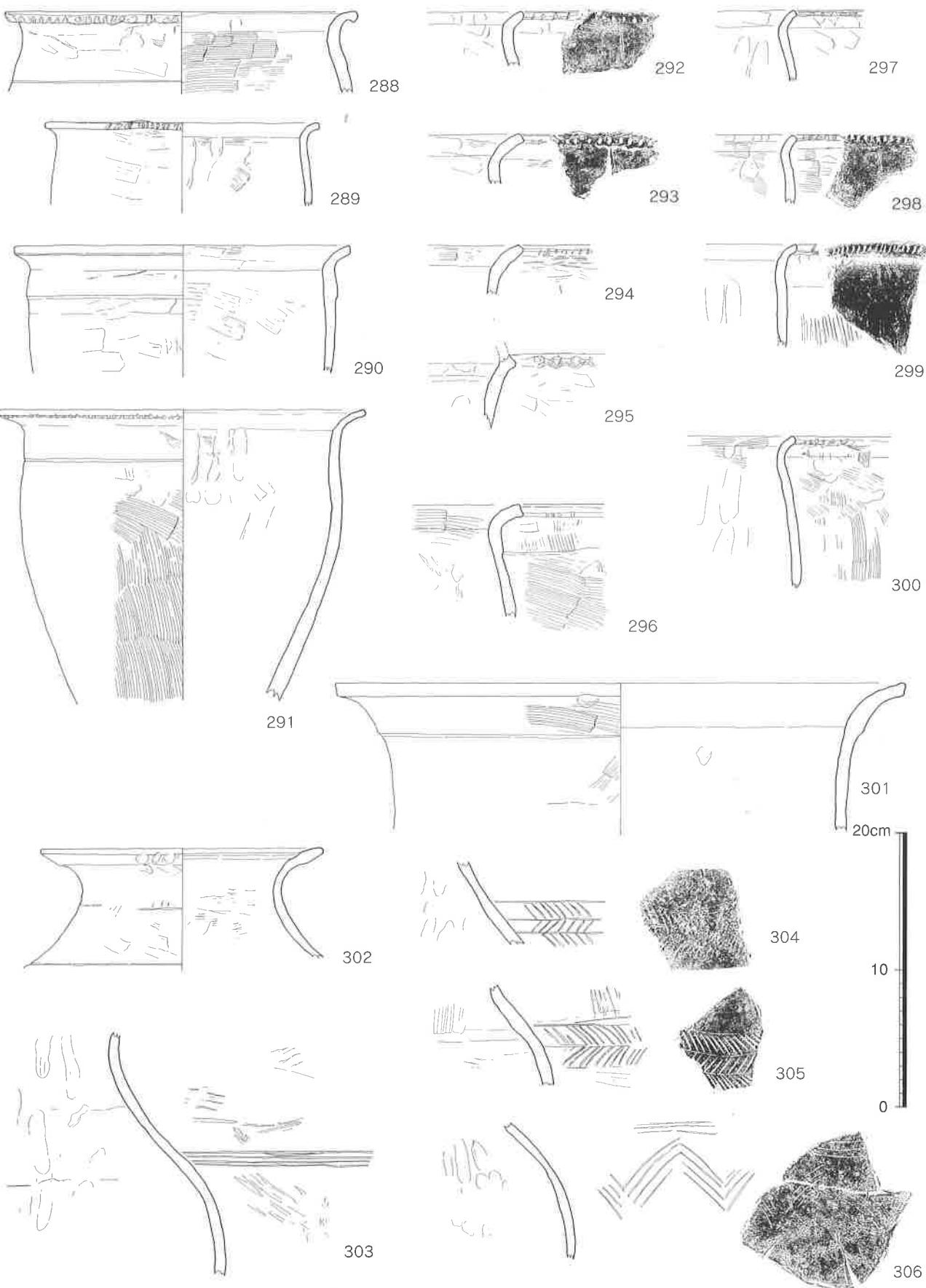
305は、肩部に貝殻による有軸羽上文を入れるものであり、立ち上がりは緩い。外面ナデ調整、内面は板状工具による擦過。黄白色を呈す。

306は、壺形土器胴部片である。上位に弧状をなす四本一組の山形文を入れる。内外面ナデ調整を施し、色調は暗茶褐色を呈す。

307は、壺形土器の底部であり、安定感のある平底を成す。外面擦過、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を僅かに含み、暗黄色を呈す。底部径11.4cm。

308も壺形土器の底部であり、やや器壁が厚い。外面ナデ（板ナデ）、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、淡黄褐色を呈す。底部径9.0cm。

309は、夜臼～板付I式の壺形土器底部である。円盤添付底であり、胴、底部の境が明瞭である。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を僅かに含み、茶褐色を呈す。底部径10.4cm。



第57図 V区下層包含層遺物実測図-1 (S=1/4)

310は、中期初頭に見られる甕形土器の底部であり、上げ底となる。内外面ナデ調整で、外面は強くナデつける。胎土には微砂粒を含み、明茶褐色を呈す。底部径6.6cm。

311も同類であり、底部からの立ち上がりは緩い。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を含み、赤褐色を呈す。底部径6.2cm。

312は、夜臼期の浅鉢底部である。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を含み、黒色を呈す。底部径7.6cm。

313は、甕形土器底部であり、上げ底を成すが、器壁が厚く、接地部も平坦となるため、安定感がある。内外面ナデ調整。胎土には微砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈す。底部径7.4cm。

314は、僅かに上げ底となるタイプであり、立ち上がりは緩い。内外面ナデ調整であり、外面は縦方向へ整形する。胎土には微砂粒を多く含み、赤褐色を呈す。底部径6.2cm。

315は、上げ底であり、底部から外反して胴部に至る。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を含み、黄褐色を呈す。底部径7.4cm。

弥生後期の土器（316～329）

316は、甕形土器である。器壁が薄く、しまりのない頸部から口縁部へいたる。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色を呈す。口縁部径24.8cm。

317は、小型の甕形土器であり、やや上げ底となる。底部から直線的に立ち上がり、胴部は丸みをもつ。外面ハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を僅かに含み、色調は淡茶褐色を呈す。口縁部径13.4cm、底部径7.6cm、器高12.8cmを測る。

318も同様のものであるが、底部は平底となり、小さめの口縁部が付く。内外面ナデ調整であり、外面には丹塗りの痕跡がある。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色を呈す。口縁部径12.0cm、底部径6.0cm、器高12.6cmを測る。

319は、袋状に近い丹塗りの複合口縁壺である。頸部下には断面三角形の凸帯を付し、頸部はやや短く、緩やかに外反する。内外面細かいハケ調整を施し、内面はそれをナデ消す。胎土には砂粒を含み、色調は淡黄白色（外面丹塗り）を呈す。口縁部径22.4cmを測る。

320は、平底の底部に穿孔を持つ、小型の鉢形土器である。底部から直線的に立ち上がり、小さめの口縁部が付く。胎土には微砂粒を僅かに含み、色調は赤褐色を呈す。口縁部径18.2cm、底部径6.2cm、器高11.2cmを測る。

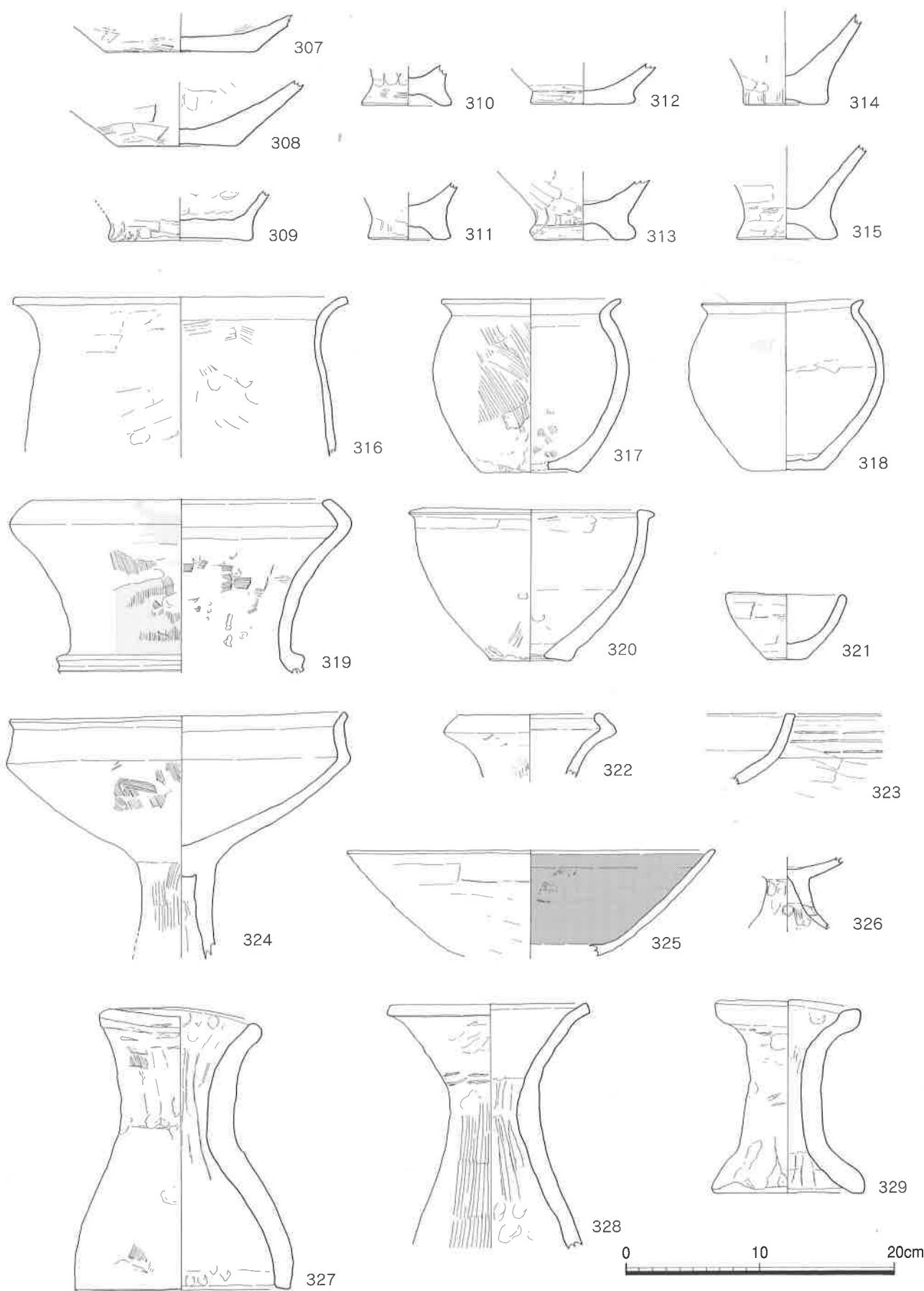
321は、小型の椀形土器。平底の感じは薄れつつあり、靴縁端部は丸く収める。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈す。口縁部径8.9cm、底部径3.1cm、器高5.1cmを測る。

322は、小型の複合口縁壺であり、頸部の外反度は強い。内外面ナデ調整であり。外面には丹が付着する。胎土には砂粒を含み、色調は明黄褐色を呈す。口縁部径10.4cmを測る。

323は、山陽系の高杯と言える。杯部上位から立ち上がり、3状の凹線が入る。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を含み、色調は淡褐色を呈す。

324は、後期前半代に見られる高杯である。杯部1／4上位から内傾させ、口縁部を外側へ開く。外面細かいハケ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を僅かに含み、色調は茶褐色を呈す。口縁部径25.0cmを測る。

325は、器高の割に広口となる鉢形土器である。底部から直線的に開き、口縁端部には平坦面を持



第58図 V区下層包含層遺物実測図-2 ($S=1/4$)

つ。内外面ナデ調整を施し、内面は黒色を呈す。胎土には砂粒を多く含み、色調は黒茶色を呈す。口縁部径27.4cmを測る。

326は、高杯脚柱部で、脚柱部は低く、3ヶ所に孔を穿つ。胎土には砂粒を多く含み、色調は明茶褐色を呈す。

327は、器台であり、胴中位から接地部にかけて内彎気味に裾広がりとなる。外面胴部上位は板ナデにより整形し、下位はナデ調整を施す。また、内面は上位にのみ、しづり痕が残る。胎土には砂粒を多く含み、色調は明茶褐色を呈す。受け部径12.0cm、接地部径16.0cm、器高20.9cmを測る。

328は、胴部がしまり、上位より朝顔状に広がる器台である。外面ハケ調整を施し、受け部と胴部の境には、タタキ痕も確認できる。胎土には砂粒を含み、色調は茶褐色を呈す。受け部径14.6cmを測る。

329は、脚部が棒状となるタイプであり、受け部、接地部への外反度が強い。内外面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は明茶褐色を呈す。受け部径11.9cm、接地部径11.2cm、器高14.2cmを測る。

石器（330～360）

330は、打製石鎌であり、平基式となる。表裏とも先端部を丁寧に加工する。全長3.1cm、幅1.6cm、厚さ0.5cmを測る。黒曜石製。

331は、凹基式の打製石鎌であり、先端部は欠損する。表裏とも丁寧に加工する。現存で、全長2.3cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。黒曜石製。

332も凹基式の打製石鎌であり、先端部は欠損する。表裏とも丁寧に加工する。現存で、全長1.4cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmを測る。黒曜石製。

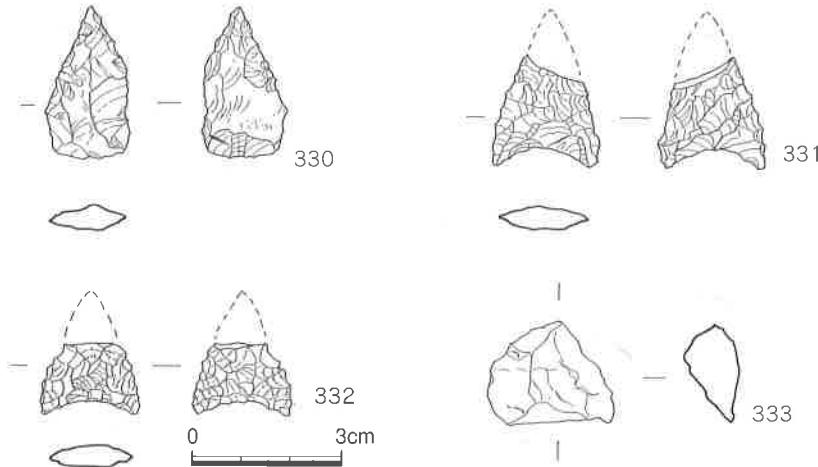
333は、加工面はないものの、薄緑色を呈する原石である。碧玉であろうか。

334は、扁平撥形の磨製石斧であり、一方に抉入を入れる。表裏とも刃部側を丁寧に研磨し、刃部先端には刃こぼれ状に打割痕が見られる。全長13.4cm、幅6.8cm、厚さ2.8cmを測る。硬質砂岩製。

335は、同様の形態であるが、刃部は蛤刃となる。表裏とも丁寧に研磨しているが、打突による欠損が目立つ。全長13.1cm、幅6.8cm、厚さ3.0cmを測る。硬質砂岩製。

336は、やや撥形を呈す磨製石斧である。刃部及び裏面は打突による剥離面が大きい。表裏とも丁寧に研磨する。全長13.6cm、幅8.4cm、厚さ3.0cmを測る。硬質砂岩製。

337は、蛤刃の磨製石斧であり、中位より基部にかけて欠損する。全長9.0cm、幅8.6cm、厚さ3.6cmを測る。硬質砂岩製。



第59図 V区下層包含層遺物実測図—3 (S=2/3)

338は、磨製石斧片であり、先端部が残るが、大半は欠損している。全長6.8cm、幅6.8cm、厚さ1.2cmを測る。硬質砂岩製。

339も磨製石斧片。全長6.6cm、幅6.4cm、厚さ2.4cmを測る。硬質砂岩製。

340は、扁平をした石器であり、石斧と考えてよい。全長6.7cm、幅5.4cm、厚さ1.0cmを測る。硬質砂岩製。

341は、石斧の中位であり、棒状を呈す。全長7.2cm、幅6.0cm、厚さ3.8cmを測る。硬質砂岩製。

342も石斧片であり、先端部であるが、角張った感じを受ける。全長7.4cm、幅6.9cm、厚さ2.3cmを測る。硬質砂岩製。

343は、石庖丁片である。半円形となるものであろうが、刃部側に穿孔を持つ。欠損後、再利用品として加工し直したものであろう。安山岩製。

344も半円形に復元できる石庖丁片である。安山岩製。

345は、横長を呈する石庖丁片であり、形態的に見て弥生後期後半代と所産であろう。硬質砂岩製。

346は、やや尖った感じのものであり、全体的に磨耗がひどい。安山岩製。

347は、刃部の一部を残すのみであり、形態は不明。安山岩製。

348も刃部の一部を残すのみのもので、上位に穿孔も認められる。安山岩製。

349は、石鎌の類であろうか。刃部には、やや反りがあり、横長を呈す。安山岩製。

350は、刃部に反りを持つ石器であり、やはり石鎌の類かと考えられる。全長17.0cm、幅2.8cm、厚さ1.1cmを測る。粘板岩製。

351は、長楕円形を呈する砥石である。断面はほぼ四角形を呈し、上下面を砥ぎ面としている。全長29.5cm、幅5.8cm、厚さ2.5cmを測る。粘板岩製。

352は、用途不明の石盤である。端部は大きく打ち欠き、加工されている。全長21.6cm、幅13.8cm、厚さ4.7cmを測る。砂岩製。

353は、砥石であり、上下面と側面も砥ぎ面としている。

354は、断面四角形を呈する砥石である。

355は、小型の砥石であり、側面に加熱による黒変が認められる。硬質砂岩製。

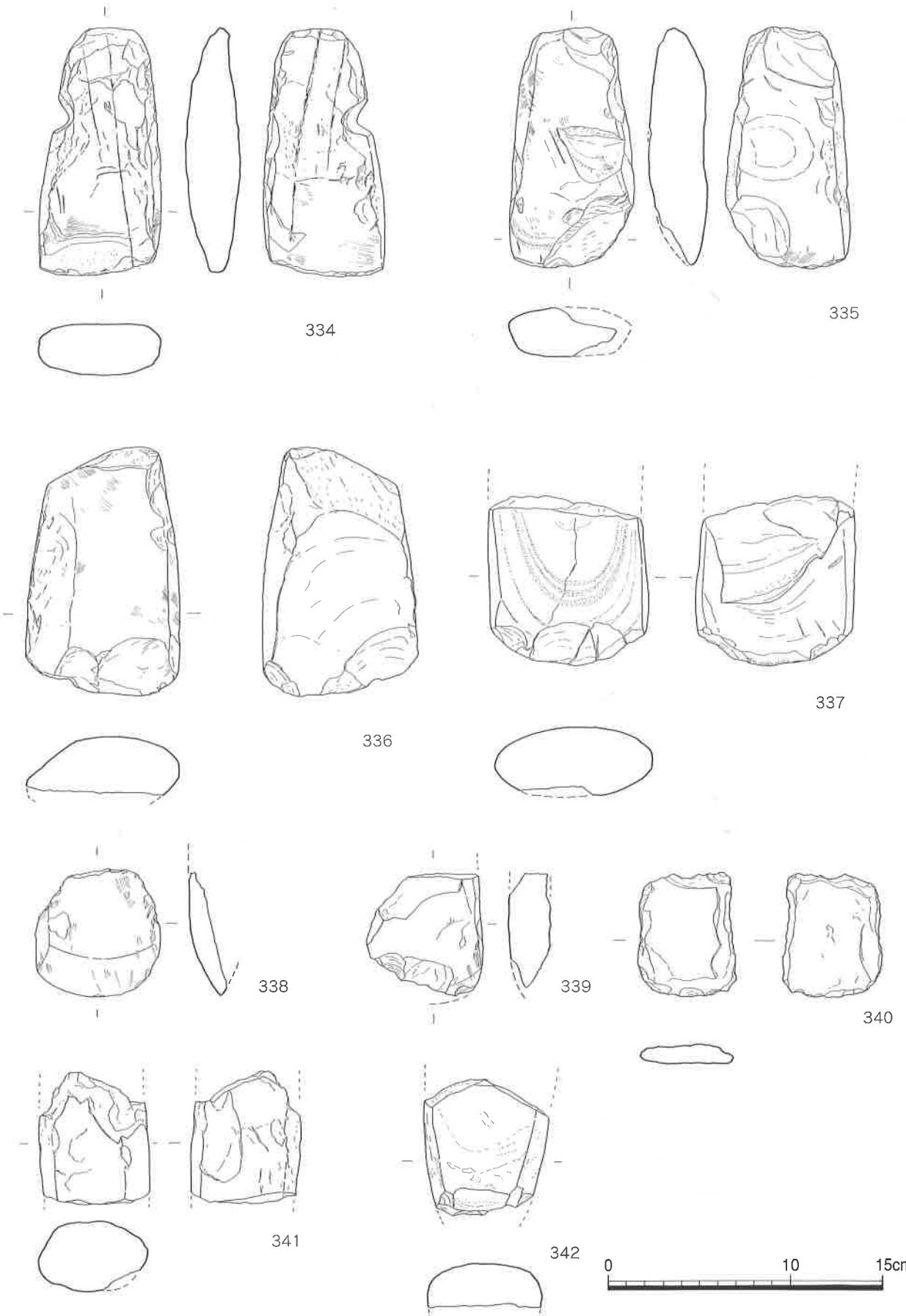
356も小型の砥石である。砥ぎ面である上面は反りが強い。

357は、円形を呈する叩き石である。全面的な研磨しており、中央部は窪む。全長10.6cm、幅12.2cm、厚さ4.6cmを測る。砂岩製。

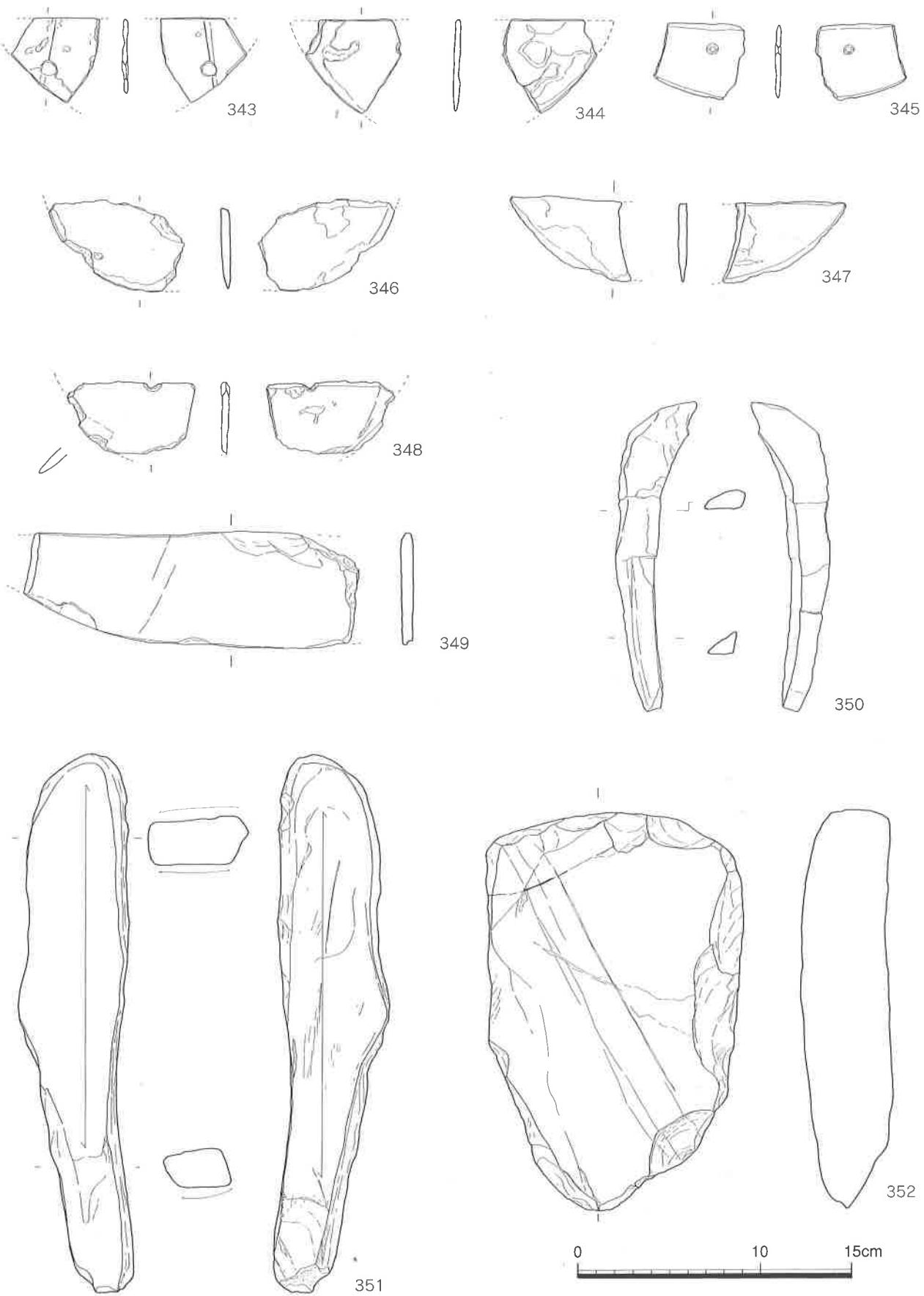
358も同様のものである。全長13.3cm、幅11.3cm、厚さ6.5cmを測る。砂岩製。

359も叩き石であり、1／2を欠損しているため、全様は不明である。全長8.8cm、幅6.5cm、厚さ5.7cmを測る。砂岩製。

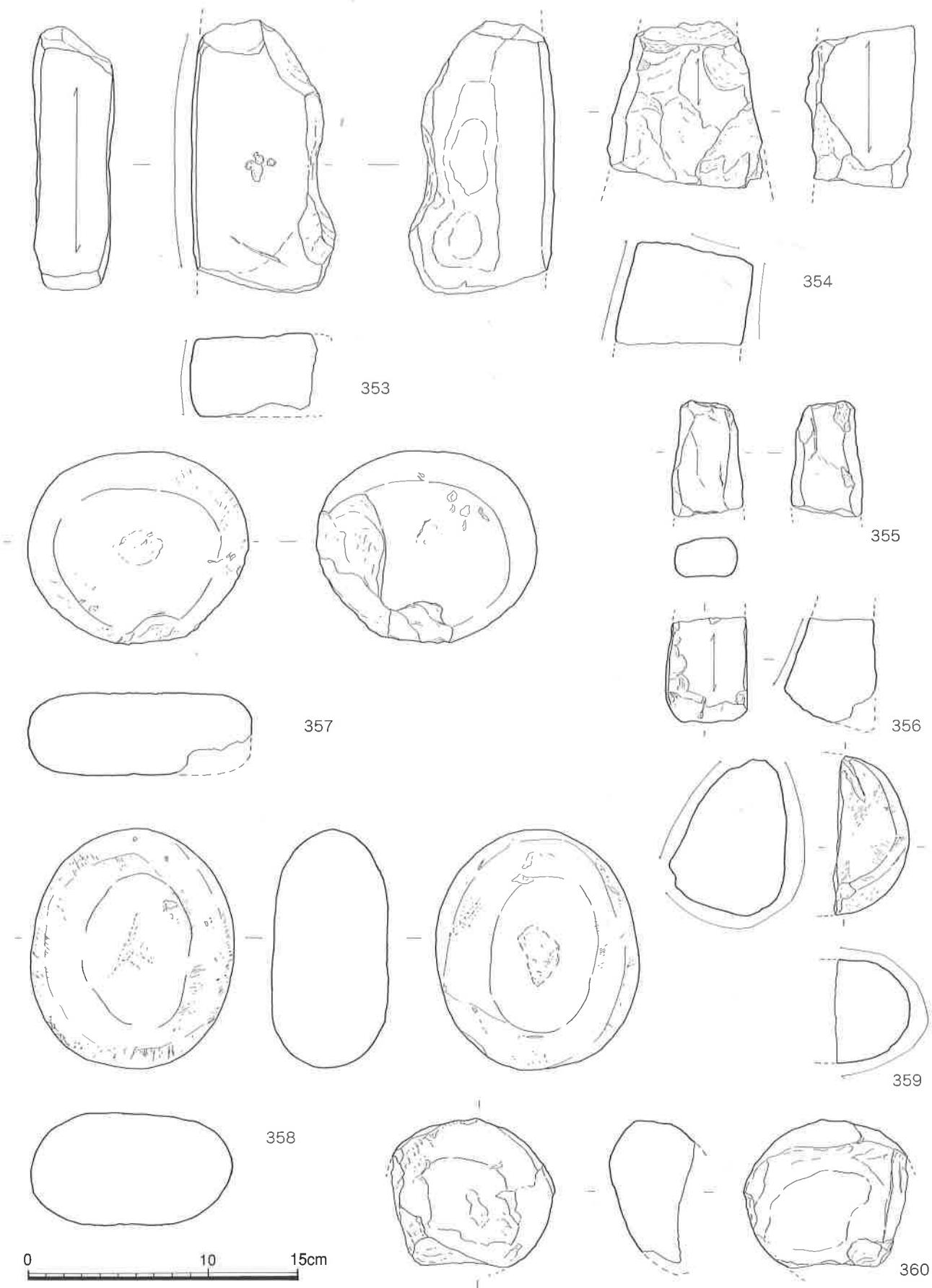
360も叩き石であり、中央には僅かに窪みが認められる。全長8.0cm、幅9.0cm、厚さ4.7cmを測る。砂岩製。



第60図 V区下層包含層遺物実測図—4 (S=1/3)



第61図 V区下層包含層遺物実測図—5 (S=1/3)



第62図 V区下層包含層遺物実測図-6 ($S=1/3$)

C. 小 結

V区で出土した溝状遺構は、幅1.2m程の規模しかなく、丘陵を全周するものではなかった。しかしながら、弥生中期後半～後期前半を主体とする大量の弥生土器が出土している。又、出土土器中を見てみても、「糸島型」と言われる壺形土器や丹塗り磨研のものが多く、祭司的な土器を破棄したようにも思える。これまでのところ、丘陵内で弥生中期代のまとまった遺構が検出されていないため、即断は出来ないが、何らかの遺構を区画するものと考えている。

この他、遺構的には段丘部に僅かに遺存していた竪穴住居跡を注目したい。一角のみを残すものであるが、壁際に小規模な柱穴列を持つものであり、第1次調査における住居群の形態に類似する。床面から出土した土器は、稻作開始期からは下るものであるが、「側柱列を持つ方形住居」という住居形態が、稻作開始期～弥生前期代にある事は確実であり、「曲り田」式とでも呼称してよいものであろう。

最後に段丘部下段について少し触れておきたい。この部分からは、弥生早期～前期の遺物が散見されていたが、遺構面に達する事ができず、詳細は、つかめなかった。この部分を含め、大半が調査区外となる丘陵東側の低い部分が、この時期の生活面を考えると、かなりの遺構が期待されよう。又、現水田部には、稻作開始期の水田（大坪遺跡Ⅱ）も調査され、支石墓の上石と考えられる巨石も過去に出土している。

全体的に見て、第1次調査（バイパス下）と同じ様相を呈する事と予想される。

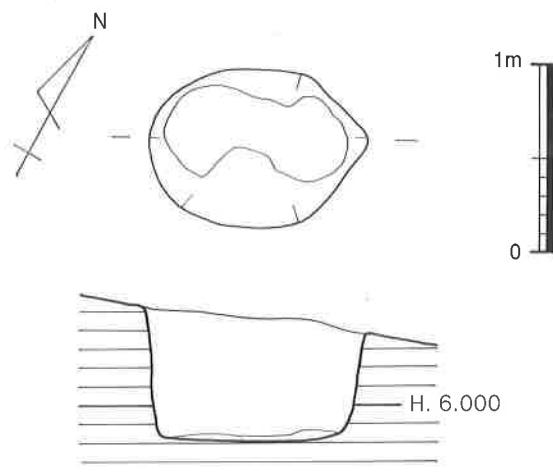
4. VI区の調査

VI区は、丘陵北東側部分にあたり、西側から東側へ傾斜している。旧地形は谷であり、調査区西側で谷頭を形成している。検出遺構は、東側に縄文時代の土坑が集中し、西側の高所に平安初頭の掘立柱建物1棟、谷肩部で溝状遺構1条等を検出した。順次、説明を加える。

a. 検出遺構

1. 1号土壙（第63図）

調査区東側で検出した楕円形の土壙である。規模は、112cm×84cm、深さ68cmを測る。出土遺物には、「並木式土器」や「阿高式系土器」があり、縄文中期前葉～中葉の時期となろう。



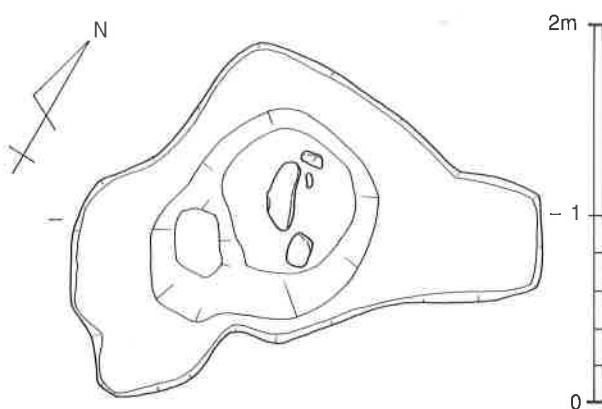
2. 2号土壙（第64図）

調査区東側で検出した不整形の土壙である。規模は、248cm×160cmのプランであり、2段目に104cm×128cmの長円形の掘り込みがある。深さ64cmを測る。出土遺物には、「阿高式系土器」があり、時期は、縄文中期中葉と考えている。

第63図 VI区 1号土壙実測図 ($S=1/40$)

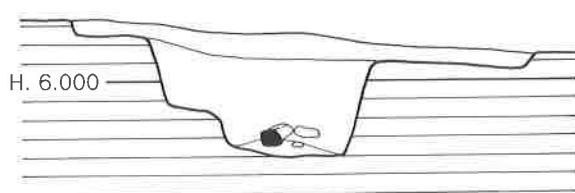
3. 3号土壙（第65図）

調査区東側で検出した不整形の土壙である。規模は、164cm×116cm、深さ20cmを測る。縄文土器の碎片が出土しているが、図化に耐えないものばかりである。検出状況から見ても、他の土壙の同時期と考えられる。



4. 4号土壙（第66図）

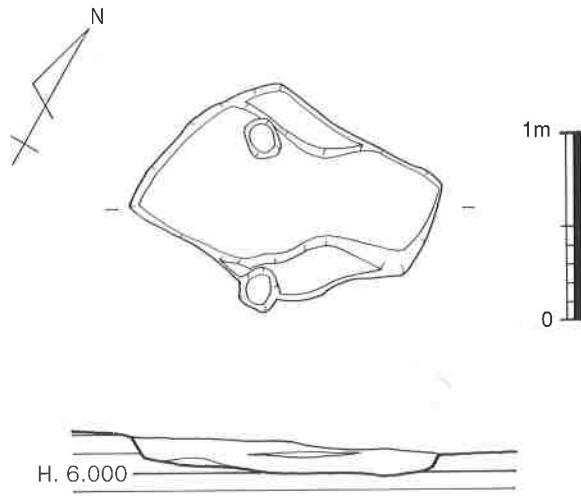
調査区中央部で検出した円形の土壙である。土壙内には、2次加熱を受けた拳大の石や黒曜石の石核が集積されており、「阿高式系土器」の碎片等が出土している。規模は、136cm×110cm、



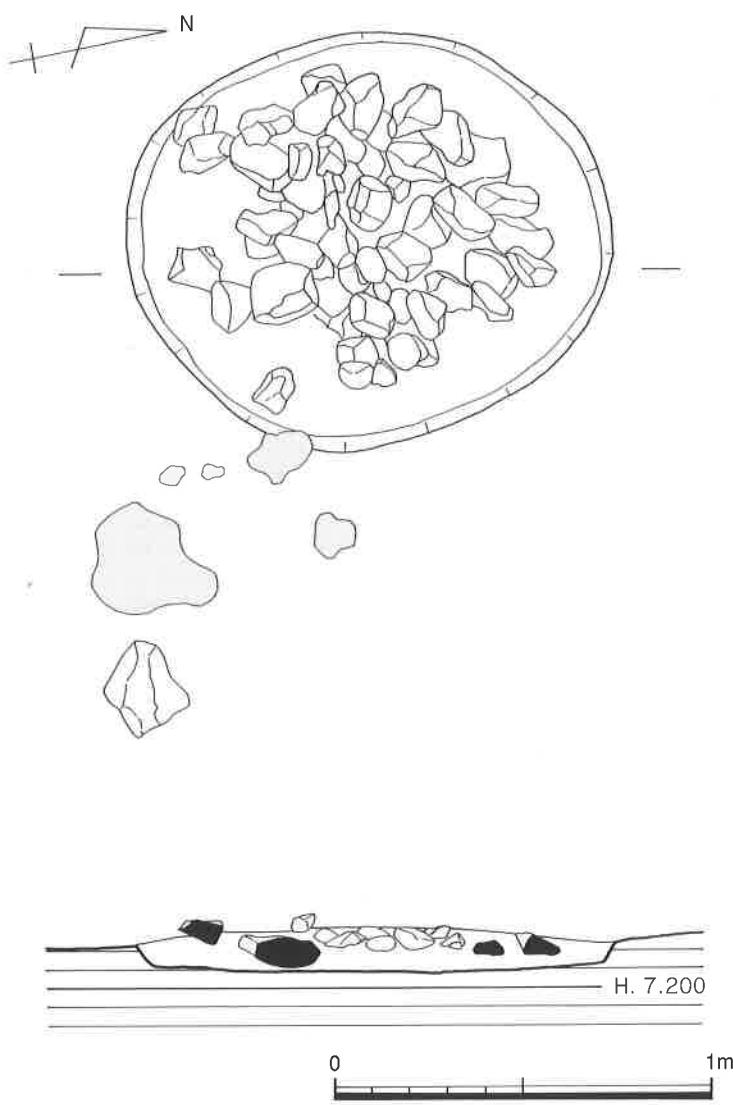
第64図 VI区 2号土壙実測図 ($S=1/40$)

深さ12cmを測る。

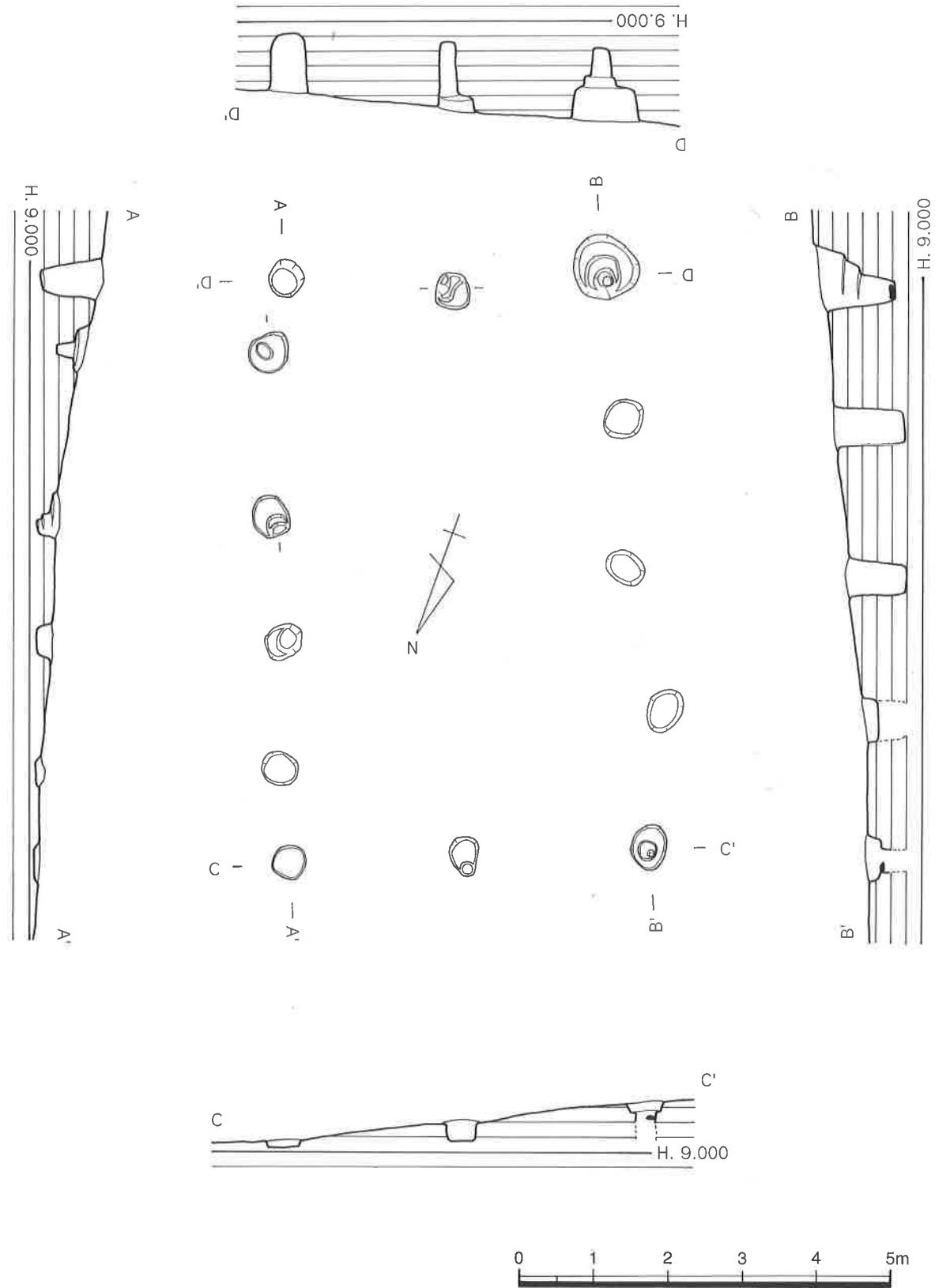
4号土壙については、周囲の遺構から独立している点が気になる。また、土壙脇には焼土塊なども確認されていたため、単なる集石遺構とは考えられなかった。こうした検出状況や縄文期の遺物の出土からも想定して、住居跡の中央部に設置されていた炉の可能性も捨てがたく、縄文中期後半代の竪穴式住居が存在していたのではないだろうか。



第65図 VI区 3号土壙実測図 ($S=1/40$)



第66図 VI区 4号土壙実測図 ($S=1/20$)



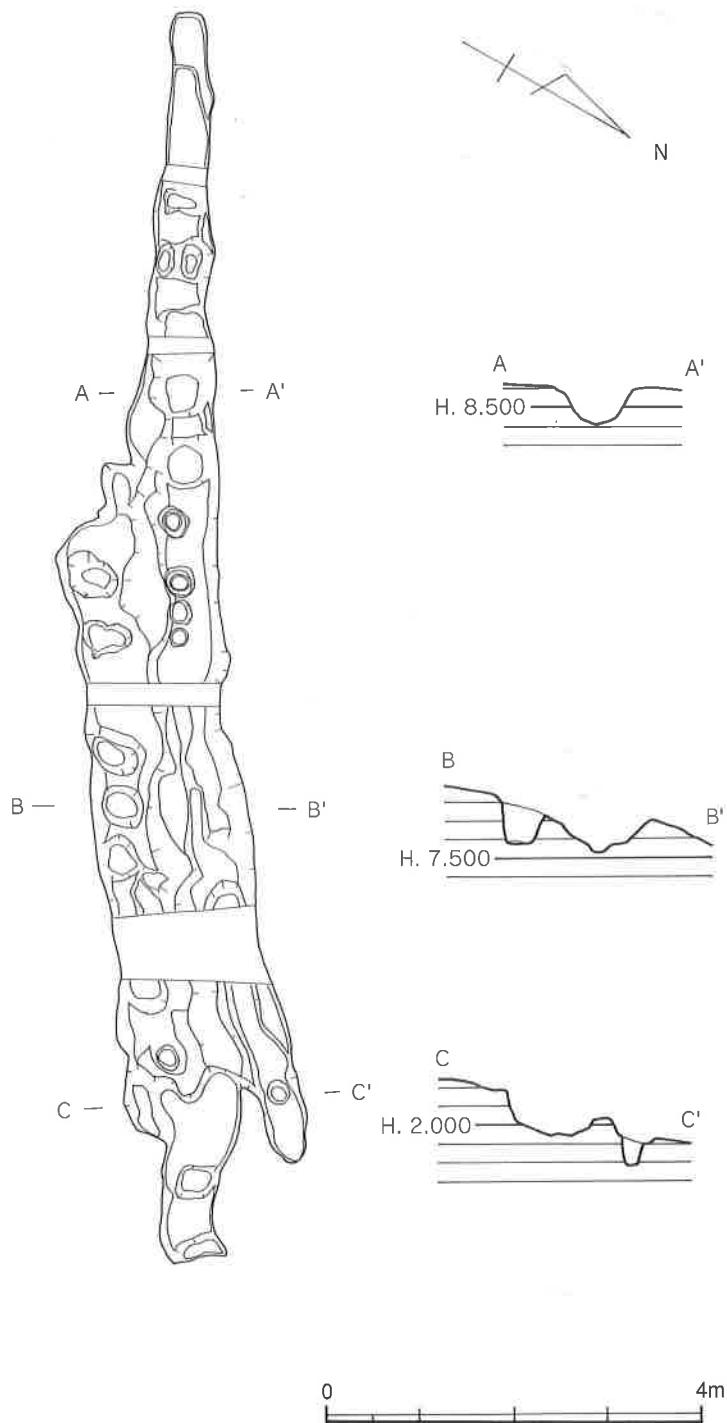
第67図 VI区 1号掘立柱建物実測図 ($S=1/80$)

5. 1号掘立柱建物（第67図）

調査区西側の高所で検出した2間×4間規模の掘立柱建物である。柱穴のライン的には、しっかりしたものではないが、深さから想定して、掘立柱建物としておきたい。規模は488cm×768cmを測るもので、主軸はほぼ南北方向をとる。

6. 1号溝状遺構（第68図）

調査区南側、谷肩部で検出した溝状遺構であり、西側から東側へと走る。断面はU字形を成し、深さ50cm程で、13mの長さで検出している。



第68図 VI区1号溝状遺構実測図 (S=1/80)

b. 出土遺物（第69図）

361～366は、1号土壙出土の遺物である。

361は、縄文土器口縁部片である。直線的に開く口縁部には、凹線が入り、凹線施入後に爪形文を施す。また、口縁端部にも刺突文が施されている。所謂、「並木式土器」と呼ばれるものである。胎土には滑石粉を含み、色調は黒茶色を呈す。

362は、「並木式」の内傾する口縁部片である。凹線は持たず、2本1組の押引文であり、竹管文が施入される。胎土には滑石粉を含み、色調は黒茶色を呈す。

363は、押引による「並木式土器」である。刺突文が施入される。胎土には滑石粉を含み、色調は黒茶色を呈す。

364は、縄文土器片であり、穿孔が認められる。胎土には滑石紛を含み、色調は淡茶色を呈す。

365、366は、条痕が施されるものであり、「阿高式系」の土器と言える。胎土には滑石粉を含み、色調は暗茶色。

367は、ピット3より出土した小片である。胎土には微砂粒を含み、色調は淡茶色を呈す。

368もピット3より出土した小片で、内側には条痕が施される。胎土には砂粒を含み、色調は茶色を呈す。

369は、ピット2出土の「阿高式系」土器である。胎土には滑石粉を含み、色調は淡茶色を呈す。

370もピット2出土。表面には凹線文による縦方向の文様が施される。胎土には滑石紛を含み、色調は淡色を呈す。

371～377は、2号土壙出土の遺物である。

371、372は、横方向への凹線文を入れる「阿高式系土器」である。凹線は比較的しっかりとされている。胎土には滑石紛を含み、色調は淡茶色を呈す。

373は、縦方向へ凹線文が施入されるもので、凹線自体は浅く、不明瞭である。胎土には滑石粉を含み、色調は淡茶色を呈す。

374も同様であり、浅い凹線が横方へ入る。胎土には滑石粉を含み、色調は暗茶色を呈す。

375は、条痕が入る。胎土には砂粒を含み、色調は淡茶色を呈す。

376は、黒曜石の石核である。

377は、黒曜石の剥片である。

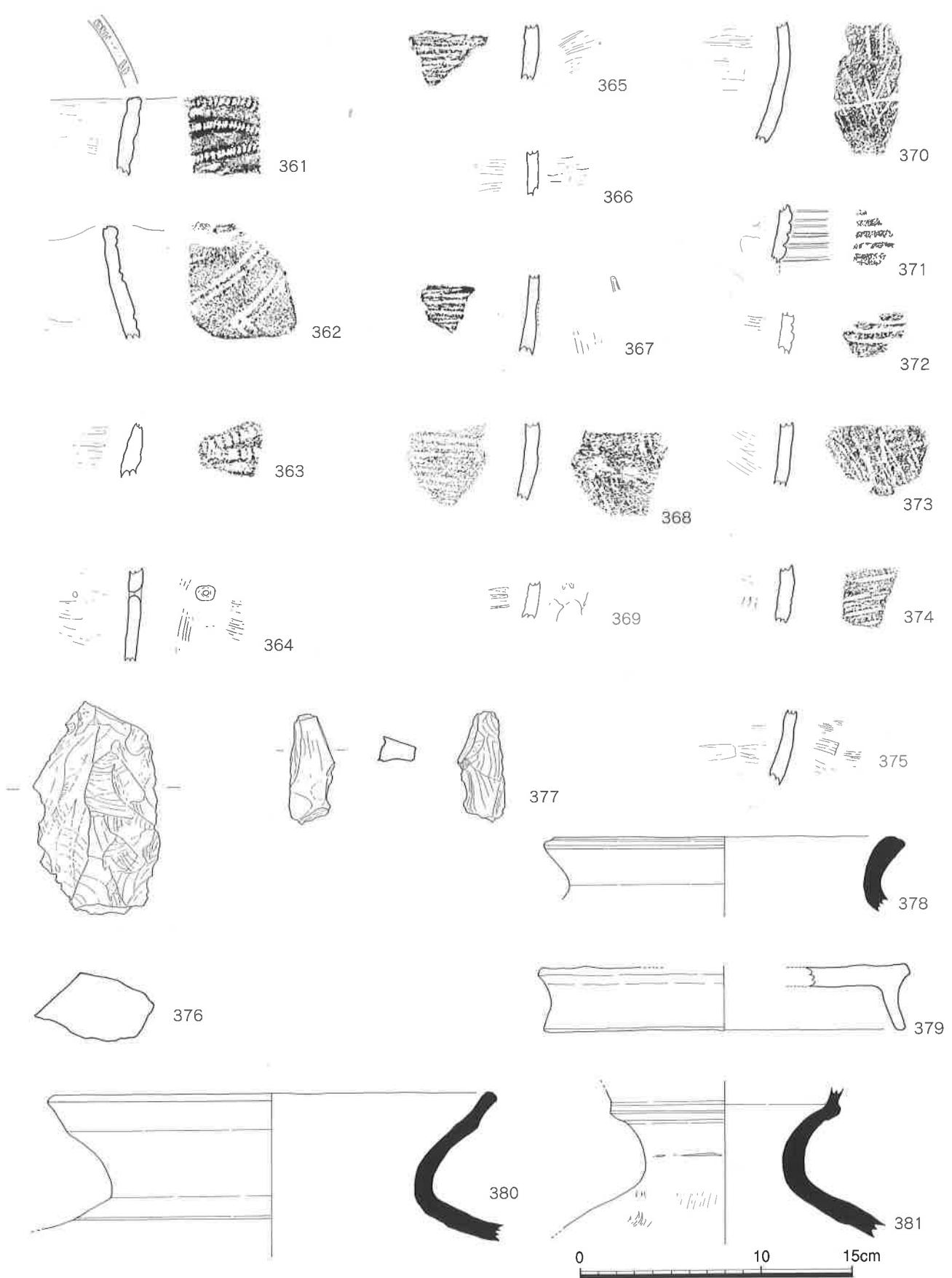
378～381は、遺構検出面出土の遺物である。

378は、甕形土器口縁部片である。頸部の屈曲は強く、口縁部は肥厚している。胎土には微砂粒を若干含み、色調は暗灰色、焼成は良好である。復元で口縁部径20.0cmを測る。平安期のものであろう。

379は、土師器高台付皿である。高台の径の割に器高が低い。胎土には砂粒を含み、色調は褐色、焼成は良である。口縁部径20.6cm、高台部径20.0cm、器高3.6cmを測る。

380は、複合口縁を呈する須恵器甕形土器片である。頸部の屈曲は強く、肩部に沈線を施入する。胎土には砂粒を若干含み、色調は暗灰色、焼成は良好である。復元で口縁部径24.8cmを測る。

381も複合口縁を呈する須恵器甕形土器片であり、頸部が長いタイプとなる。複合口縁の接合部には凸帯が付される。



第69図 VI区遺構遺物実測図 (S=1/3)



第70図 VI区の全体図 ($S=1/250$)

C. 小 結

VI区では、縄文中期代の土壌を中心として遺構が確認された。これまでの石崎地区遺跡群での調査においても「阿高式系土器」の出土は見られていたが、今回、これに先行する「並木式土器」の出土は特筆されるものと言え、稻作開始期の下地としての縄文文化自体が、時間的にも面的にも広く続いている事が確認されたものと言える。今後、同時期の遺構、遺物とも詳細に調査し、検討していくかなければならないであろうが、同時期の遺構が丘陵に存在する事は間違いないであろう。又、縄文後・晩期の遺構、すなわち弥生早期に直結する稻作開始期直前の遺跡が確認されれば、我が国における稻作受容の状況が解明される事となり、今後、石崎地区遺跡の周辺や山裾部分の調査に期待したい。

高所にて確認された掘立柱建物については、規模的には小さいものである。しかしながら、方向的には、IV区(中巻掲載)のものと合致しており、一連のものと見ている。詳細は、中巻に譲るが、丘陵全体に広がる建物群の性格は、公的施設であった可能性は極めて高いものである。

IV. 調査のまとめ

本書において、石崎曲り田遺跡第3次調査のI、IV、VI区の遺構、遺物の調査報告を行った。以下、要点をまとめてみたい。

1. 縄文期については、中期前半～後半にかけての遺構、遺物を確認している。中でも「並木式土器」については、破片資料ではあるが、その調整、施入される文様により数パターン型式が確認できる。

本遺跡で確認されたものは、①凹線文を持たないもので、2本1組単位の施文具による押引文を施すもの。②凹線を持たず竹管文が施されるもの。③凹線文を持つものであり、2本1組単位で、爪形文を施すもの。であり、全てに滑石粉が混入している。

石崎地区の調査においては、これまでにも中期後半代の「阿高式土器」が出土していたが、ほぼ同じ文化圏で見られる「並木式土器」の確認は、「阿高式土器」へと直結するものと言え、今後、ますます同時期の資料は増加するものと言える。

2. 弥生期については、ほぼ、全般（前期初頭～後期後半）にわたる遺構、遺物を確認している。

前期では、I区、V区で遺構が出土している。中でもV区において検出された住居跡は、「曲り田式」とでも言うべき、側柱を持つ方形住居であり、特異な形態と言える。遺物は少量であるが、調査区外となる低い部分がこの時期の生活面と考えら、今後、丘陵東側部分での調査は慎重を期したい。

遺物では、磨製石器において目につくものを幾分紹介したい。石鏃、石斧等この時期の石器が

多く出土しているが、石庖丁では、抉入を持つものが含まれている。V区に隣接する大坪遺跡（昭和63年度調査、圃場整備事業）においても完形のものが出土しているが、穿孔の変わりに抉入を施すタイプが稻作開始期の特徴のひとつと言えよう。また、同様に石斧についても同様の事が考えられる。

中期代以降については、V区の溝状遺構が特筆できる。中期後半～後期後半代にわたるものであるが、同時期の遺構が未確認の中で、丘陵上を掘り切る形で検出された溝の確認は興味深いものである。また、出土遺物には丹塗りのものが多く、何らかの遺構を区画する性格とも考えられる。

3. 古墳期については、初頭の遺構が中心となる。I区において出土した住居跡群は、焼失住居と呼べるものであり、埋土中よりかなりの炭化物が出土している。また、カマドの設置が見られるものもあり、糸島地方におけるカマド導入期に近い住居であろう。住居から、ほぼ同時期の一括資料となる土師器が出土しており、また、2号住居からは初期須恵器も出土している事から糸島地域でのカマド導入期における土器様式の指標となろう。

4. 平安期では、掘立柱建物をI区、VI区と確認しているが、ほぼ主軸を共にしている点が注目される。詳細は、全様が確認できるIV区の報告（中巻）に譲るが、昭和54年度の第1次調査、昭和62年度から平成3年度にわたる曲り田周辺遺跡の調査と含め、建物がかなりの数となったため、石崎丘陵の性格を含め、今後、注目されるものと言える。

圖 版





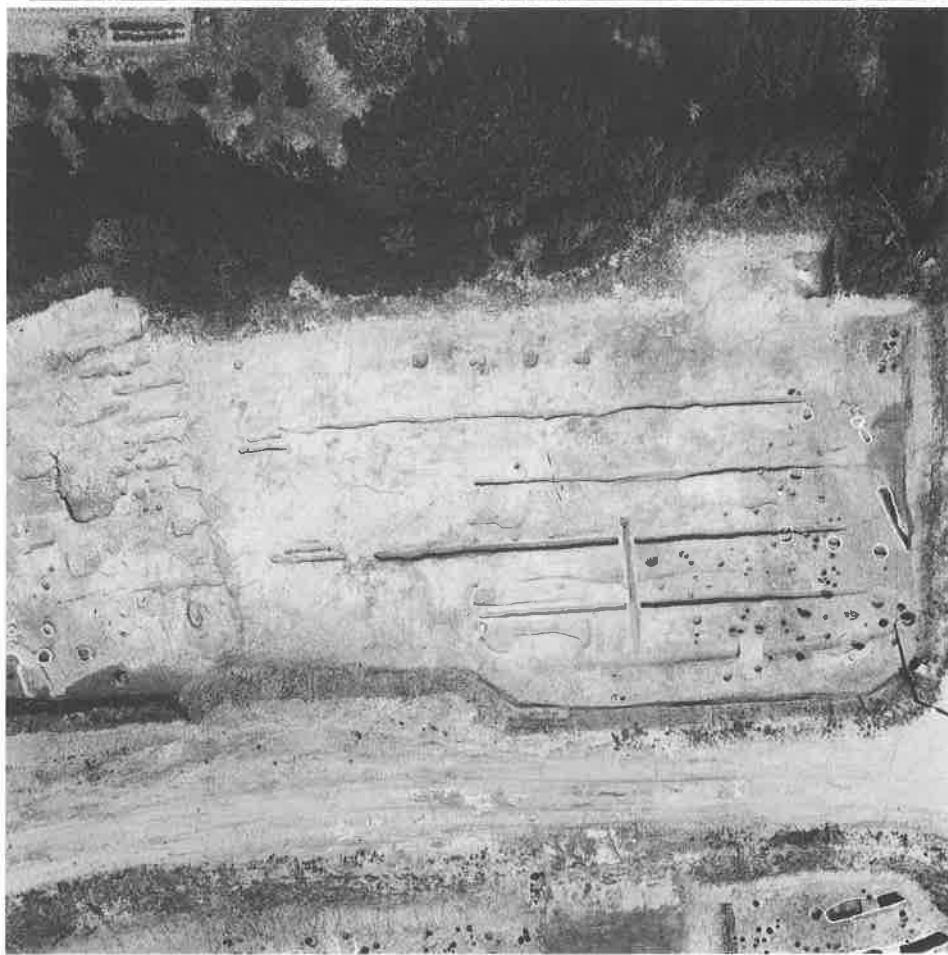
a 丘陵全景（北東から）



b I 区全景（北側から）



a I 区全景（真上から）



b I 区南側全景（真上から）



a I 区下層住居群全景



b 1号住居跡



a 2号住居跡検出状況



b 2号住居跡



a 2号住居カマド設置状況



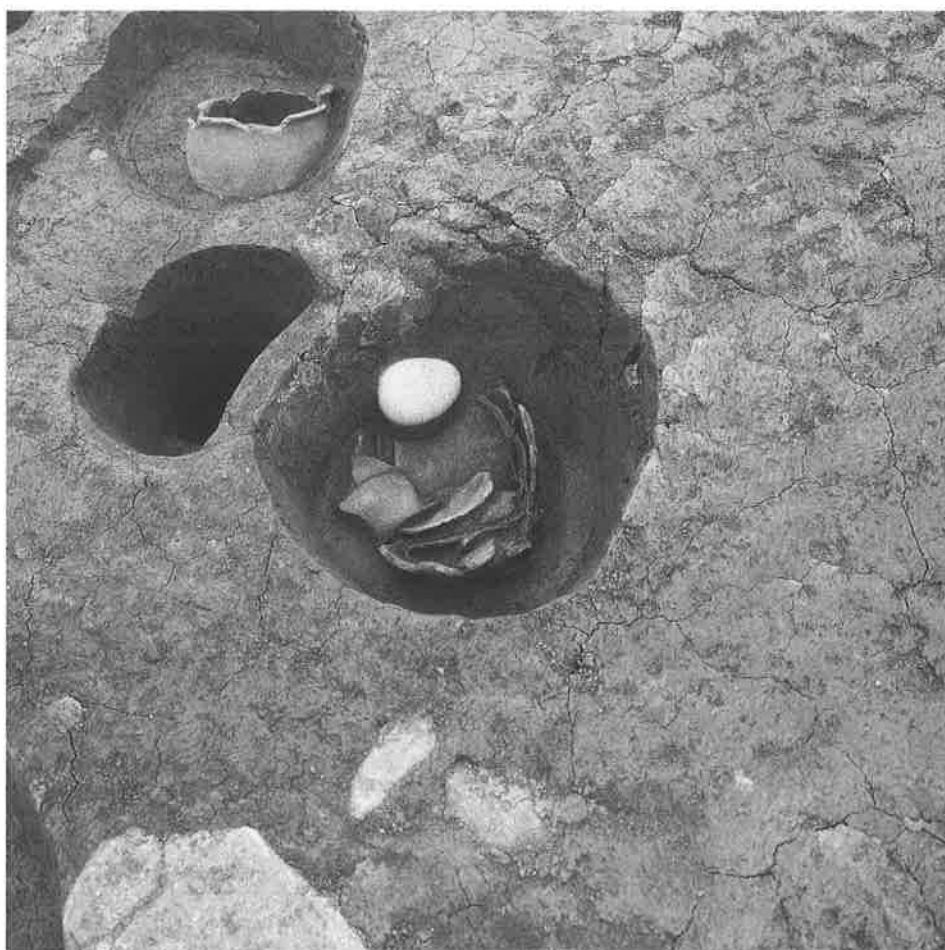
b 2号住居跡屋内土壙



a 3号住居跡（上から）



b 4号住居跡（北から）

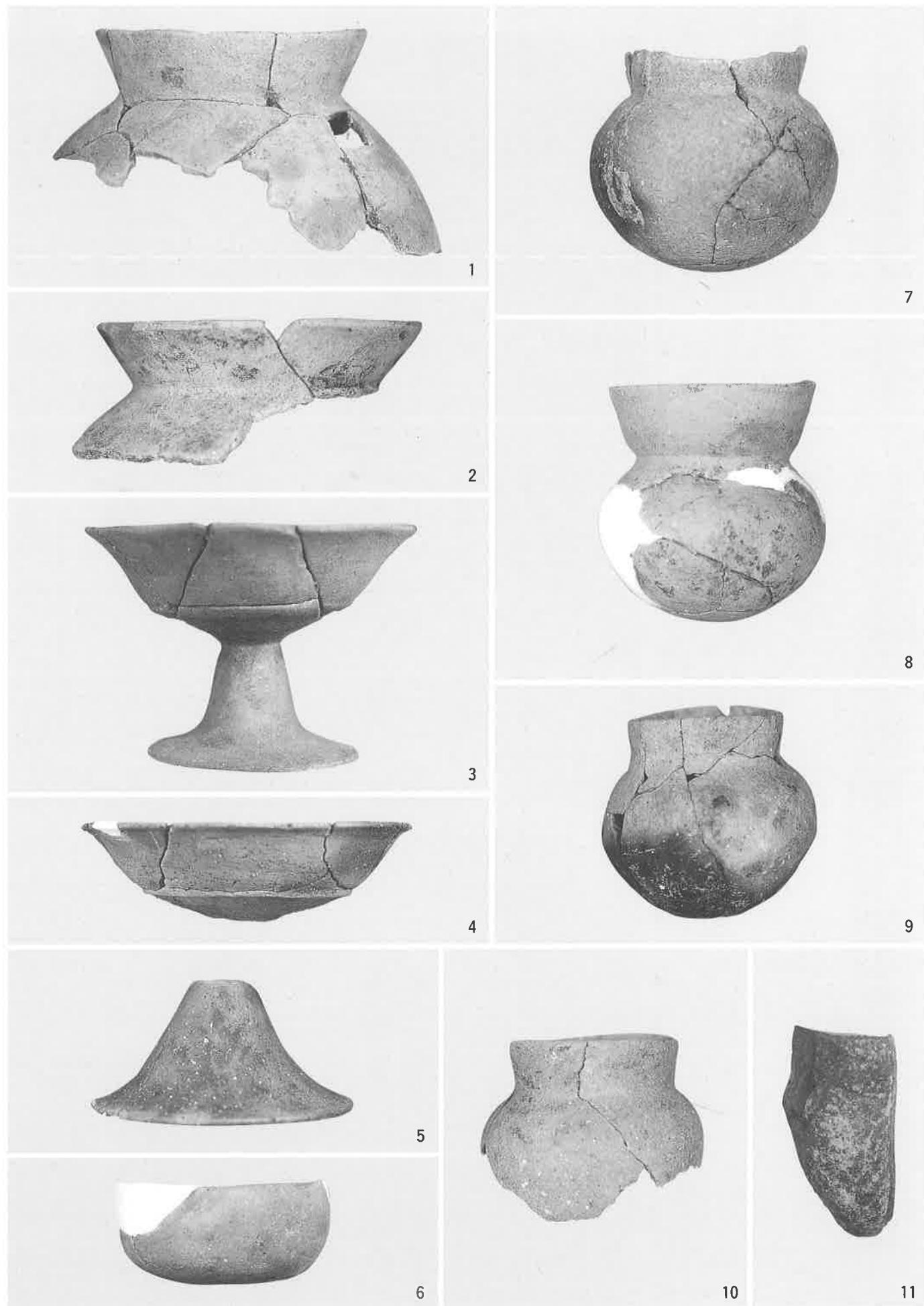


a P-39

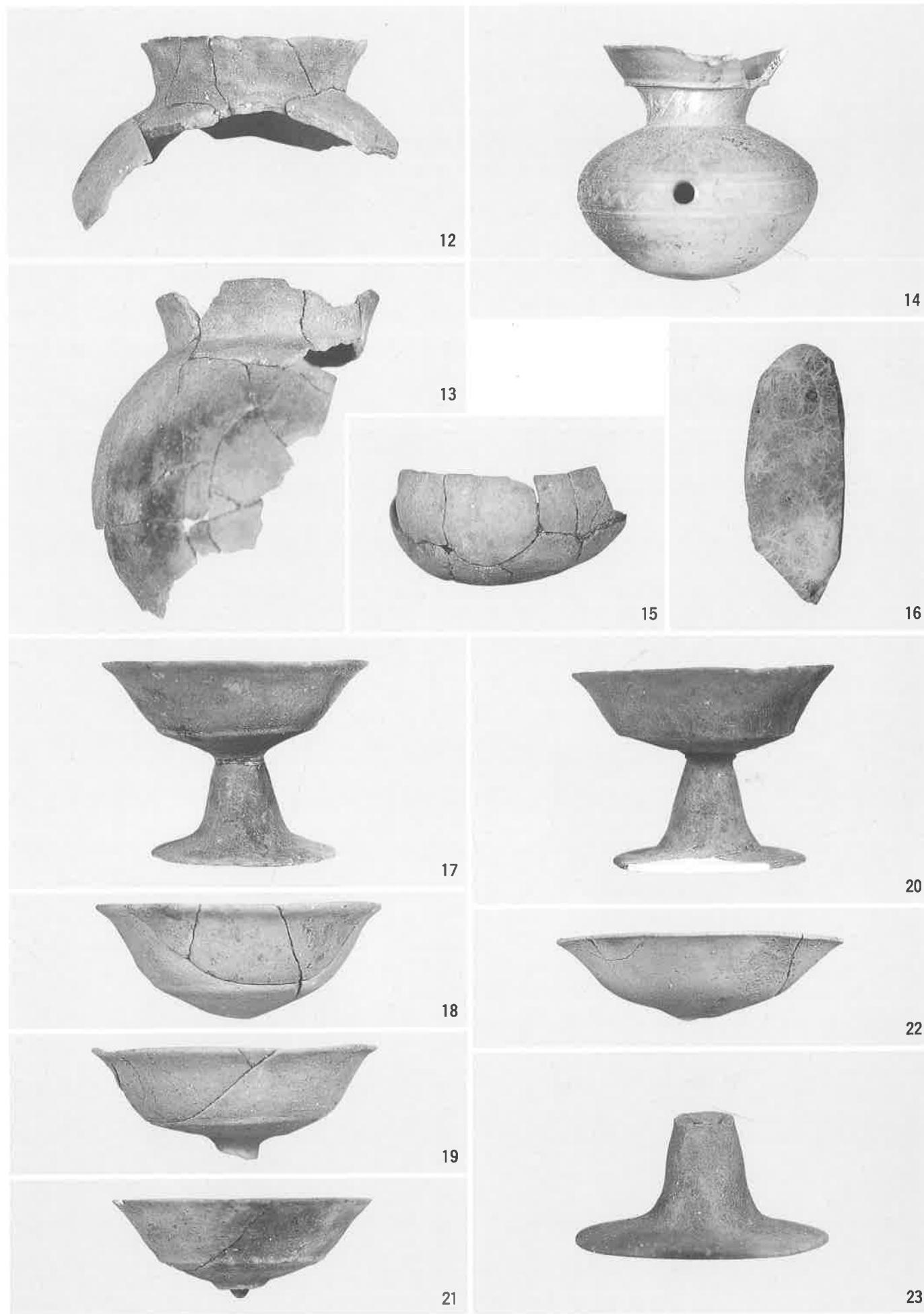


b P-40

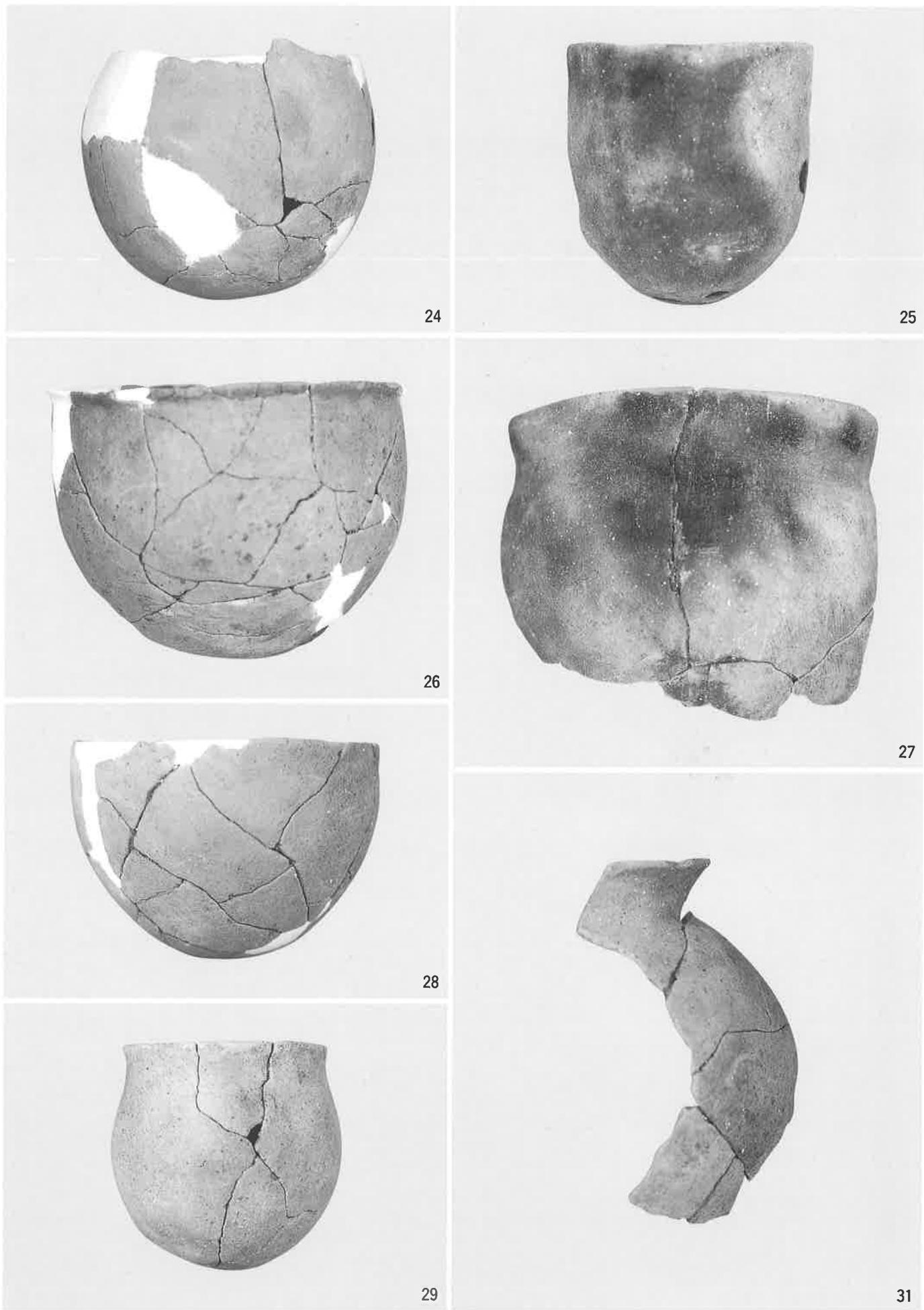
図版 8



I 区出土遺物－1

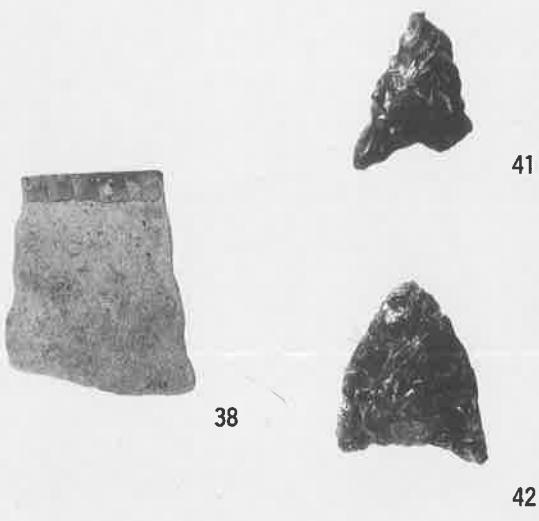


I 区出土遺物 - 2





37



41

38

42



62



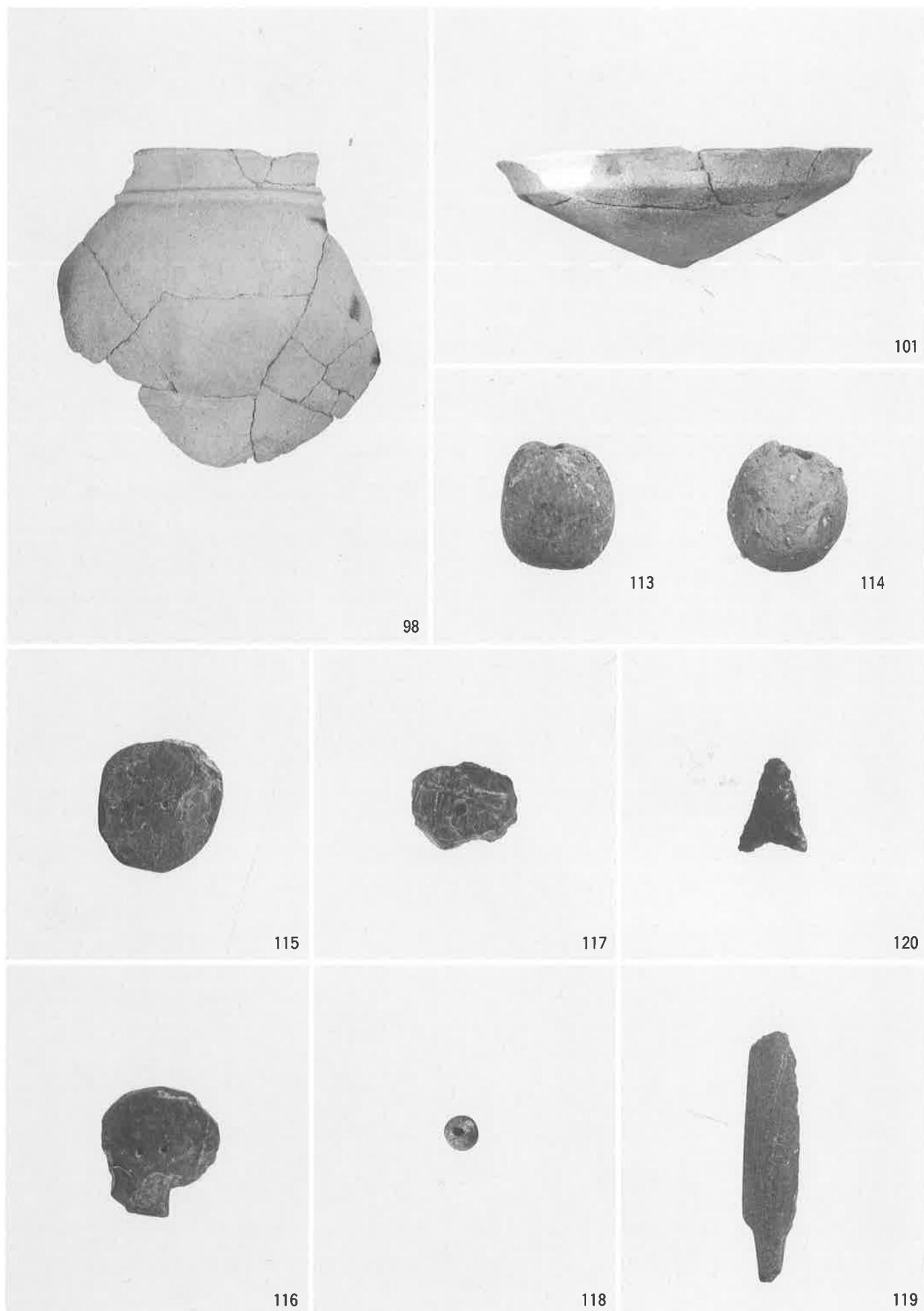
60

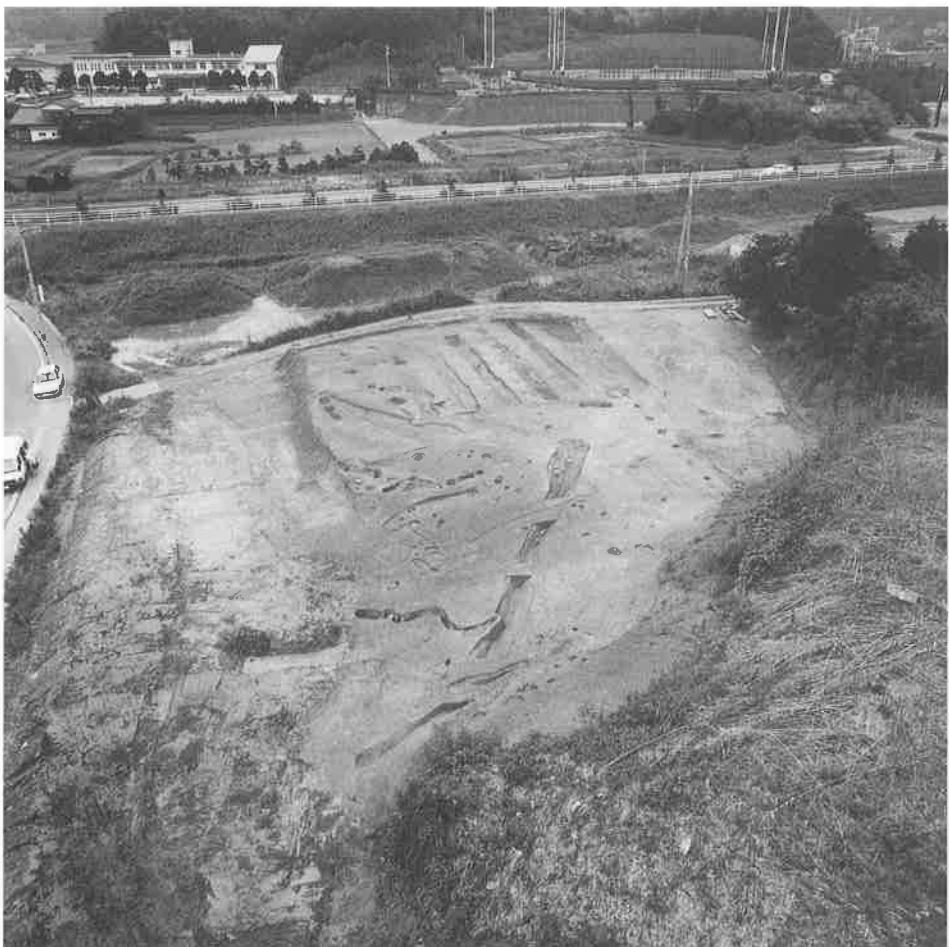


61



63





a V区全景（北側から）



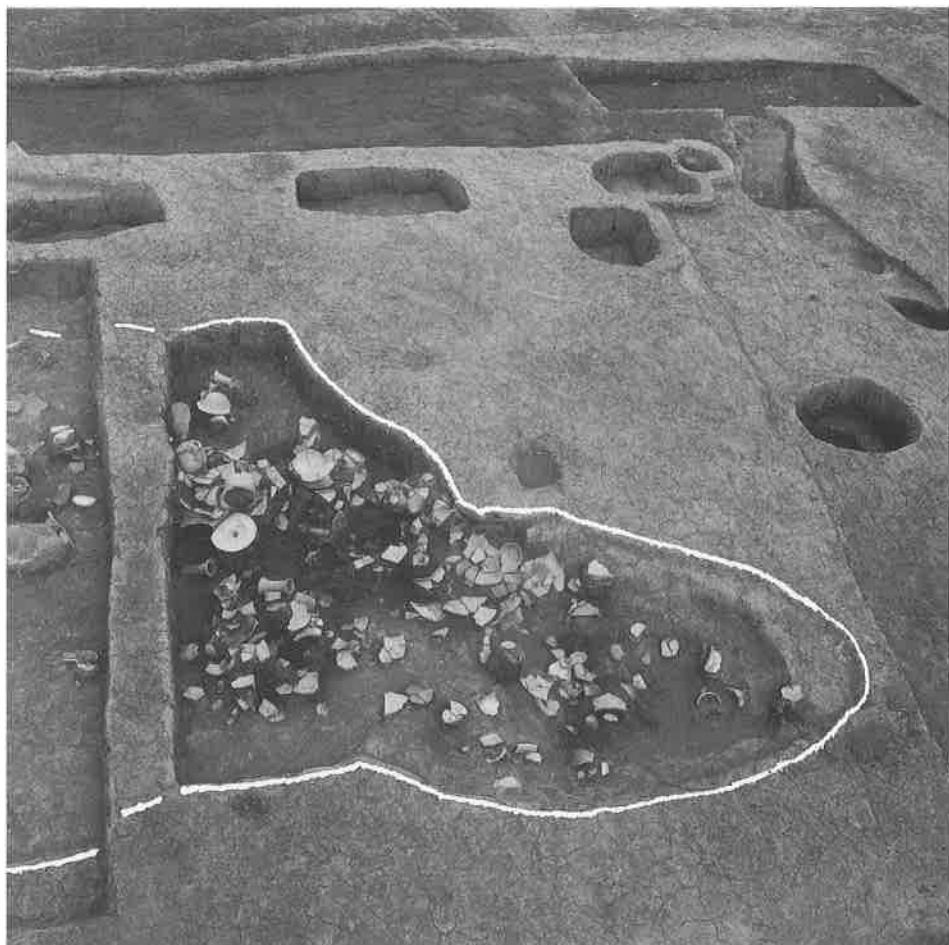
b V区全景（真上から）



a 1号溝状遺構全景（北側から）



b 1号溝状遺構全景（真上から）



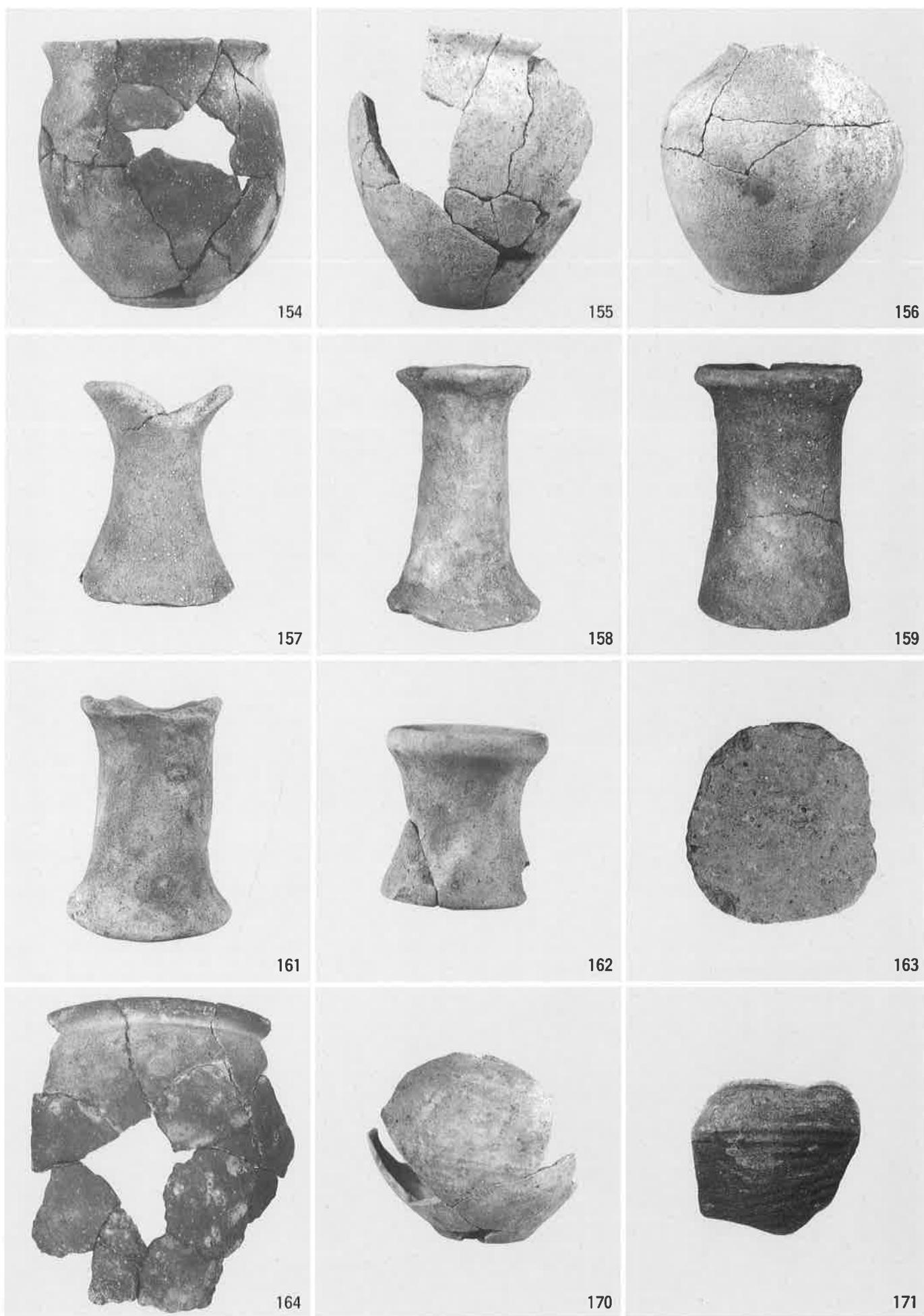
a 1号溝状遺構遺物出土状況



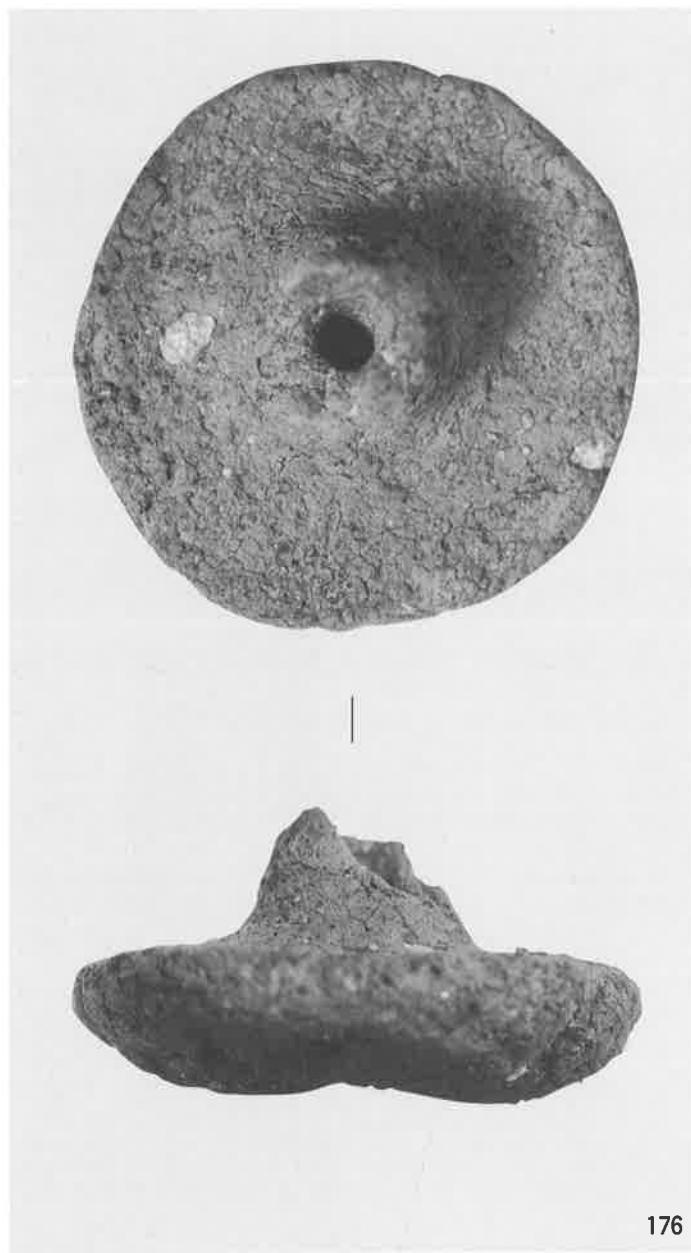
b 1号溝状遺構土層状況



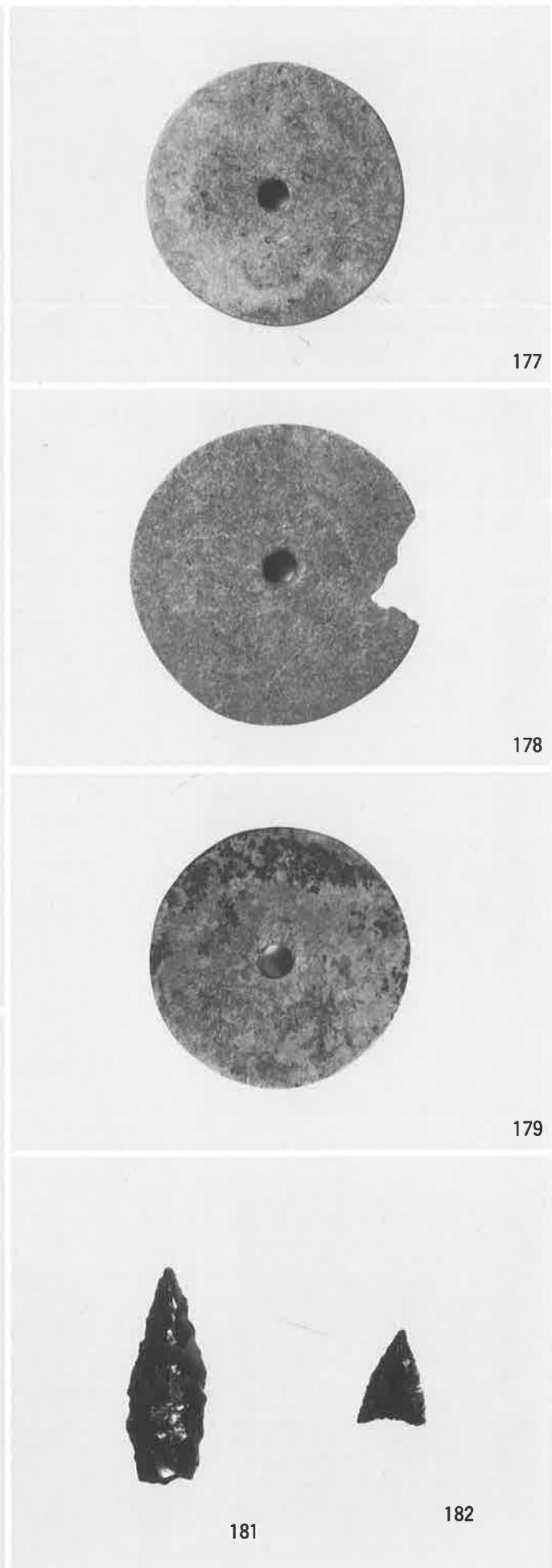
1号溝状遺構完堀



V区出土遺物－1



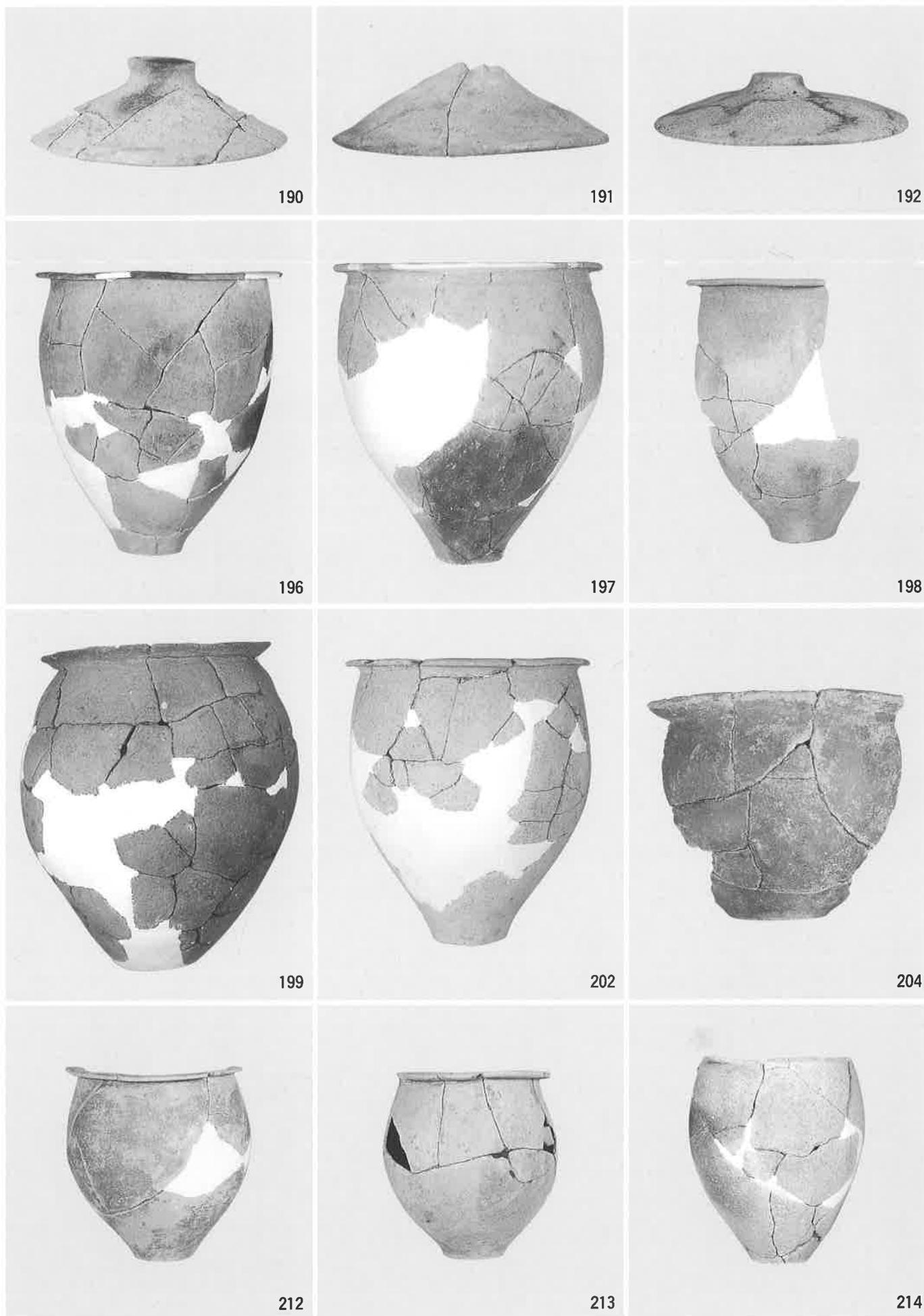
176



181

182

180

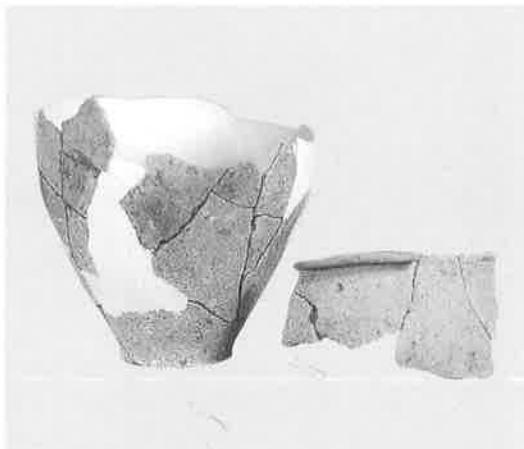




216



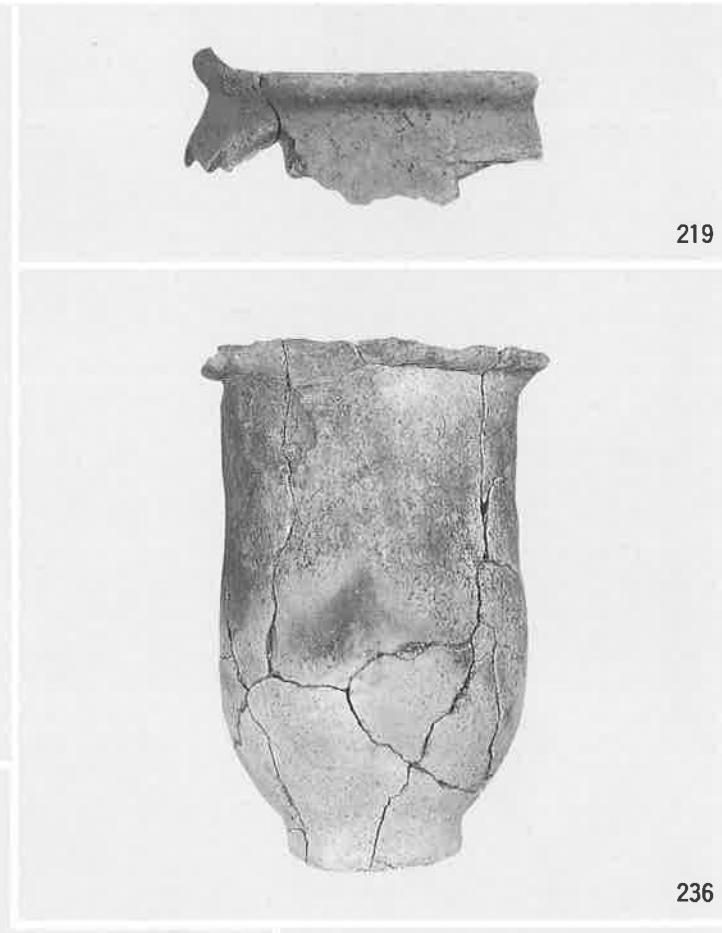
217



218



221



236



237



239



240



243



244



245



246



253



254



255



256



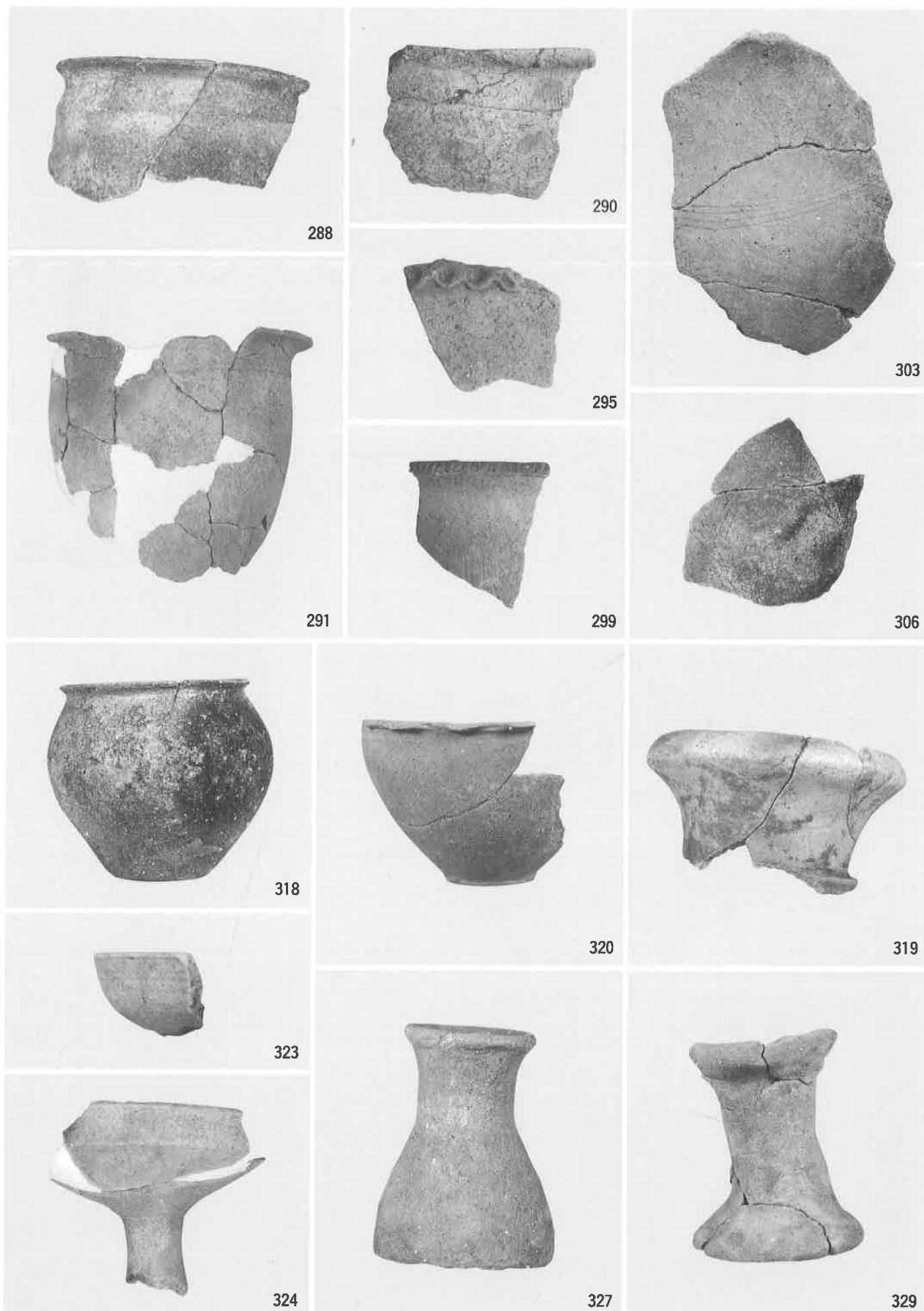
261

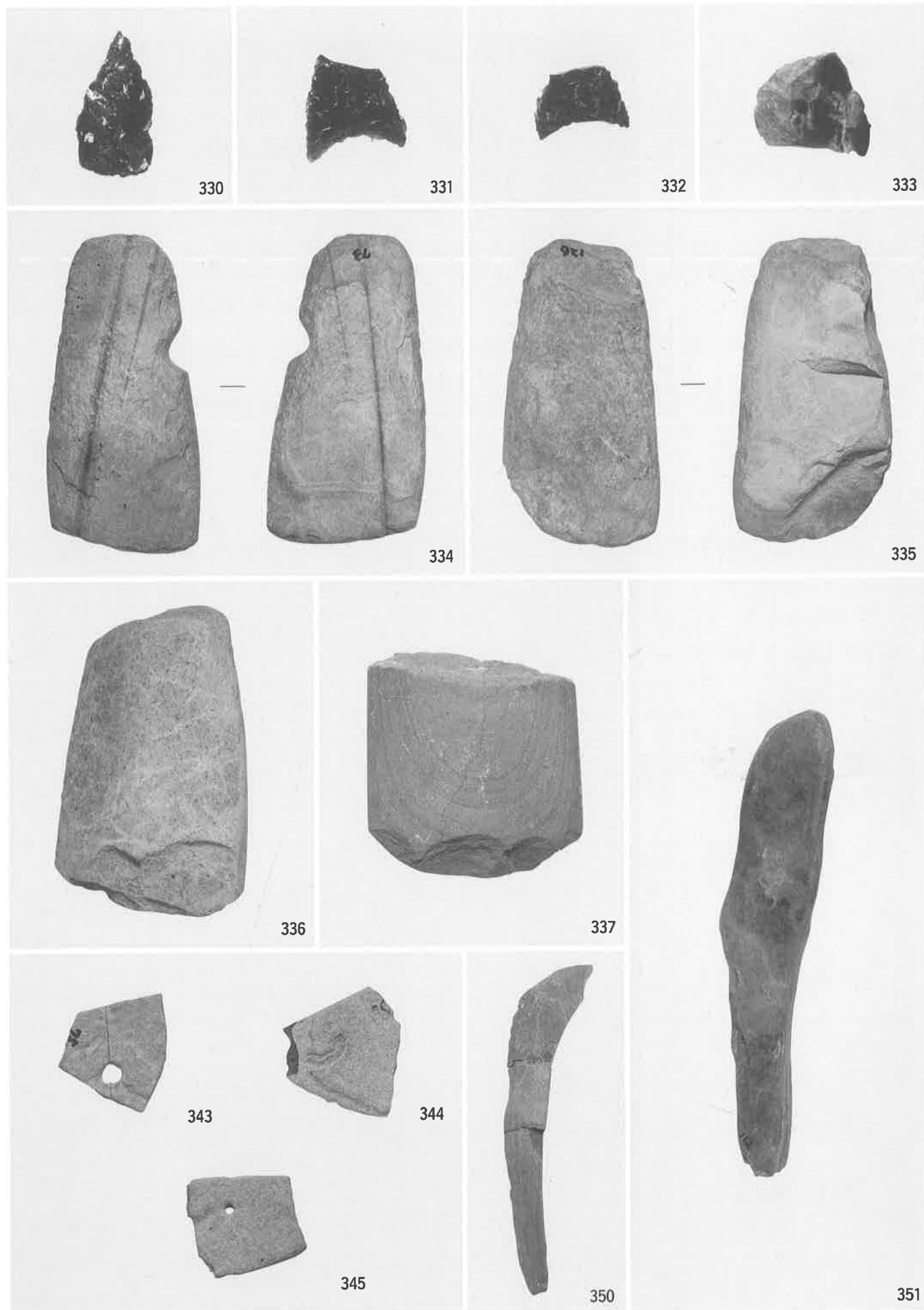


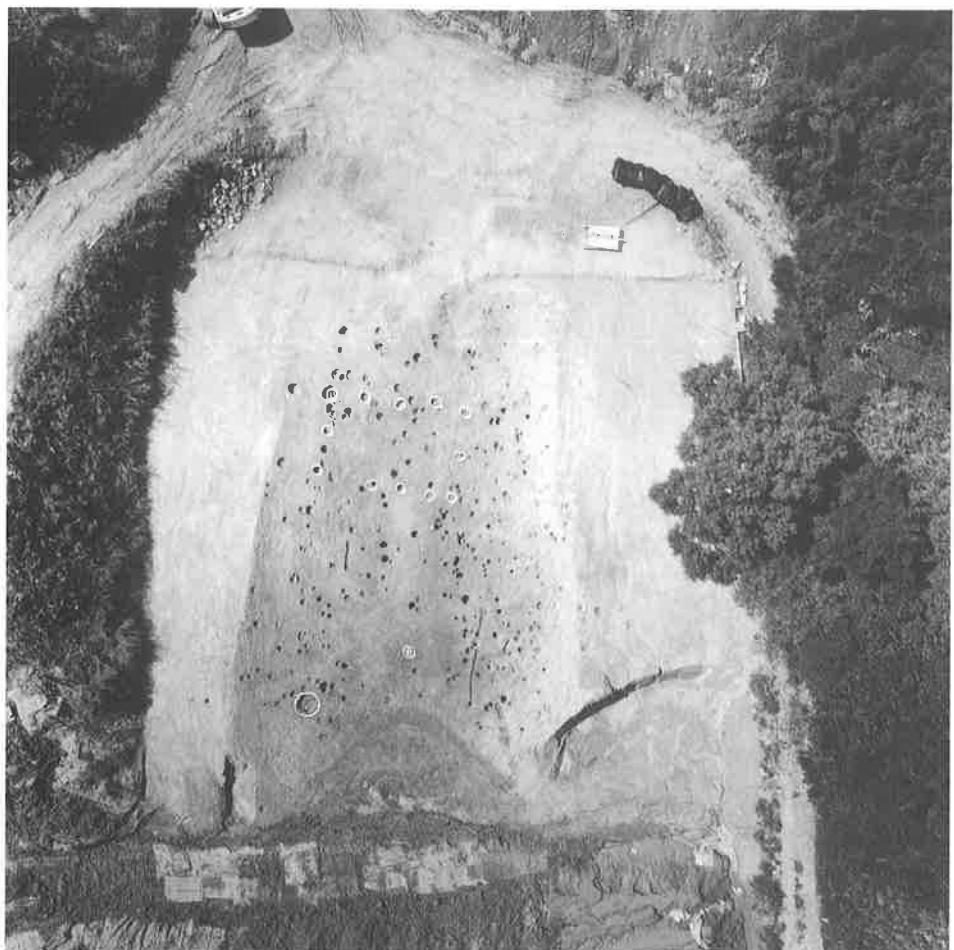
267



271





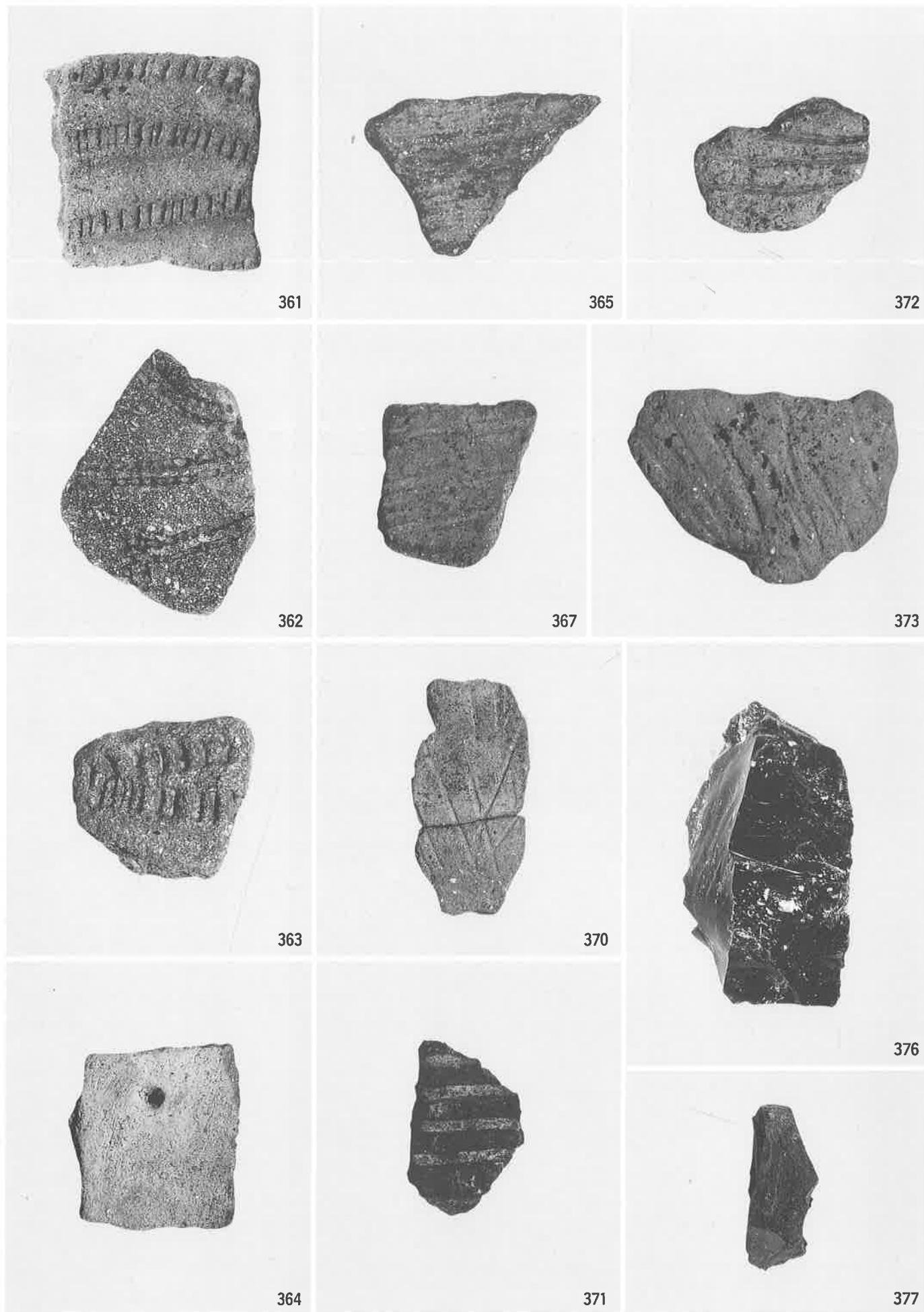




a VI区下段全景（東から）



b VI区下段全景（真上から）



VII区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	まがりたいせき							
書名	曲り田遺跡－第3次調査－（上）							
副書名	糸島地区消防厚生施設組合 斎場建設に伴う文化財調査							
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第27集							
編著者名	古川秀幸							
編集機関	二丈町教育委員会							
所在地	福岡県糸島郡二丈町大字深江1360							
発行年月日	平成13年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
曲り田	福岡県糸島郡 二丈町 大字 石崎字曲り田	40462		33度 31分 02秒	130度 09分 45秒	981001 ～ 000331	30,947m ²	糸島斎場 建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
曲り田	集落	縄文 ／ 平安	竪穴式住居 溝状遺構 掘立柱建物	縄文土器 弥生土器 石器 須恵器 土師器		古墳時代初頭の焼失住居 弥生時代後期の溝状遺構 縄文中期の土器(並木式)		

石崎 曲り田遺跡

－第3次調査－（上）

二丈町文化財調査報告書

第27集

発行 二丈町教育委員会

福岡県糸島郡二丈町大字深江1360

印刷 株式会社 西日本新聞印刷

